

西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書（28）

市営農道整備事業 川脇地区（農山漁村活性化支援プロジェクト交付金事業）

市営農業基盤整備事業 川脇地区農道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

ながさこいせき  
長迫遺跡

ふたついしいせき  
二石遺跡

2020年3月

鹿児島県西之表市教育委員会



## 序 文

本報告書は、市営農道整備事業に伴い発掘調査を実施した長迫遺跡・二石遺跡の報告書であります。

種子島は、黒潮海流の中に位置し、なだらかな大地と数多くの小川があり、緑豊かな照葉樹林が繁茂し、古くから自然の恵みを受け豊かな環境のもとにあることから、これまでに島の各所から数多くの遺跡が発見され、発掘調査が行われています。

この両遺跡からは、縄文時代早期の吉田式土器をはじめとする土器や石器類が多数出土し、特に国内では類例の少ない特異な石器類が3点発見され、縄文時代の精神文化を考える上で極めて貴重なものとなりました。

本報告書が学術的文献として活用されるのはもとより、市民の文化財保護意識高揚の一助となることを念じる次第であります。

最後に、本報告書を刊行するにあたり、ご協力をいただきました鹿児島県教育庁文化財課及び同県立埋蔵文化財センターをはじめ、遺物について貴重なご助言をいただいた諸先生方に対して厚くお礼を申し上げます。

令和2年3月

西之表市教育委員会教育長

大平 和男

## 報告書抄録

ふりがな	ながさこいせき・ふたついしいせき							
書名	長迫遺跡・二石遺跡							
副書名	市営農道整備事業 川脇地区（農山漁村活性化支援プロジェクト交付金事業） 市営農業基盤整備事業 川脇地区農道に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	28							
編集者名	沖田純一郎							
編集機関	西之表市教育委員会							
所在地	〒891-3193 鹿児島県西之表市西之表7612番地							
発行年月日	2020年3月27日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長迫遺跡	鹿児島県 西之表市 安城川脇	462136	106	30° 38' 30"	131° 03' 12"	20131121 20140312	712.3 m <sup>2</sup>	農道整備事業
二石遺跡	鹿児島県 西之表市 安城大野	462136	124	30° 38' 15"	131° 03' 12"	20140916 20150109	1109 m <sup>2</sup>	農道整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長迫遺跡	散布地	縄文時代早期		隆起文土器 貝殻文系土器 吉田式 塞ノ神式等 石器類 石鏃・砥石・石皿 磨石敲石・石偶 丁字型磨製異形石器				
二石遺跡	散布地	縄文時代早期	集石 3	隆起文土器 貝殻文系土器 吉田式 下剥峯式 塞ノ神式等 石器類 石鏃・石斧・砥石 磨石敲石・石皿等 石製装飾品				

## 例　言

1. 本書は、市営農道整備事業・市営農業基盤整備事業に伴う長迫遺跡、二石遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は、西之表市農林水産課の依頼を受け、西之表市教育委員会が実施した。
3. 本書に用いたレベル数値は、西之表市農林水産課が作成した地形図に基づく海拔高である。
4. 本書の遺物番号は遺跡ごとに通し番号を付け、本文及び挿図・図版番号と一致する。
5. 発掘調査における測量・実測・写真撮影は和田正樹が主となって行ない、前之園公貴荒木真紀子・宇都美保子・山口美香がその補助を行った。
6. 本書の執筆と編集は沖田が行い、遺物の復元・拓本・実測及び図面の浄書は本市の埋蔵文化財整理作業員が行った。石鐵・石斧など石器類の一部は大福コンサルタント（株）及び鹿児島県立埋蔵文化財センターに実測・浄書を依頼し、他の石器類については上記の者が実測・浄書を行った。
7. 写真図版の遺物撮影は沖田及び菊池一文氏が行った。長迫遺跡遺物 No559 は、鹿児島県立埋蔵文化財センターが撮影を行った。
8. 出土試料の科学分析はパリノ・サーヴェイ（株）が行った。
9. 発掘調査及び整理作業に関して、鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター・鹿児島県文化振興財團埋蔵文化財調査センター・鹿児島大学埋蔵文化財調査センター及び同志社大学教授木ノ江和同教授・熊本大学大坪志子准教授等の指導・協力を得た。
10. 出土遺物は西之表市教育委員会（西之表市埋蔵文化財調査室）で保管し、種子島開発総合センター「鉄砲館」にて展示・活用する。

# 目 次

序文

報告書抄録

例言

## 本文

第Ⅰ章 調査の経過	2	第Ⅳ章 二石遺跡 発掘調査の概要	120
第1節 調査に至る経緯	2	第1節 調査の概要	120
第2節 調査の組織	2	第2節 層位	120
第3節 調査の経過	6	第3節 遺構	128
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	9	第4節 遺物	128
第1節 自然環境	6	(1) 土器	128
第2節 歴史的環境	10	(2) 石器	134
第3節 遺跡の環境	11	第Ⅴ章 科学分析	189
第Ⅲ章 長迫遺跡 発掘調査の概要	14	長迫遺跡出土試料の植物珪酸体分析	190
第1節 調査の概要	14	二石遺跡出土炭化材の年代と樹種	193
第2節 層位	14	第VI章 長迫遺跡・二石遺跡調査のまとめ	197
第3節 遺構	21	第1節 調査結果	197
第4節 遺物	21	第2節 遺構	197
(1) 土器	21	第3節 遺物	197
(2) 石器	23	(1) 土器	197
		(2) 石器	198
		第4節 まとめ	198

## 挿図（長迫遺跡）

第1図 調査地位置図	1	第17図 出土土器(2)	33
第2図 長迫遺跡・二石遺跡周辺遺跡図	12	第18図 出土土器(3)	34
第3図 長迫遺跡発掘調査対象地	15	第19図 出土土器(4)	35
第4図 発掘調査対象地グリッド配置図	16	第20図 出土土器(5)	36
第5図 土層断面図(1)	17	第21図 出土土器(6)	37
第6図 土層断面図(2)	18	第22図 出土土器(7)	38
第7図 土層断面図(3)	19	第23図 出土土器(8)	39
第8図 土層断面図(4)	20	第24図 出土土器(9)	40
第9図 全遺物出土状況	25	第25図 出土土器(10)	41
第10図 全土器出土状況	26	第26図 出土土器(11)	42
第11図 口縁部出土状況	27	第27図 出土土器(12)	43
第12図 胸部出土状況	28	第28図 出土土器(13)	44
第13図 底部出土状況	29	第29図 出土土器(14)	45
第14図 全石器出土状況	30	第30図 出土土器(15)	46
第15図 石器種別出土状況	31	第31図 出土土器(16)	47
第16図 出土土器(1)	32	第32図 出土土器(17)	48

第33図 出土土器(18).....	49	第47図 出土土器(32) .....	63
第34図 出土土器(19).....	50	第48図 出土石器(33) .....	64
第35図 出土土器(20) .....	51	第49図 出土石器(1) .....	65
第36図 出土土器(21) .....	52	第50図 出土石器(2) .....	66
第37図 出土土器(22) .....	53	第51図 出土石器(3) .....	67
第38図 出土土器(23) .....	54	第52図 出土石器(4) .....	68
第39図 出土土器(24) .....	55	第53図 出土石器(5) .....	69
第40図 出土土器(25) .....	56	第54図 出土石器(6) .....	70
第41図 出土土器(26) .....	57	第55図 出土石器(7) .....	71
第42図 出土土器(27) .....	58	第56図 出土石器(8) .....	72
第43図 出土土器(28) .....	59	第57図 出土石器(9) .....	73
第44図 出土土器(29) .....	60	第58図 出土石器(10) .....	74
第45図 出土土器(30) .....	61	第59図 出土石器(11) .....	75
第46図 出土土器(31) .....	62	第60図 出土石器(12) .....	76

#### 挿図(二石遺跡)

第1図 発掘調査対象地 .....	121	第21図 出土土器(4) .....	145
第2図 発掘調査対象地グリッド配置図 .....	122	第22図 出土土器(5) .....	146
第3図 土層断面図(1) .....	123	第23図 出土土器(6) .....	147
第4図 土層断面図(2) .....	124	第24図 出土土器(7) .....	148
第5図 土層断面図(3) .....	125	第25図 出土土器(8) .....	149
第6図 土層断面図(4) .....	126	第26図 出土土器(9) .....	150
第7図 土層断面図(5) .....	127	第27図 出土土器(10) .....	151
第8図 遺構配置図 .....	129	第28図 出土土器(11) .....	152
第9図 集石(1) .....	130	第29図 出土土器(12) .....	153
第10図 集石(2) .....	131	第30図 出土土器(13) .....	154
第11図 全遺物出土状況 .....	135	第31図 出土土器(14) .....	155
第12図 全土器出土状況 .....	136	第32図 出土石器(1) .....	156
第13図 口縁部出土状況 .....	137	第33図 出土石器(2) .....	157
第14図 脊部出土状況 .....	138	第34図 出土石器(3) .....	158
第15図 底部出土状況 .....	139	第35図 出土石器(4) .....	159
第16図 全石器出土状況 .....	140	第36図 出土石器(5) .....	160
第17図 石器種別出土状況 .....	141	第37図 出土石器(6) .....	161
第18図 出土土器(1) .....	142	第38図 出土石器(7) .....	162
第19図 出土土器(2) .....	143	第39図 出土石器(8) .....	163
第20図 出土土器(3) .....	144	第40図 出土石器(9) .....	164

#### 表

第1表 長迫遺跡・二石遺跡周辺遺跡地名表 13

#### 表(長迫遺跡)

第2表 土器観察表(1) .....	77	第4表 土器観察表(3) .....	79
第3表 土器観察表(2) .....	78	第5表 土器観察表(4) .....	80

第6表 土器観察表(5) .....	81	第10表 土器観察表(9) .....	85
第7表 土器観察表(6) .....	82	第11表 土器観察表(10) .....	86
第8表 土器観察表(7) .....	83	第12表 土器観察表(11) .....	87
第9表 土器観察表(8) .....	84	第13表 石器観察表(1) .....	88

#### 表(二石遺跡)

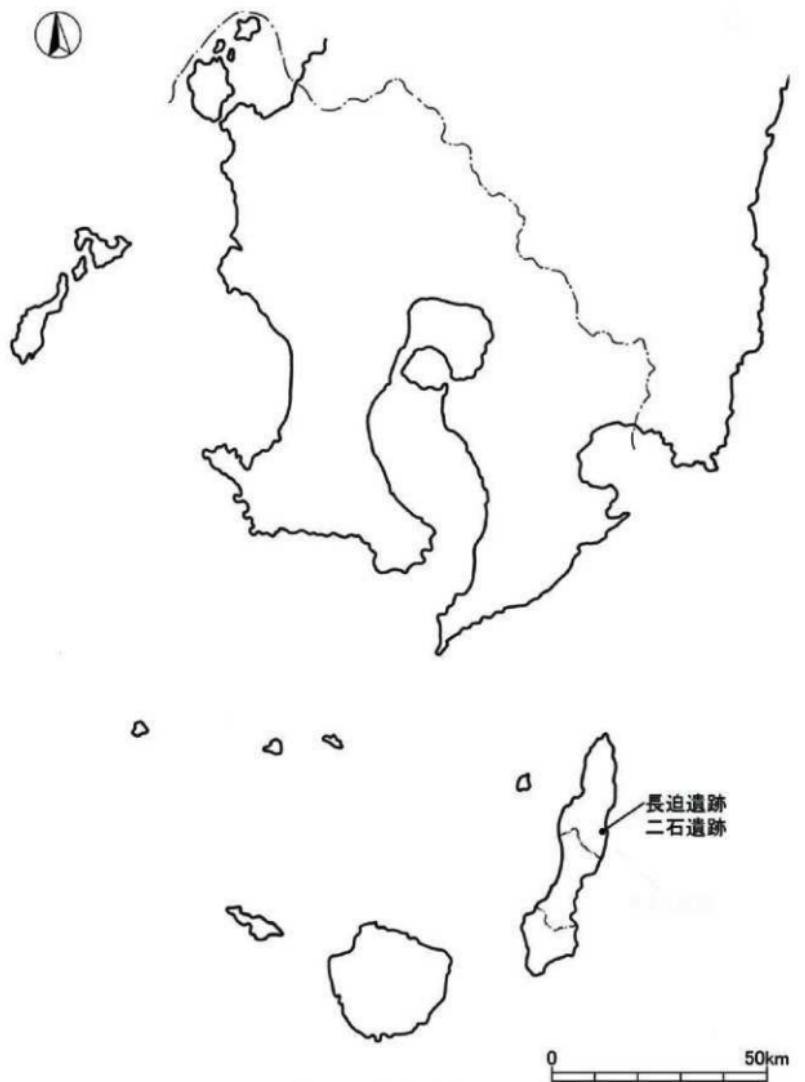
第1表 土器観察表(1) .....	165	第5表 土器観察表(5) .....	169
第2表 土器観察表(2) .....	166	第6表 石器観察表(1) .....	169
第3表 土器観察表(3) .....	167	第7表 石器観察表(2) .....	170
第4表 土器観察表(4) .....	168		

#### 写真図版(長迫遺跡)

図版1 発掘調査状況 .....	89	図版17 出土土器 .....	105
図版2 遺物出土状況 .....	90	図版18 出土土器 .....	106
図版3 土器出土状況 .....	91	図版19 出土土器 .....	107
図版4 石器出土状況 .....	92	図版20 出土土器 .....	108
図版5 出土土器 .....	93	図版21 出土土器 .....	109
図版6 出土土器 .....	94	図版22 出土土器 .....	110
図版7 出土土器 .....	95	図版23 出土土器 .....	111
図版8 出土土器 .....	96	図版24 出土土器 .....	112
図版9 出土土器 .....	97	図版25 出土土器 .....	113
図版10 出土土器 .....	98	図版26 出土土器 .....	114
図版11 出土土器 .....	99	図版27 出土石器 .....	115
図版12 出土土器 .....	100	図版28 出土石器 .....	116
図版13 出土土器 .....	101	図版29 出土石器 .....	117
図版14 出土土器 .....	102	図版30 出土石器 .....	118
図版15 出土土器 .....	103	図版31 出土石器 .....	119
図版16 出土土器 .....	104		

#### 写真図版(二石遺跡)

図版1 発掘調査状況 .....	171	図版11 出土土器 .....	181
図版2 遺物出土状況 .....	172	図版12 出土土器 .....	182
図版3 集石遺構 .....	173	図版13 出土土器 .....	183
図版4 土器出土状況 .....	174	図版14 出土石器 .....	184
図版5 石器出土状況 .....	175	図版15 出土石器 .....	185
図版6 出土土器 .....	176	図版16 出土石器 .....	186
図版7 出土土器 .....	177	図版17 出土石器 .....	187
図版8 出土土器 .....	178	図版18 出土石器 .....	188
図版9 出土土器 .....	179	図版19 出土石器 .....	200
図版10 出土土器 .....	180		



第1図 調査地位置図

# 第Ⅰ章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

西之表市農林水産課（以下市農林水産課）は、西之表市安城地区において農道整備事業を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について西之表市教育委員会社会教育課文化係（以下市教委）に照会した。

これをうけて、市教委が平成23年6月に埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、事業区内に長迫遺跡・二石遺跡の2遺跡が所在することが判明した。

分布調査の結果をもとに市農林水産課・市教委は、遺跡の取り扱いについて協議を行い、工事年度等を考慮しながら、工事対象地内の遺跡の有無・範囲・内容等を把握するため、埋蔵文化財確認調査を実施することとなった。

長迫遺跡・二石遺跡の確認調査は西之表市教育委員会が調査主体となり、平成23年度に実施した。調査の結果、土器・石器などの遺物が出土し遺物包含層が確認された。時期区分では縄文時代早期のもので、両遺跡ともに工事対象地内に遺跡は広がっていることが確認された。

確認調査の結果に基づき、西之表市教育委員会と市農林水産課・鹿児島県教育厅文化財課（以下県文化財課）で遺跡の取り扱いについて協議した結果、工事対象地内において遺跡の現状保存は不可能であり、緊急発掘調査を行い記録保存を図ることとなった。

長迫遺跡・二石遺跡の緊急発掘調査は西之表市教育委員会が調査主体となり、平成25年度に長迫遺跡、平成26年度に二石遺跡の調査を行った。

長迫遺跡・二石遺跡の整理・報告書作成作業は緊急発掘調査終了後から年次的に行われたが、他事業に係る遺跡の緊急発掘調査、整理・報告書作成作業と重なったことや、両遺跡の整理作業中に類例の少ない遺物が数点発見され、この遺物に関して専門家の調査・指導助言等が必要になったことから、令和元年度まで整理・報告書作成作業が及ぶこととなった。

## 第2節 調査の組織

### （1）長迫遺跡

#### 緊急発掘調査組織（平成25年度）

調査主体	西之表市教育委員会		
調査責任者	西之表市教育委員会	教育長	立石 望
調査企画	西之表市教育委員会社会教育課	課長	中村 章二
	西之表市教育委員会社会教育課	文化係長	沖田純一郎
調査庶務担当	西之表市教育委員会社会教育課	主査	日高 成子
調査担当	西之表市教育委員会社会教育課	主査	和田 正樹
発掘調査作業員	長野実孝 小川浩伸 上妻忠男 川原明子 川原淳子 鮫島新吉 武田芳秀 宮野幸二 浜添むつ子 仲林廉 宇都美保子 荒木眞紀子		

## 整理・報告書作成作業組織

(平成 26 年度)

作業主体者	西之表市教育委員会
作業責任者	西之表市教育委員会 教育長 立石 望
作業企画	西之表市教育委員会社会教育課 課長 中村 章二
	西之表市教育委員会社会教育課 文化係長 沖田純一郎
作業庶務担当	西之表市教育委員会社会教育課 主査 日高 成子
整理作業担当	西之表市教育委員会社会教育課 主査 和田 正樹
整理作業員	宇都美保子 荒木眞紀子 山口美香

(平成 27 年度)

作業主体者	西之表市教育委員会
作業責任者	西之表市教育委員会 教育長 立石 望
作業企画	西之表市教育委員会社会教育課 課長 松下 成悟
	西之表市教育委員会社会教育課 文化係長 沖田純一郎
作業庶務担当	西之表市教育委員会社会教育課 主査 和田 正樹
整理作業担当	西之表市教育委員会社会教育課 主査 和田 正樹
整理作業員	宇都美保子 荒木眞紀子 篠原典子

(平成 28 年度)

作業主体者	西之表市教育委員会
作業責任者	西之表市教育委員会 教育長 立石 望
作業企画	西之表市教育委員会社会教育課 課長 松下 成悟
	西之表市教育委員会社会教育課 文化係長 沖田純一郎
作業庶務担当	西之表市教育委員会社会教育課 主査 和田 正樹
整理作業担当	西之表市教育委員会社会教育課 主査 和田 正樹
整理作業員	荒木眞紀子 篠原典子

(平成 29 年度)

作業主体者	西之表市教育委員会		
作業責任者	西之表市教育委員会 教育長 立石 望		
(平成 29 年 6 月 30 日まで)			
	教育長 大平 和男		
(平成 29 年 7 月 1 日～)			
作業企画	西之表市教育委員会社会教育課 課長 松下 成悟		
	西之表市教育委員会社会教育課 参事 沖田純一郎		
作業庶務担当	西之表市教育委員会社会教育課 参事 沖田純一郎		

整理作業担当 西之表市教育委員会社会教育課 参事 沖田純一郎  
整理作業員 荒木眞紀子 篠原典子 中園愛

(平成 30 年度)

作業主体者 西之表市教育委員会  
作業責任者 西之表市教育委員会 教育長 大平 和男  
作業企画 西之表市教育委員会社会教育課 課長 松下 成悟  
西之表市教育委員会社会教育課 参事 沖田純一郎  
作業庶務担当 西之表市教育委員会社会教育課 参事 沖田純一郎  
整理作業担当 西之表市教育委員会社会教育課 参事 沖田純一郎  
整理作業員 荒木眞紀子 篠原典子 中園愛 藤本まゆみ 古元真知子

(平成 31 年度・令和元年度)

作業主体者 西之表市教育委員会  
作業責任者 西之表市教育委員会 教育長 大平 和男  
作業企画 西之表市教育委員会社会教育課 課長級参事 沖田純一郎  
作業庶務担当 西之表市教育委員会社会教育課 課長級参事 沖田純一郎  
整理作業担当 西之表市教育委員会社会教育課 課長級参事 沖田純一郎  
整理作業員 荒木眞紀子 岩崎寿里 中園愛 藤本まゆみ 古元真知子 元吉真澄

(2) 二石追跡

緊急発掘調査組織 (平成 25 年度)

調査主体 西之表市教育委員会  
調査責任者 西之表市教育委員会 教育長 立石 望  
調査企画 西之表市教育委員会社会教育課 課長 中村 章二  
西之表市教育委員会社会教育課 文化係長 沖田純一郎  
調査庶務担当 西之表市教育委員会社会教育課 主査 日高 成子  
調査担当 西之表市教育委員会社会教育課 主査 和田 正樹  
西之表市教育委員会社会教育課 主事 前之園 公貴  
発掘調査作業員 小川浩伸 上妻忠男 川原明子 武田芳秀 宮野幸二 向井三義  
小川千代子 鮫島あゆ子 武田美津子 西中香 徳永季就  
小川義男 中野敏光 宇都美保子 荒木眞紀子 山口美香

整理・報告書作成作業組織

(平成 28 年度)

作業主体者 西之表市教育委員会  
作業責任者 西之表市教育委員会 教育長 立石 望

作業企画 西之表市教育委員会社会教育課 課長 松下 成悟  
西之表市教育委員会社会教育課 文化係長 沖田純一郎  
作業庶務担当 西之表市教育委員会社会教育課 主査 日高 成子  
整理作業担当 西之表市教育委員会社会教育課 主査 和田 正樹  
整理作業員 荒木眞紀子 篠原典子

(平成 29 年度)

作業主体者 西之表市教育委員会  
作業責任者 西之表市教育委員会 教育長 立石 望  
(平成 29 年 6 月 30 日まで)  
教育長 大平 和男  
(平成 29 年 7 月 1 日～)

作業企画 西之表市教育委員会社会教育課 課長 松下 成悟  
西之表市教育委員会社会教育課 参事 沖田純一郎  
作業庶務担当 西之表市教育委員会社会教育課 参事 沖田純一郎  
整理作業担当 西之表市教育委員会社会教育課 参事 沖田純一郎  
整理作業員 荒木眞紀子 篠原典子 中園愛

(平成 30 年度)

作業主体者 西之表市教育委員会  
作業責任者 西之表市教育委員会 教育長 大平 和男  
作業企画 西之表市教育委員会社会教育課 課長 松下 成悟  
西之表市教育委員会社会教育課 参事 沖田純一郎  
作業庶務担当 西之表市教育委員会社会教育課 参事 沖田純一郎  
整理作業担当 西之表市教育委員会社会教育課 参事 沖田純一郎  
整理作業員 荒木眞紀子 篠原典子 中園愛

(平成 31 年度・令和元年度)

作業主体者 西之表市教育委員会  
作業責任者 西之表市教育委員会 教育長 大平 和男  
作業企画 西之表市教育委員会社会教育課 課長級参事 沖田純一郎  
作業庶務担当 西之表市教育委員会社会教育課 課長級参事 沖田純一郎  
整理作業担当 西之表市教育委員会社会教育課 課長級参事 沖田純一郎  
整理作業員 荒木眞紀子 岩崎寿里 中園愛 藤本まゆみ 古元真知子 元吉真澄

### 第3節 調査の経過

#### (1) 長迫遺跡

長迫遺跡の緊急発掘調査は、平成25年11月から平成26年3月まで実施した。工事計画図面をもとに、調査対象地に20mグリッドを設置したが、この20mをさらに10mごとに細分した。調査は重機によりアカホヤ火山灰層までを除去した後、人力により掘り下げを行い進めていった。以下調査の経過については日誌抄をもってかえる。

#### 平成25年11月～平成26年3月実施

11月21日～23日	プレハブ・ベルトコンベア・機材・道具類等の搬入。
11月26日～29日	調査地内8B・9A・9B・10A・10B区重機による表土剥ぎ。ベルトコンベアの設置。9A・9B・10A・10B区掘り下げ。土器片(塞ノ神式、吉田式)、石鏃出土。市農林水産課村永氏・中脇氏・市教委沖田文化係長来跡。
12月2日～6日	8B・9A・9B・10A・10B区掘り下げ。遺物出土状況写真撮影。平板・レベル測量。遺物取り上げ。土層断面分層後、土層断面図作成。ベルトコンベア移動、追加設置。土器片、石器類出土。市教委沖田文化係長来跡。
12月9日～13日	8B・9A・9B区掘り下げ。土層断面分層後、清掃、土層断面図作成。断面写真撮影。平板・レベル測量。遺物取り上げ。ベルトコンベア撤去。川脇集落川原透氏・安城校区長古田氏来跡。
12月16日～20日	8B・9A・9B区底面清掃。平板・レベル測量。遺物取り上げ、写真撮影。土層断面図作成。土器片、円礫、台石出土。
12月26日	出土遺物洗浄。道具の片づけ。
1月6日～10日	8B・9A・9B・10A・10B区重機による埋め戻し。11A・7A・7B・8A・8B区表土剥ぎ。11A・7B・8A・8B区掘り下げ。昇降用土嚢作り、設置。ベルトコンベア移設。土器片、石皿出土。文化財保護審議委員松下繁氏・ボランティアガイド「じゃろじゃろ」松瀬氏他1名・市教委沖田文化係長来跡。
1月14日～17日	11A清掃。写真撮影。平板・レベル測量。遺物取り上げ。土層断面図作成。7A・7B・8A・8B区掘り下げ。17日8B区よりJ字型の磨製石器出土。
1月20日～24日	7B・8A・8B区掘り下げ。土層断面図作成。清掃。写真撮影。平板・レベル測量、遺物取り上げ。7B・8Aで遺物多数出土。
1月27日～31日	7B・8A・8B・11A区埋め戻し。3B・4A・4B・5A・5B・6A・6B区表土剥ぎ。6A・6B区掘り下げ。ベルトコンベア設置。
2月3日～5日	5A・5B・6A・6B区掘り下げ。清掃。写真撮影。平板・レベル測量、遺物取り上げ。土器片、礫出土。市教委中村社会教育課長・沖田文化係長来跡。
2月12日	6A・6B土層断面図作成。4B・5A・5B区掘り下げ。土器片、礫出土。
2月20日～21日	5A・5B平板・レベル測量、遺物取り上げ。4A・4B・5A区掘り下げ。土器片、石鏃1点出土。磨石、敲石・自然礫多数出土。安城川脇集落長来跡。

2月 24 日～25 日	4A・4B 区掘り下げ清掃。平板・レベル測量、遺物取り上げ。2A・2B・3A・3B 区表土剥ぎ後、掘り下げ。土層断面図作成。4B 北側壁寄りに乳赤褐色で半径約 30 cm 円形状に焼土検出。分析のため、土ごと採取。土器片、石器類出土。高橋建設社長・熊建純原氏・川脇集落長・大野集落長来跡。
2月 26 日～3月 4 日	2A・2B・3A・3B 区表土剥ぎ。掘り下げ。土層断面図作成。平板・レベル測量、遺物取り上げ。種子島中職場体験 3 名、作業に参加。川脇集落長古田氏・大野集落牧瀬氏が民泊の立命館高校生 6 名と来跡。
3月 5 日～8 日	2A・2B・3A・3B・4A・4B・5A・5B・6A・6B 区埋め戻し。7A 区未掘部分表土剥ぎ。
3月 10 日～12 日	7A 区掘り下げ。清掃。写真撮影。平板・レベル測量、遺物取り上げ。土層断面図作成。7A 区埋め戻し。埋土不足分を耕作放棄地より採取。耕作放棄地の整地。発掘調査道具類付。調査終了。 川脇集落川原氏・市教委中村社会教育課長・南種子町教委社会教育課小脇氏・国立歴史民俗博物館研究部総合研究大学院大学山田康弘氏・京都大学文化財総合研究センター富井真氏・東北大学埋蔵文化財調査室首野智則氏・古田校区長来跡。

## (2) 二石遺跡

二石追遺跡の緊急発掘調査は、平成 26 年 9 月から平成 27 年 1 月まで実施した。工事計画図面をもとに、調査対象地に 20m グリッドを設置したが、この 20m をさらに 10m ごとに細分した。調査は重機によりアカホヤ火山灰層までを除去した後、人力により掘り下げを行い進めていった。以下調査の経過については日誌をもってかえる。

### 平成 26 年 9 月～平成 27 年 1 月実施

9月 16 日～18 日	16・17・18・19 区表土剥ぎ。幅杭設置のため測量。KBM の設置。プレハブ・ペルトコンペア・排土仮置場設置。道具類の搬入。遮光ネット張り。17・18・19 区掘り下げ。吉田式土器、石鏃出土。19 区は本来の調査対象地ではないため除外する。(掘削状況から包含層残存の気配なし。) 中村社会教育課長・大野集落牧瀬義雄氏来跡。
9月 22 日	16・17・18 区掘り下げ。18 区南側壁面調整。17・18 区土層断面分層。
9月 29 日 ～10月 3 日	16・17・18 区掘り下げ。清掃。写真撮影。平板・レベル測量、遺物取り上げ。土層断面図作成。
10月 6 日～7 日	台風 18 号によるプレハブ・仮設トイレ等の被害への対処。台風 19 号対策。18 区土層断面図作成。16・17・18 区埋め戻し。
10月 14 日～17 日	16・17・18 区ハエ敷き作業。8・9・10 区表土剥ぎ掘り下げ。調査地案内板設置。土器片、石鏃 3 点出土。

10月20日～24日	8・9・10区掘り下げ。清掃。写真撮影。平板・レベル測量、遺物取り上げ。土層断面図作成。石鏃・敲石片出土。20日8区で石製装飾品出土。
10月27日～30日	9・10区写真撮影。平板・レベル測量、遺物取り上げ。土層断面図作成。8・9・10区埋め戻し。5・6・7区表土剥ぎ。土器片、石器類出土。
11月5日～7日	5・6・7区掘り下げ。排土処理。土甕作り。6区石斧1点出土。5・6区塞ノ神式土器が吉田式土器と同レベルに出土。
11月10日～13日	5・6・7区掘り下げ。清掃。写真撮影。平板・レベル測量、遺物取り上げ。土層断面図作成。7区塞ノ神式土器と吉田式土器が混在する傾向。
11月18日～21日	5・6・7区埋め戻し。表土剥ぎ。0・1・2区掘り下げ。1区石斧2点出土。市農業委員会前田事務局長・臨時職員1名来跡。
11月26日～28日	0・1・2区掘り下げ。写真撮影。平板・レベル測量、遺物取り上げ。土層断面図作成。石が多く土器は小片が少し出土する程度。
12月1日～5日	清掃。写真撮影。平板・レベル測量、遺物取り上げ。土層断面図作成。調査グリッドの再設定。3・4・5区掘り下げ。16区表土剥ぎ。1区石器・礫の集中出土地は、集石遺構と判断（1号集石）。中村社会教育課長・沖田文化係長来跡。
12月8日～12日	清掃。写真撮影。平板・レベル測量、遺物取り上げ。土層断面図作成。集石1号断面図作成。取り上げ後掘り込み面調査。11・12・13区表土剥ぎ。13・14・15・16区掘り下げ。土層分層。13区2号集石検出。実測、平面図・断面図作成。15区台石、石皿類出土。13・14区吉田式土器を中心に遺物出土。中村社会教育課長来跡。
12月15日～19日	11・12・13・14・15・16区掘り下げ。分層。清掃。写真撮影。平板・レベル測量、遺物取り上げ。土層断面図作成。13区2号集石遺物取り上げ。0・1・2・3・4・5区埋め戻し。12区石斧1点出土。2号集石より県道側～2m先付近北側壁で3号集石を検出。
12月22日～26日	11・12区掘り下げ。大雨により区内が浸水し、排水ポンプにて排水しながら作業。土層断面図作成。清掃。写真撮影。平板・レベル測量遺物取り上げ。3号集石断面図作成。13・14・15・16区埋め戻し。5・6・7区砂利での埋め戻し。道具片付け。中村社会教育課長・沖田文化係長来跡。
1月5日～9日	5区未掘箇所表土剥ぎ、掘り下げ。5・11・12・13区埋め戻し。調査終了。沖田文化係長来跡。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 自然環境

長迫遺跡・二石遺跡の所在する種子島は、大隅半島最南端の佐多岬から南東約40kmの海上に位置する。面積447.0m<sup>2</sup>、延長52km、幅12kmで中種子町野間の地央部では約6kmに過ぎない。最高海拔は282.3mの比較的平で、九州最高峰の宮之浦岳（標高1935m）を有する屋久島とは地形的に対照的な島である。島の長軸は、北北東から南南西に細長く伸びており、九州本土や琉球列島の配置に近くはない。行政区は北から西之表市・中種子町・南種子町と1市2町からなる。

西之表市は、本土に最も近い海の玄関口として人・物の交流拠点となっている。面積は205.66km<sup>2</sup>（馬毛島「8.17km<sup>2</sup>」を含む）で、種子島の総面積の44.4%を占めており、南北の長さは25.2km・東西の幅は8.2km・周囲は63.0kmであり、東・西・北の3面は海に面し、南は中種子町と接している。気温は、平均気温19.8度の亜熱帯性の気候で四季を通して温暖であり、台風の常襲地帯に位置している。

種子島の地質構造は、島全体に海岸段丘がよく発達しており、種子島北部の国上丘陵地域では高度60m、中部の中種子町中山から油久にかけては高度80m、南部の南種子町門倉付近では高度100mに達する。この海岸段丘は西之表市の東西海岸、中種子町全域、南種子町の西側に見られ、極めて特徴的である。西海岸部には比較的砂丘が発達しているが、東海岸は断崖に富んでいる。島は、二つの断層線によって、地形上、北部・中部・南部に分けることができる。西海岸・西之表市上西大広野と東海岸・西之表市現和田之脇を結ぶ西南向きの断層線が島の北部と中部の境となると言われている。北部には、島で2番目に高い天女神楽（あまめかぐら）

「標高237.9m」が、風雨の浸食で開析され台地状となる。北部の大部分は、開析台地や海岸段丘が不規則に絡み合い、変化に富んだ地形を呈している。

西海岸・西之表市上西大広野と東海岸・西之表市現和田之脇を結ぶ西南向きの断層線と西海岸・中種子町納官の竹之川と中種子町野間をとおり、東海岸中種子町中山を結ぶ断層線の間が、中部とされる。島の最高標高石之峰口（標高282.3m）もこの地に位置する。開析台地の発達と海岸段丘が不規則に交錯していて、一見低平と言われる種子島の地形も複雑さを呈している。

南部は、西海岸・中種子町納官の竹之川と中種子町野間をとおり、東海岸中種子町中山を結ぶ断層線から南であり、西海岸は單調で屈曲が少なく、「長浜」と呼ばれる砂丘が続く。これに対し、東海岸部は中種子町増田の大城海岸から中種子町熊野海岸まで、沈水によって入り組んだ複雑な海岸線（アスコ海岸）が継続し、美しい風景を形成している。南部の中央部は、起伏の少ない中種子中央台地と呼ばれ、これに続く南種子中央台地は比較的開析が進み、地形が複雑となる。西海岸は、海岸段丘も急傾斜し、平地が少なくなる傾向にある。南種子町門倉岬から竹崎にかけては、南流する鹿鳴川・郡川・宮瀬川などで沖積平原が形成される。地質構造は、島全体に海岸段丘がよく発達しており、種子島北部の国上丘陵地域では高度60m、中部の中種子町中山から油久にかけては高度80m、南部の南種子町門倉付近では高度100mにも達す

る。この海岸段丘は西之表市の東西海岸、中種子町全域、南種子町の西側に見られ、極めて特徴的である。

島の基盤となる地層は熊毛層群と呼ばれる砂岩・頁岩の互層である。この層の上を不整合に茎永層群及び増田層、長谷層、竹之川層が覆っている。

熊毛層群の堆積した時代は、新生代古第三紀、始新世の頃とされ、本層群は大きくさらに3つの層に分けられている。(門倉崎層・立石層・西之表層) 茎永層群は、特色のある3つの層に細分化されており、田代層・河内層・大崎層と名付けられている。最上部は、新期ローム層が堆積している。茎永層群はそこから出土する示準化石から中新世前期頃と言われており、種子島の環境や地形の変化の過程を推論できる貴重なものである。増田層はほぼ全域にわたって認められる淡茶褐色砂を主体とする地層である。長谷層は中種子町中田以南から南種子町門倉岬に至る地に広く発達し、礫層が主体であり、第四紀前期と推定されている。竹之川層は中種子町竹之川から中種子町屋久津に至る西海岸地帯に見られる。基底礫層を伴い熊毛層群や増田層を不整合に覆い、平均10mの層位である。他、火山灰起源の風成層であるローム層や、沖積世の堆積物として、旧砂丘砂層・現砂丘砂層・河川堆積物などが見られる。種子島は全島の99%以上が堆積岩からなるが、一部の限られた地にアルカリ岩体のランプロファイア・セキエイハシガン岩体・ゲンブ岩質岩塊の枕状溶岩と3種類の火成岩が見られる。

## 第2節 歴史的環境

種子島の名は古く天武6年(677年)に史上に現れ、以後は薩・唐と日本を結ぶ南方ルートの港として重要な位置を占めるに至った。建仁元年(1201年頃)平信基が南海12島を領し、種子島入りした。居館は赤尾木周辺にあったと思われ、以後赤尾木は島主種子島氏の府元として栄えていくこととなる。天文12年(1543年)種子島の南端に漂着した中国船に乗船していた、ポルトガル人によってもたらされた鉄砲(火縄銃)は、島主の命により赤尾木の鍛冶職人によって国産化され、近世日本への幕開けとなった。元禄11年(1698年)琉球王から贈られた甘藷が島主の政策によって栽培をはじめて成功し、その後甘藷が全国へ伝播していくことは史実でも明らかとなっている。この南方ルートの要津赤尾木は日向の細島を経て、豊後水道から瀬戸内海を通り京都へ向かう直通ホットラインでもあり、このルートを通じて、中央の文化をダイレクトに吸収したため、学問・武芸・技芸の上でも中央に比肩し得る多くの学者・名人・達人を輩出し、その文化力も高かった。明治以降は全国から多数の移住者を受け入れ、在地の文化と移住者の文化が融合し、種子島島独特の文化が育まれていくこととなつた。

考古学的見地から種子島を概観すると、種子島は南島北部文化課図(本土南九州の影響を受けた南九州文化圏)に属すると考えられている。この南九州文化圏に包括される種子島の遺跡を概観してみると、平成4年に発掘調査が行われた横峯C遺跡で棘拌が島内で初めて検出され、約4万年前の後期旧石器時代の年代値を示し、種子島で初めて旧石器時代の遺跡の存在が明らかとなつた。その後の調査で、旧石器時代の遺跡が続々と発見され、立切遺跡(中種子町)からは、同時期の国内最古級の落とし穴や焼製石斧などの石器類が多數発見され、旧石器時代の様相を調査研究するうえで全国的に注目されている。それ以後のナイフ形石器の文化層は現在

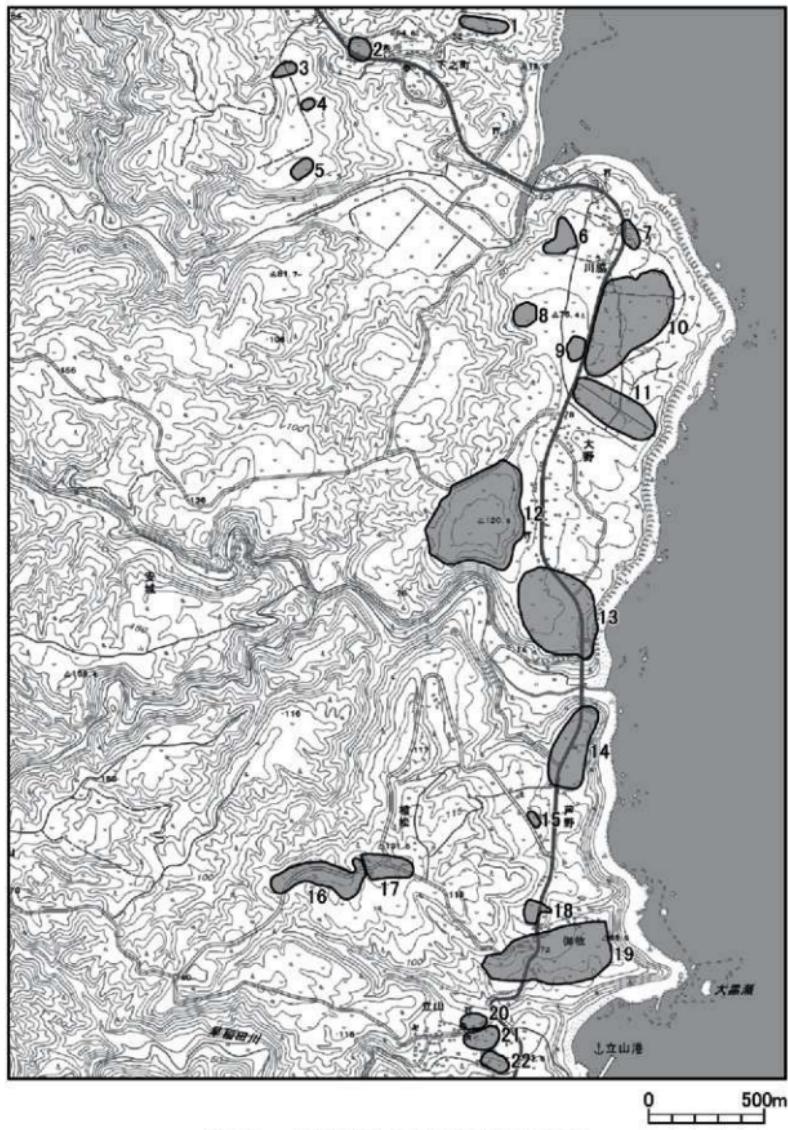
種子島では確認されていないが、旧石器時代終末期とされている細石刃核・細石刃が確認された遺跡は湊遺跡・大中峯遺跡・葉山遺跡（西之表市）・立切遺跡（中種子町）・錢龜遺跡（南種子町）などがある。縄文時代では、近年の調査で縄文時代草創期の良好な資料・遺構が相次いで発見されている。奥ノ仁田遺跡（西之表市）の調査で縄文時代草創期の遺跡が本土以南で初めて確認され、その後三角山遺跡（中種子町）・鬼ヶ野遺跡（西之表市）・横峯C・D遺跡の調査で陸帯文土器片や石器類、多数の遺構が発見されている。その後の縄文時代早期では前平式・吉田式・塞ノ神式・平格式などが出土した遺跡の報告例が多数あり、良好な資料が増加している。特に、平成15年度から約10年間にわたり、西之表市東南部地区（安城・立山地区）において県道整備事業に伴う発掘調査が西之表市教育委員会により実施され、縄文時代早期の遺構や良好な資料（主に吉田式土器が主体）が増加してきている。また、遺跡や出土遺物が国の重要文化財に指定された「廣田遺跡（南種子町）」などをはじめとする、国内最古・国内最多・国内初など極めて重要な遺跡・遺物が島内で発見・報告されている。さらに、弥生時代後期から古墳時代及び中世の時代に島内では砂丘に埋葬址が形成され、良好な状態で遺構や遺物が発見されていることも特筆される。

時代が移り、8世紀になると多羅國が設置され、大和朝廷との関係が深くなるが、国府・国分寺（島府・島分寺）の所在地は未だ解明されていない。中世に入ると「律宗から法華宗への全島宗教改革」、「遣唐船・遣明船の寄港地」、「火縄銃の伝来・国产化」、「ザビエルの寄港」など島で重要な出来事があり、文献史上では確認されているが、考古学的な調査は行われていない。江戸時代に入ると、「甘諸伝来」、「カタリナ永俊尼の種子島への配流（キリスト教）」、「名跡松寿院の三大土木工事・種子島家墓地の整備」などの特筆される出来事があるが、やはり文献史では垣間見ることができるが、考古学的な調査は行われておらず、先史時代の考古学的調査は行われているが、中世以降については、発掘調査等はあまり行われていない状態であり、今後の調査に期待するところが大きい。

平成31年3月、西之表市の西海上12kmに位置する馬毛島で、馬毛島葉山王籬遺跡の発掘調査が行わされた。遺跡の発見の経緯は厚生労働省が馬毛島で行った戦没者遺骨収集確認調査によるものである。調査の結果、同遺跡は中世の埋葬址と古墳時代の貝塚からなる複合遺跡であることが確認され、特に中世の埋葬址としては鹿児島県本土での報告例ではなく、本市の小浜遺跡と奄美・喜界でわずかに確認されているのみで、その類例は極めて少なく、学術的にも非常に重要なものである。

### 第3節 遺跡の環境

長迫遺跡・二石遺跡は西之表市の東南部、安城地区川脇の標高約50～60mの台地に位置する。遺跡の周囲には縄文時代草創期・早期の遺跡が多数所在する。遺跡がこの地に集中する理由として照葉樹林の発達により、植物性食料の確保が容易にできる環境化にあった点や、海岸部までの距離がそれほど遠くないことなどが挙げられる。また各遺跡周辺には名前の付かないような小川や水源地がいたるところにあり、水の確保も十分であったと思われる。石器の石材も、周辺の河原や海岸部に見られることから、石材の採取も容易であったことが伺える。



第2図 長迫遺跡・二石遺跡周辺遺跡図

第1表 長迫遺跡・二石遺跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	仮屋園	西之表市安城平山	縄文時代早期	平成10年農政分布調査
2	通利山	西之表市安城上之町	縄文時代	平成13年県道分布調査 平成15年試掘調査
3	鬼ヶ野A	西之表市安城上之町	縄文時代早期	平成12年確認調査
4	鬼ヶ野B	西之表市安城上之町	縄文時代早期	平成12年確認調査
5	鬼ヶ野	西之表市安城上之町	縄文時代草創期・早期	平成13年発掘調査 出土石器類は県文化財に指定
6	日守C	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成6年確認調査
7	三本松	西之表市安城川脇	縄文時代早期	平成17・18年発掘調査
8	日守B	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成6年確認調査
9	日守	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成7・8年発掘調査
10	長迫	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成23年確認調査 平成25年発掘調査
11	二石	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成23年確認調査 平成26年発掘調査
12	鏡ノ刃	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成17・18年発掘調査
13	東前平	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成14・15年発掘調査
14	芦野	西之表市立山芦野	縄文時代早期	平成16年度発掘調査
15	九郎三工門	西之表市立山芦野	縄文時代	平成3年農政分布調査
16	奥ノ仁田	西之表市立山植松	縄文時代草創期・早期	平成2年発掘調査、平成12年・23年詳細分布調査 出土品は県文化財に指定
17	奥嵐	西之表市立山植松	縄文時代早期	平成5年発掘調査
18	尾呂ノ平	西之表市立山御牧	縄文時代早期	平成13年県道分布調査
19	長崎	西之表市立山御牧	縄文時代早期	平成13年県道分布調査
20	中園A	西之表市立山立山	縄文時代早期	平成23年発掘調査
21	中園B	西之表市立山立山	縄文時代早期・近世	平成23年発掘調査
22	下ノ平	西之表市立山立山	縄文時代早期	平成13年県道分布調査

## 第Ⅲ章 長迫遺跡 発掘調査の概要

### 第1節 調査の概要

長迫遺跡の発掘調査は、調査対象地がほぼ一直線であったため、当初 20mごとに杭を設置し、調査を進めていく予定であったが、遺物の出土量が密であったため、10mに変更して、調査を行った。調査対象地の道路は調査期間中も一部耕作道として利用されていたため、調査対象地全体の表土剥ぎを行う事が難しく、周辺の耕作者と協議・調整を行ないながら、20mごとに表土を重機で取り除いた後、人力で掘り下げながら、遺物及び遺構の検出を行ない、調査終了後はすぐに埋戻し、次の対象地（20m）の表土剥ぎを行ない人力での掘り下げ調査埋戻し作業を繰り返しながらの調査となった。

調査対象地東側にいくにつれ、遺物の出土分布が非常に密となり、遺物の平板実測・レベル測定作業にかなりの時間を割いた。調査地の土層断面は実測作業を行い、遺物出土状況・土層断面・作業状況などは写真撮影で記録を行った。また、焼土が確認されたため、科学分析用に焼土内の土壤の一部をサンプルとして採取した。番号を付けて取上げた遺物は1,067点であった。海岸部（東側）に進むにつれ、遺物の出土量が徐々に増加する傾向がみられた。調査面積は約720 m<sup>2</sup>である。（幅約4m×長さ約190m）

### 第2節 層位

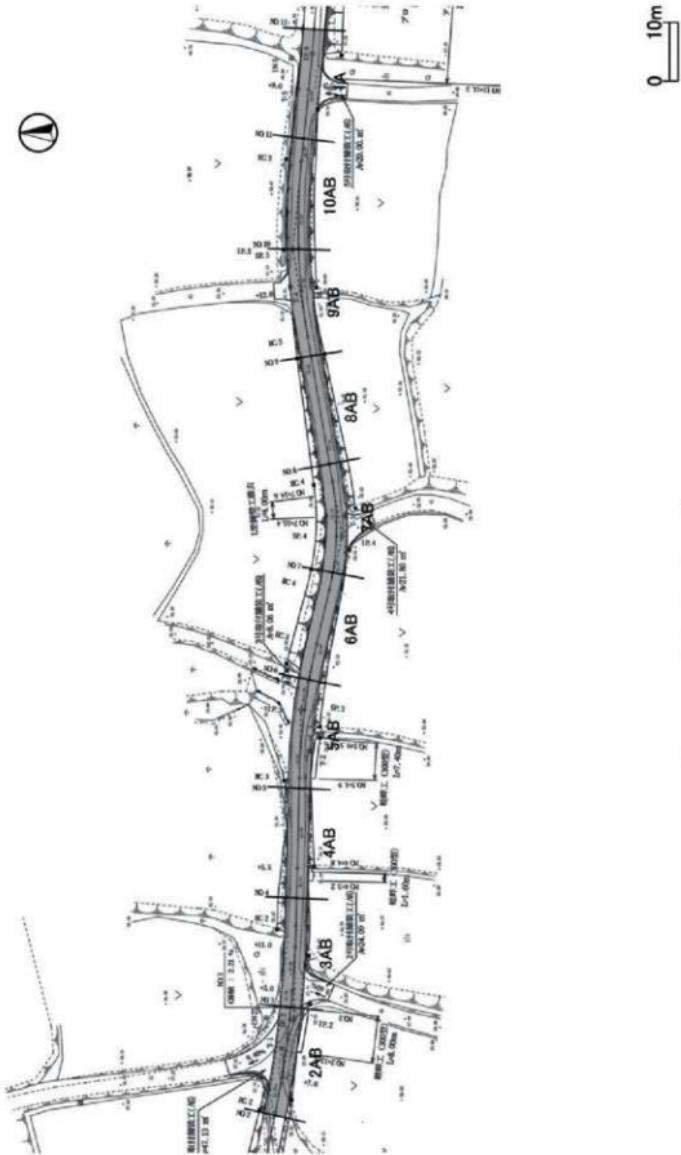
土層は場所によって一部の層が欠落している部分もあるが、基本的には下記のとおりである。土層の堆積状況は下位にいくにつれ良好であった。

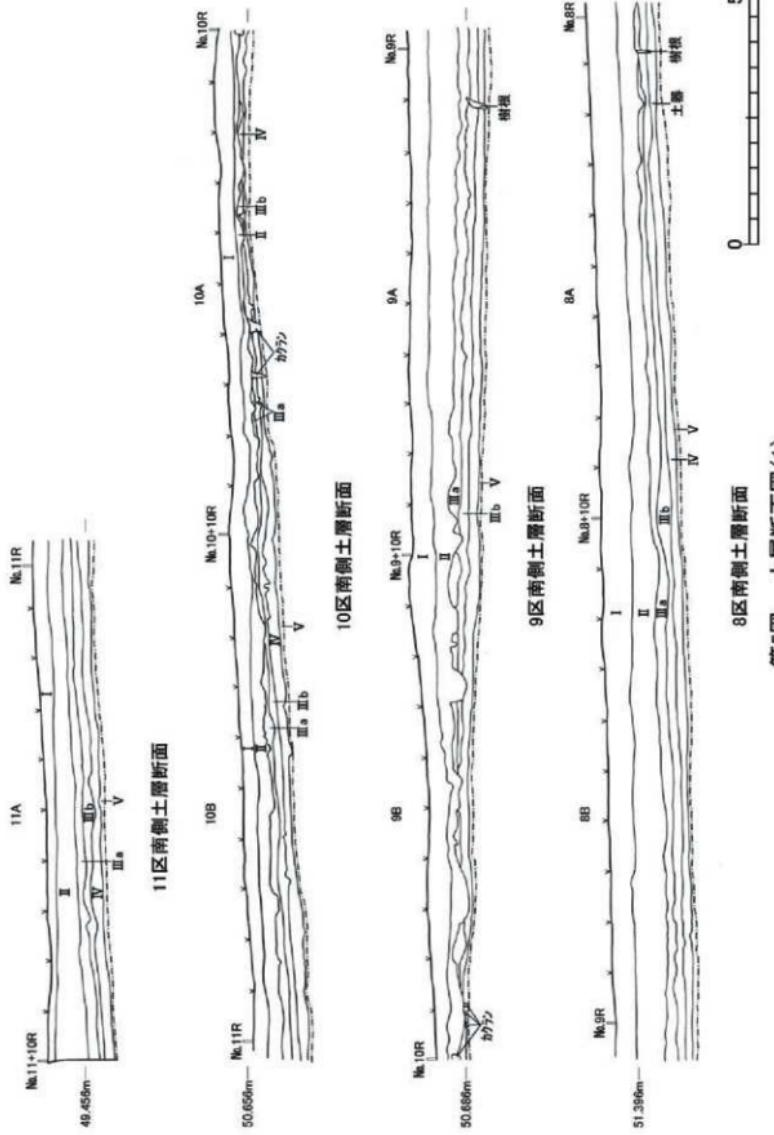
- |               |  |
|---------------|--|
| I層 表土         | ハエ石層を含む。場所によって、著しく堅く締まっている。  |
| II層 黒色土層(旧表土) | 下位にカクラン層が混じる場合あり。  |
| III層 黄橙色火山灰土層 | アカホヤ火山灰層、鬼界カルデラ噴出堆積物。場所によっては、「IIIa」……2次堆積物<br>「IIIb」……1次堆積物に分層可能である。 |
| IV層 ベージュ色粘質土層 | 遺物包含層(縄文時代早期)  |
| V層 黒褐色土層      | 場所によって粘質が強くなる。IV層との分層部分に漸移がみられる。                                     |
| VI層 黄褐色ローム層   | 粘質が強い。   |

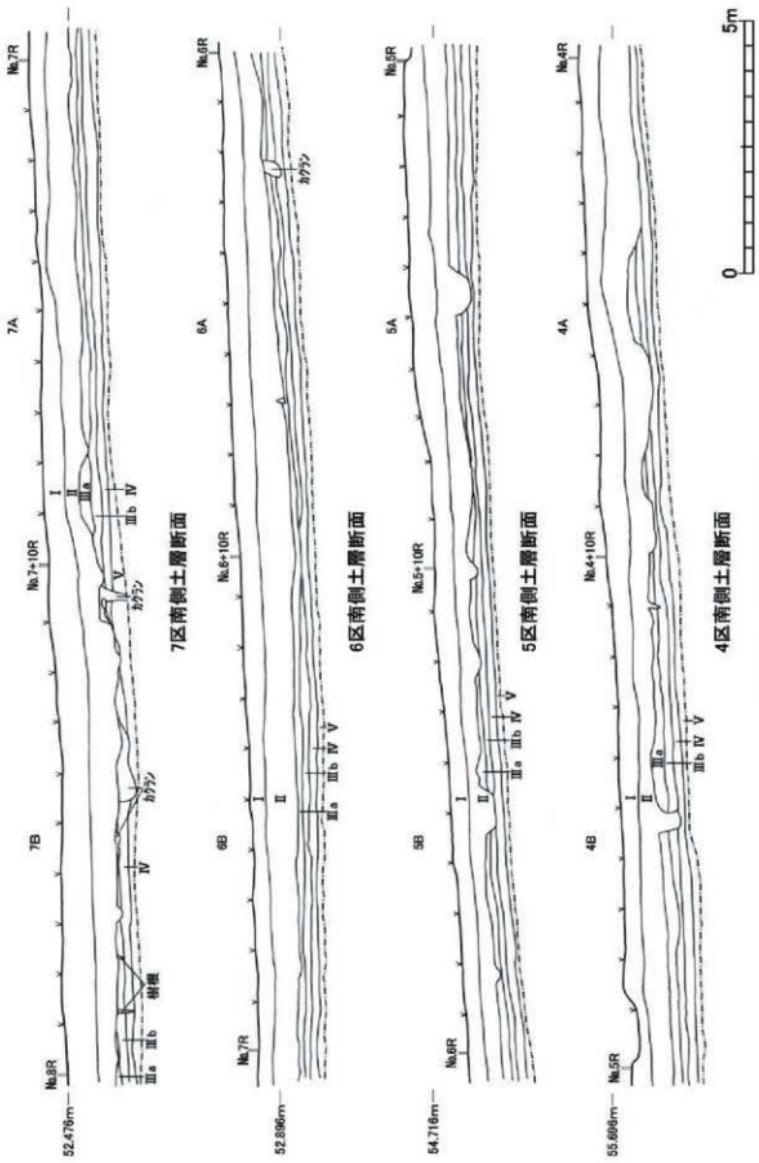


第3図 発掘調査対象地

第4図 発掘調査対象地グリット配置図



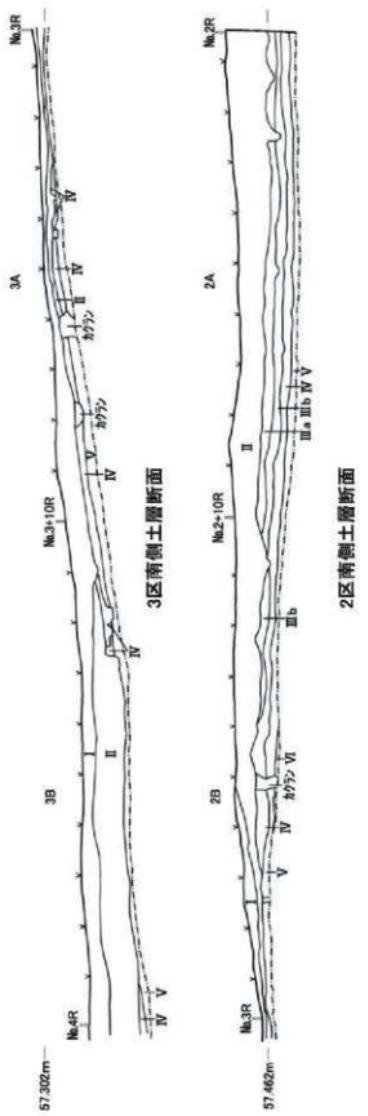




第6图 土层断面图(2)

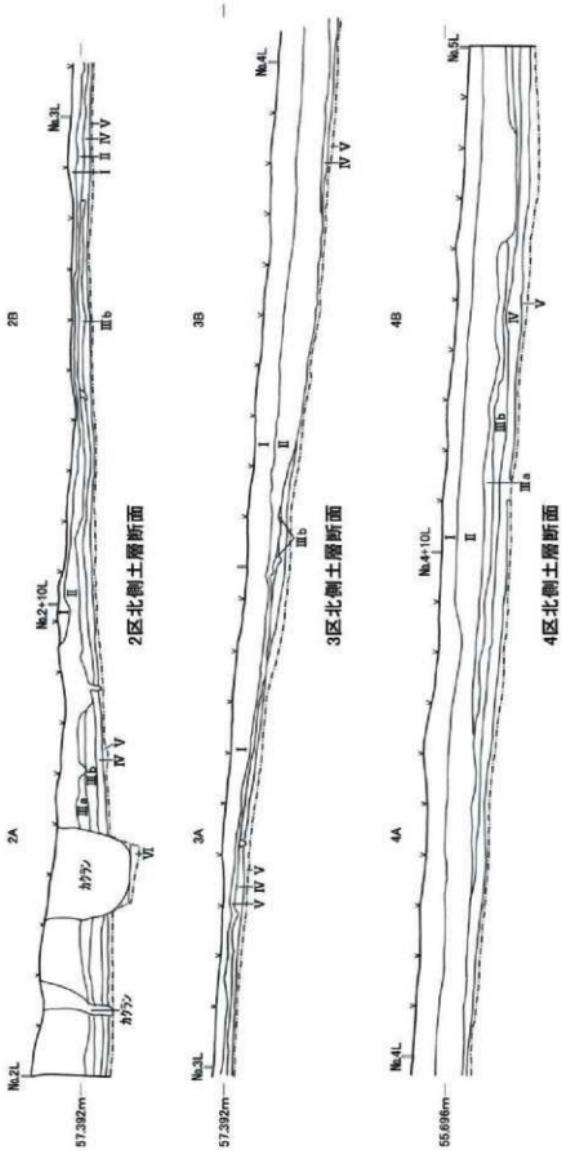
5m

第7图 土层断面图(3)



0 5m

第8图 土剖面图(4)



### 第3節 遺構

長迫遺跡の発掘調査においては、遺構は検出されなかった。ただし、4B区の東側部分から長軸25cm×短軸16cmの楕円形で、埋土が乳赤褐色を呈したピット状のものが検出された。検出面は、IV層ページュ色粘質土層である。埋土内には3cm程度の赤褐色のバミスの混入が見られた。下層確認のため半裁確認を行ったが、乳赤褐色土は約30cm堆積でその下位はV層の黒褐色土であり、遺物の出土も見られなかった。掘り込みの有無を確認しながらの掘り下げであったが、周辺の土色はぼんやりとしており、明確な掘り込みラインは確認されず、人工的に形成されたものではないと判断した。なお、埋土の一部をサンプルとして採取し科学分析を行った。

### 第4節 遺物

遺物は土器片・石器類が出土した。出土した層は全てアカホヤ火山灰層下位の、第IV層であるが、ごくまれに第V層上位が見られた。時期区分では縄文時代早期に該当するものである。ただし、1点だけ縄文時代草創期に該当する土器が出土している。

#### (1) 土器

番号を付けて取り上げた土器は850点である。特に口縁部については、諸特徴から大きく第1類～第5類に分類した。分類は文様のあり方及び器形を総合的に判断して行った。

##### ①第1類土器（第16図1）

10A区から出土したものである。800点を超える土器片を取り上げたが、この1点だけの出土である、器面（胴部）に1条の隆帯を施し隆帯には指頭で施文が施され、器面全体は丁寧にならされている。本市の奥ノ仁田遺跡・鬼ヶ野遺跡で出土しているものと同じタイプであり、縄文時代草創期のものである。

##### ②第2類土器（第16図2～第20図6）

口縁部が緩やかに外傾する円筒形が主であるが、口縁部に稜をもつ器形もあり、中には角筒の器形に近いものもある。口唇部には連続した浅いキザミを施すものもあり、口縁部下に貝殻腹縁部により横位の刺突文を1段～2段めぐらす。その下位に縦位のクサビ形の貼付文をめぐらす。また、貝殻腹縁による押圧文を意識して、クサビ形貼付文の名残として表現されたと考えられる縦位の貝殻刺突文を施しているものなどである。この類の最大の特徴はこのクサビ形の貼付文であり、細分化するとクサビ形の貼付文を有するものと、クサビ形の貼付文を意識して施文しているもの一群である。胴部には貝殻腹縁による押し引き文が施されるが、押し引きと貝殻条痕文を交互に施すなどのアクセントを付けているものもある。内面は丁寧なナデ整形がみられる。中には角筒の器形に近いものがあり、口縁部の角部が4つのものと2つのものがある。口縁部下位にクサビ形が崩れたと考えられる縦位の貝殻刺突文がV字状に非常に密に、または間延びして施文が行われているものである。これらの文様は1段のものもあるが、多く

は2段～3段、または4段施されているものもある。胴部の文様帶は貝殻腹縁部を利用した押し引き文が施されている。この押し引き文は横位に施されているが、押し引き文自体に強弱を施したり、あるいは貝殻条痕文と組み合わせた施文を行っているものがある。内面には丁寧なナデ整形がみられる。

#### ③第3類土器（第20図67～第22図86）

口縁部が緩やかに外傾する円筒形や、稜を有し角筒形に近いものもあり、口縁部の角部が4つのものと2つのものがある。口縁部下位に貝殻腹縁部による横位の刺突文を1～3段めぐらし、その下位に大きな特徴である半截竹管状工具による「C」あるいは逆「C」字形の刺突文を2～5段程めぐらす。胴部は貝殻腹縁による横位の押し引き文や貝殻条痕文を施すものである。「C」状の施文は基本的にクサビ形貼付文の流れを系譜するものであると考えられる。また一部「C」状が崩れ、「爪形」状に施文が施されているものもある。大きな特徴として、「C」状の施文は、「C」状のみのものと、「C」状+斜位の貝殻腹縁刺突文が施されているものがある。内面には丁寧なナデ整形が見られる。

#### ④第4類土器（第22図87～第27図159）

口縁部が緩やかに外傾する円筒土器が主であるが、口縁部に稜を持つ角筒形に近い器形の土器も存在し、口縁部の角部が4つのものと2つのものがある。口唇部には連続したキザミを施す。キザミは密なものとやや幅広のものも見られる。口縁部下位に貝殻腹縁部による横位の刺突文を1～4段めぐらすが、4段以上の複数段施すものもある。またこの横位の刺突文が斜位に施されているものもある。この斜位の施文は「横位の施文のバリエーションのひとつ」と思われる。貝殻腹縁部による刺突文の形状は連点状・波形状・三角形状あるいは刺突文が浅く明瞭でないもの等がある。胴部は貝殻腹縁部による押し引き文を横位に施すが、押し引き文と貝殻条痕文を交互に施したり、条痕文のみのものなどがある。内面は丁寧なナデ整形がみられ、全体的に器壁が薄く精製されていることが特徴である。

#### ⑤第5類土器（第27図160）

外面に横位の貝殻刺突文・沈線文を施すものである。器形は口縁部がラッパ状に大きく開く形態で、胴部は円筒形を呈する。口唇部には貝殻腹縁部による縦位の刺突文を施すものである。内面はナデ整形がみられる。

#### ⑥螺洞部片（第27図161～第42図）

161から398は、2類土器から4類土器の範疇に入ると思われる胴部片である。胴部片そのものでは、上述の分類の判別が困難であるため、胴部の施文3パターンごとに掲載している。第1のパターンは胴部に貝殻腹縁部による横位の押し引き文を施し、貝殻腹縁部による密な連続刺突文の段間に無文部を置くタイプである。第2のパターンは胴部の施文が横位の貝殻腹縁部による押し引き文を施すが、一部貝殻腹縁部による連続刺突文をもつものである。第3のバター

ンは貝殻腹縁による横位の押し引き文がみられず、横位の貝殻条痕文を施しているものや、無文のものである。内面はほとんどが丁寧になでられている。器形は大部分が円筒形であるが、182・183のように角筒形を呈するものもある。

399から414は器面に数条の貝殻条痕文または沈線文を施すものであり、器壁が全体的に厚く、焼成はもろい。415から419は器面全体に貝殻刺突文を施すものである。420から427は外面に押型文を施す土器群である。外面に山形押型文や山形に近い押型文を施し、この押型文が細やかで小波状に近いもの、間延びした彫りの浅いものなどがある。押型には幾何学状や同心円文状・玉形状・撚糸状の施文具原本を回転させて、文様を施しているものもある。内面には丁寧なナデ整形がみられ、420のように器壁が薄いものも見られる。428は焼成が非常よく、器面には数条の条痕文が施されているものであり、他の土器とは様相が異なるものである。

#### ⑦底部片（第43図～第48図）

429から501は2類から4類土器相当の底部片である。底部立ち上がりの施文にいくつかのパターンがみられる。429から474は底部立ち上がりの部分に鋭利なヘラ状の施文具で縦位のキザミを施しているものである。このキザミは数センチに及ぶ長いものや、2重に施しているものもある。475から501は、この縦位のキザミが貝殻刺突文・押し引き文によって施されているものであり、キザミの名残がみられるものである。器形は大部分が円筒形を呈するが、491のように角筒形になるものもある。502から505は器面に条痕文を施すものであり、505は非常に小さなものである。

### （2）石 器

本遺跡出土石器には、石鎌破損品・剥片石器・磨石敲石類・台石石皿類・砥石・異形石器などが出土した。いずれも縄文時代早期該当層である第IV層から出土したものである。番号を付けて取り上げた石器類は217点であった。

#### ①石鎌（第49図 506～507）

石鎌は、破損品が2点出土した。2点とも形状は石鎌基部に抉りをもち、507はこの抉りが特に深い。石材は、506がチャート、507は頁岩である。506は先端が、507は基部に近い部分が破損している。

#### ②剥片石器（第49図 508～511）

剥片石器は4点掲載している。石材はいずれも砂岩である。礫の割れ口面を利用して、刃部が形成されており、特に511は縦長の割れ口を加工して、約20cmの刃部が形成されている。

#### ③磨石敲石類（第50図～第54図）

磨石・敲石類は本遺跡出土石器の中で大部分を占めるものである。22点を掲載した。全てが砂岩を石材としている。円形のもの、楕円形のもの、不定形のものなどがあり、「磨る」・「磨

る・敲くの両方に使われたもの」・「全周が敲打して使用されたもの」・「凹石として使われたもの」などがある。また、自然礫の一端に若干の敲打痕や磨痕がみられるものもある。

#### ④台石・石皿類（第 55 図～第 58 図）

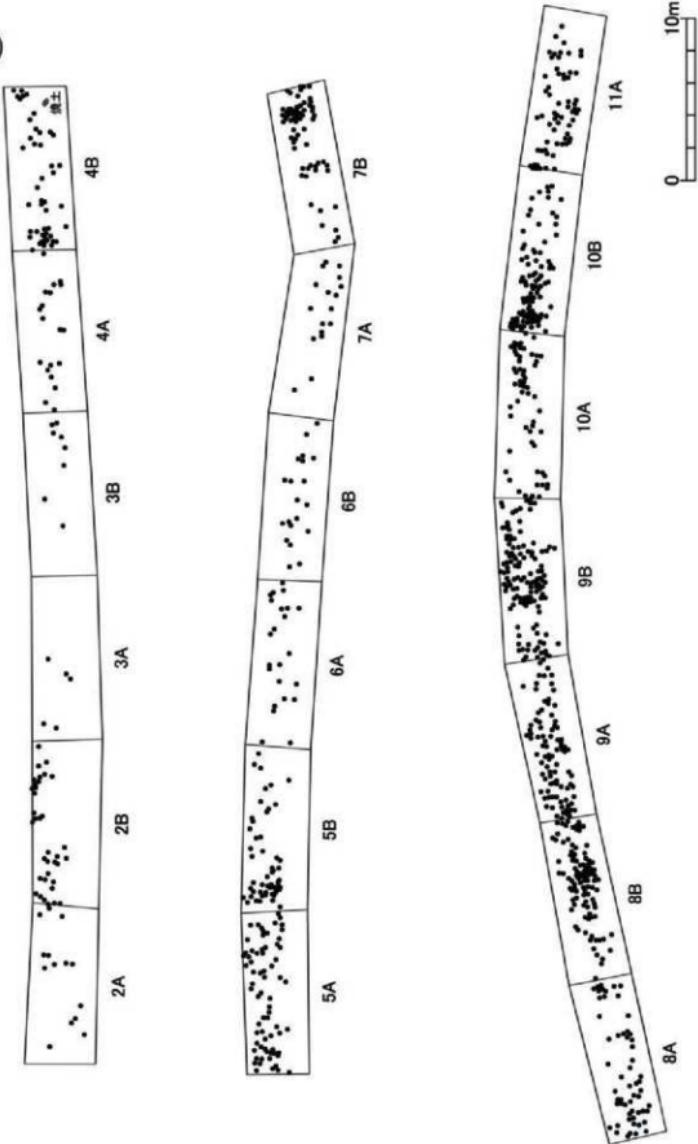
台石・石皿類で掲載したものは 10 点である。形状により磨面が凹面を呈するもの、磨面が平坦なもの、凹状の凹部を持つものなどがある。磨面が平坦なものと凹部をもつものは石皿としての機能の他に台石としての使用が考えられる。非常に大型のものや小型のものなどがあり、石材は全て砂岩である。

#### ⑤異形石器（第 59 図～第 60 図）

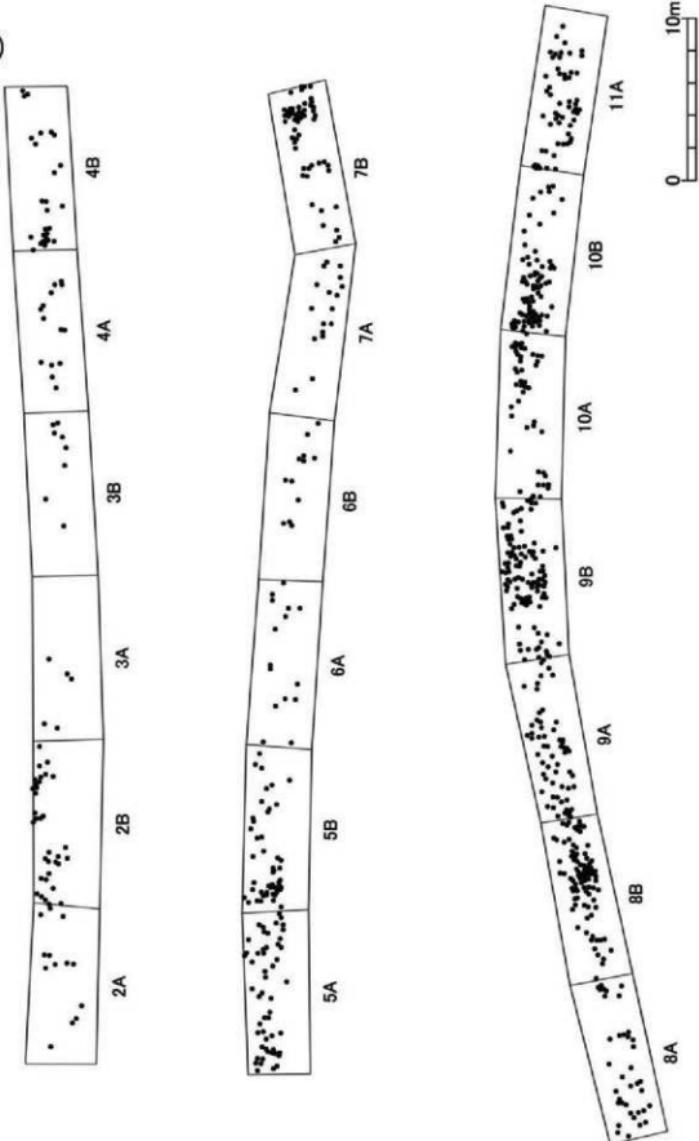
558 は、8B 区第 IV 層から出土したもので、周辺からは吉田式土器が出土している。アルファベットの J 字の形を呈しており、最大長 8.5 cm・最大幅 4.1 cm、最大厚は 0.8 cm である。石材は片岩と思われる。側面には穿孔痕跡と擦切り痕跡がみられる。その形状から実用品とは考えにくく、石製祭祀具である可能性が高い。国内の縄文文化の調査で同様の製品の報告例がないため、九州南部の早期縄文文化で創生された極めて地域性の高い独自のものであると思われる。

種子島及び南九州の早期縄文文化の祭祀の形成を考える上で、重要な資料である。

559 は、9A 区第 IV 層、吉田式土器に伴って出土したものである。石材は砂岩で、最大長 10 cm・最大幅 5.6 cm・最大厚 5.3 cm である。ほぼ全面に敲打痕がみられる。先細りの箇所には、くびれが見られ、このくびれに紐をかけ垂下したとも考えられるが（装身具としての利用）、本州の事例から、象徴物と思われる。特に底面と思われる部分は、敲打により面取りが行なわれ、「座る・置く」ということを意識しているのではと思われる。吉田式土器の時代範疇とされている縄文時代早期前葉（約 10,000 年前）で、この種のものの類例は、全国的に希有であり、西日本には見当たらない。現段階では、祭祀のための石製品であり「石偶」としての可能性が高いと思われる。他の類例を待ちたいところである。

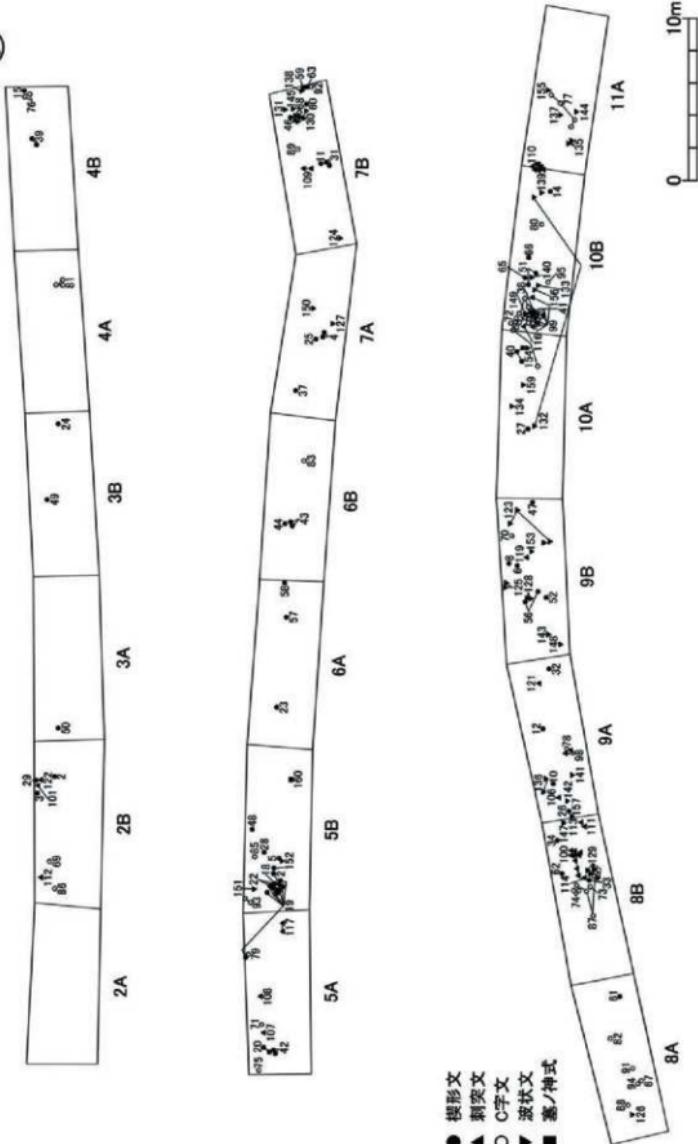


第9図 全遺物出土状況

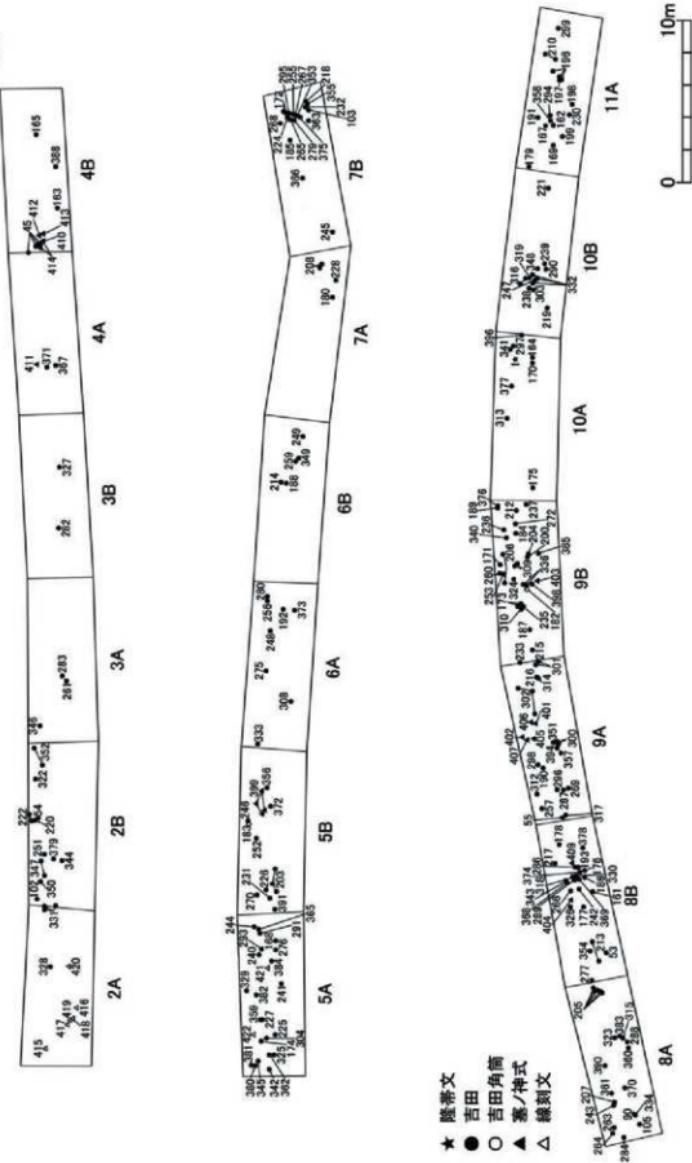


第10図 全土器出土状況

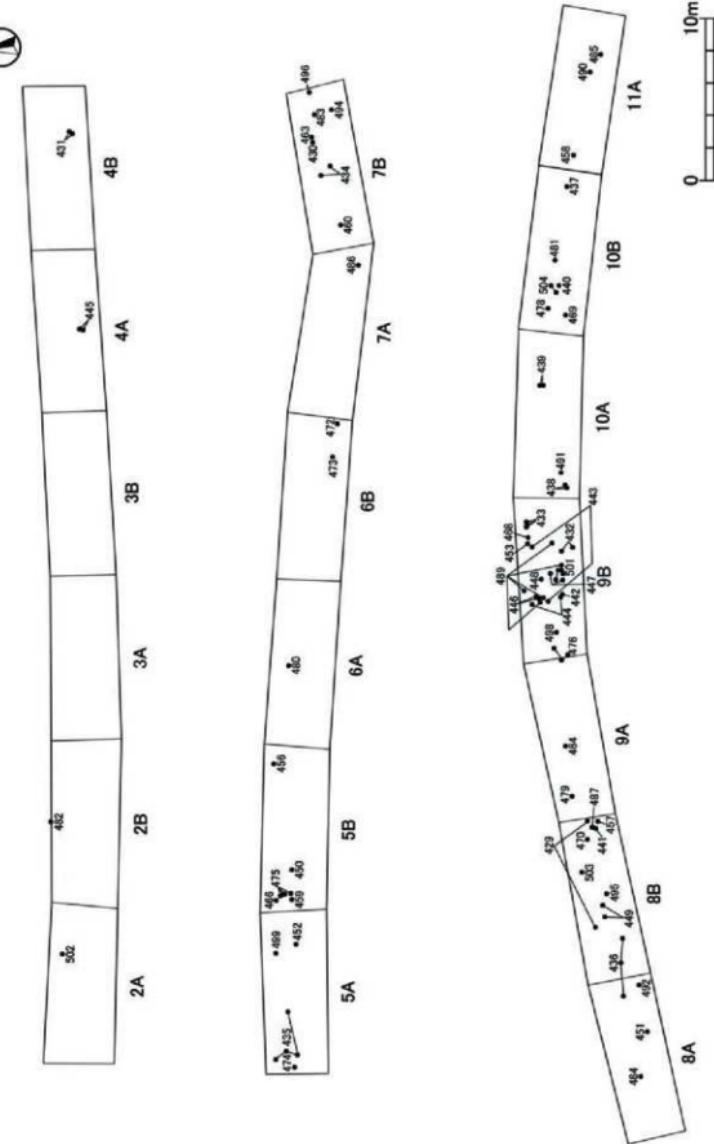
第11図 口縁部出土状況

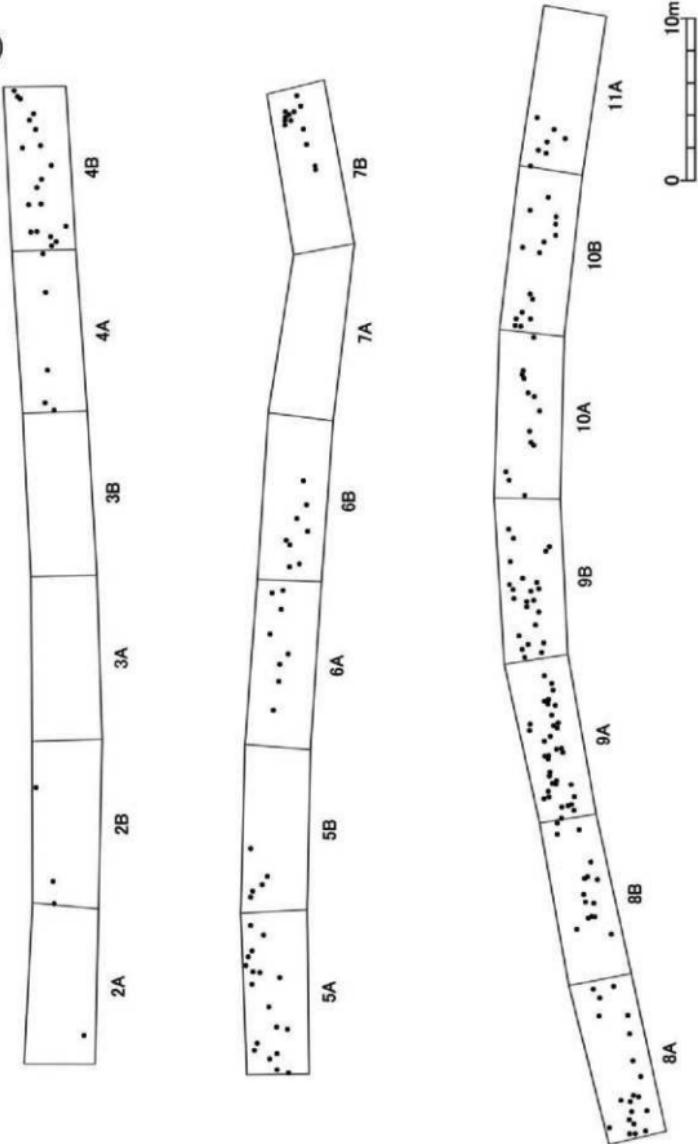


第12図 胸部出土状況



第13図 底部出土状況





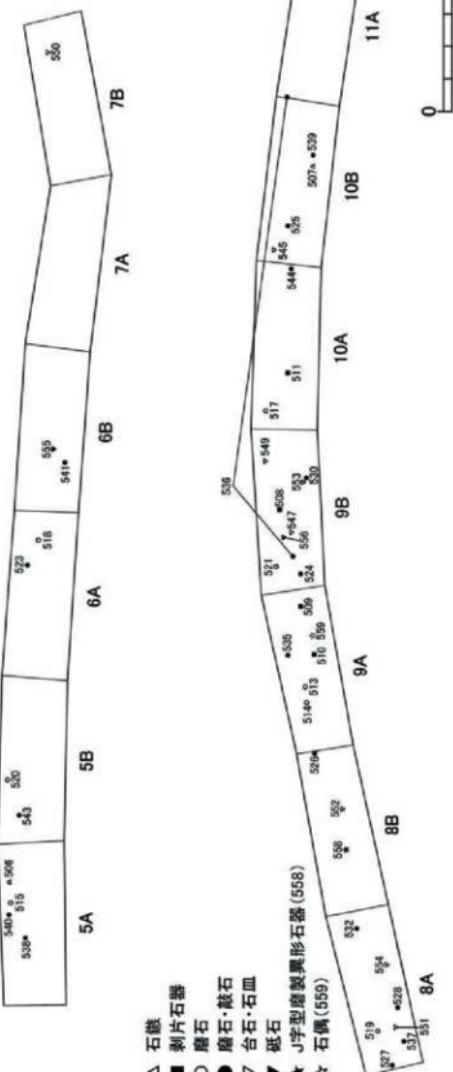
第14図 全石器出土状況

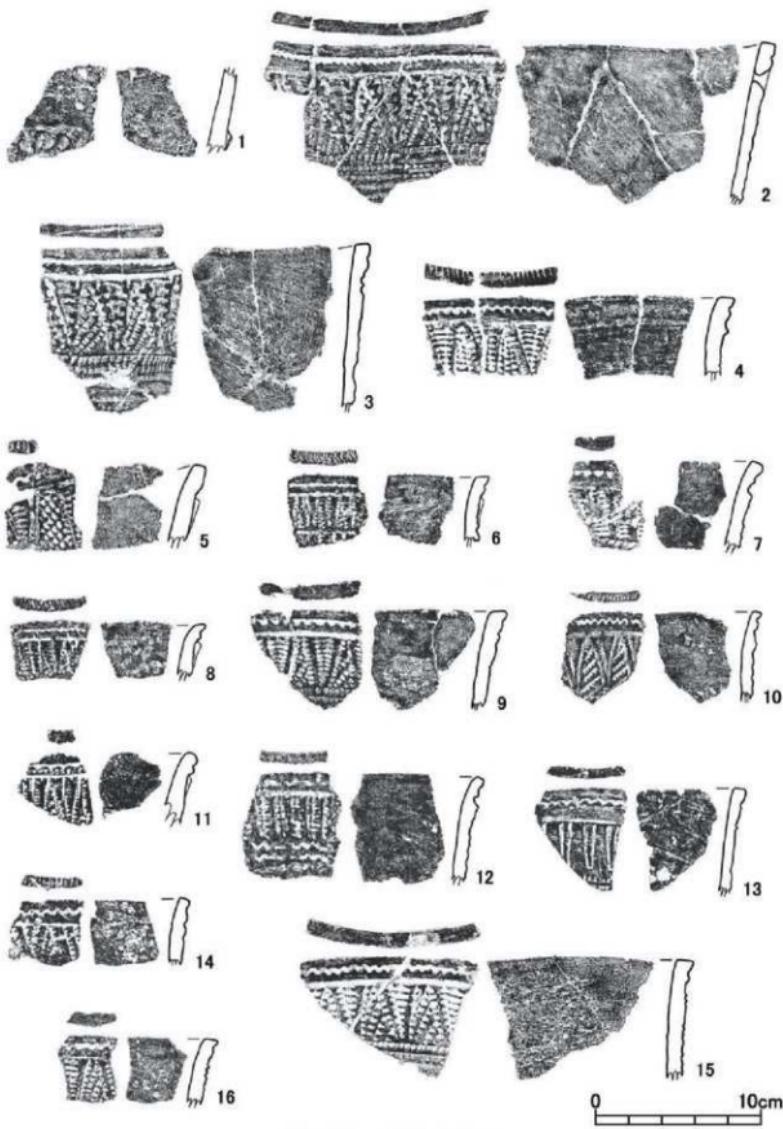
第15図 石器器種別出土状況



	534	531						
539*	515	504	543	520				
539*	515	504	543	520	523	516	548	512
534	531	504	543	520	523	516	548	512

2A      2B      3A      3B      4A      4B





第16図 出土土器(1)



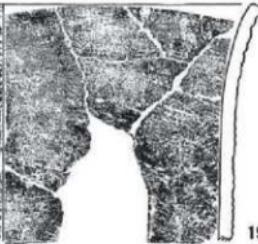
17



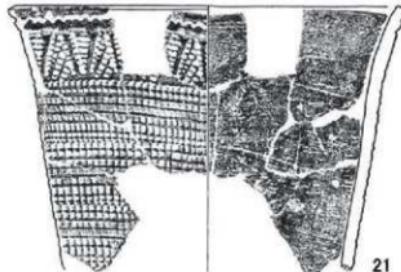
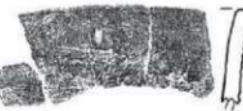
18



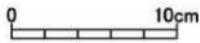
19



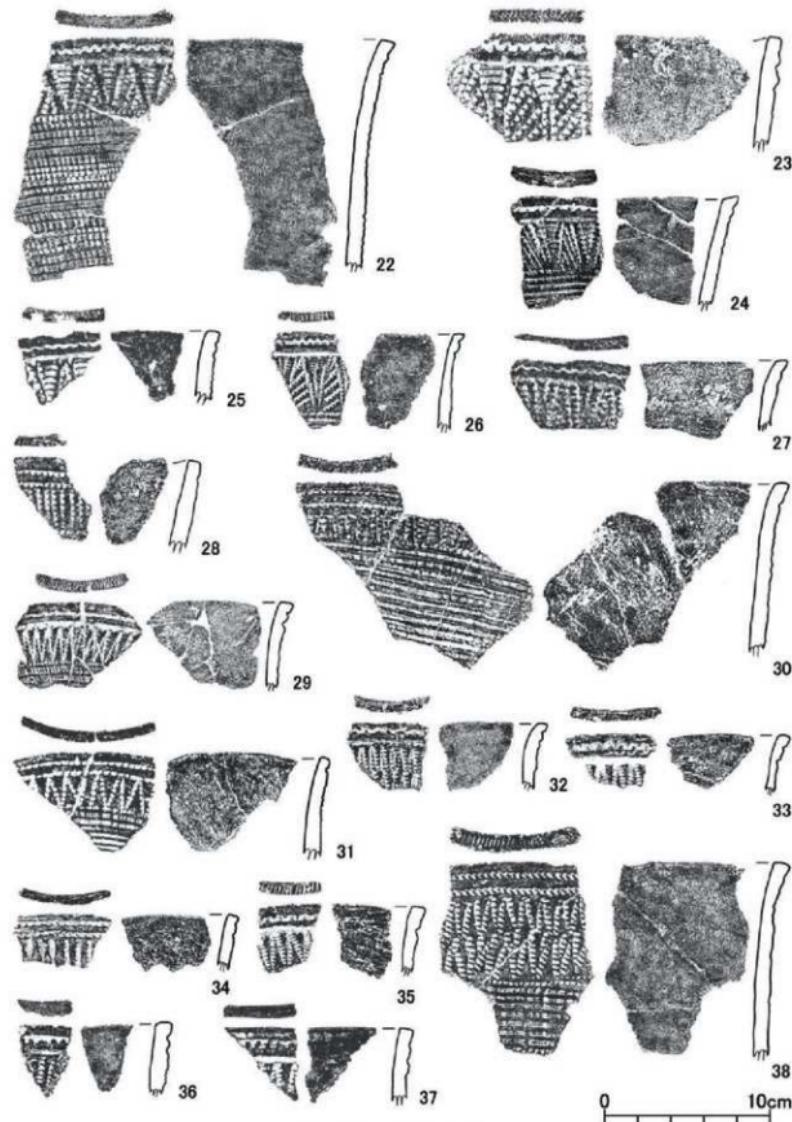
20



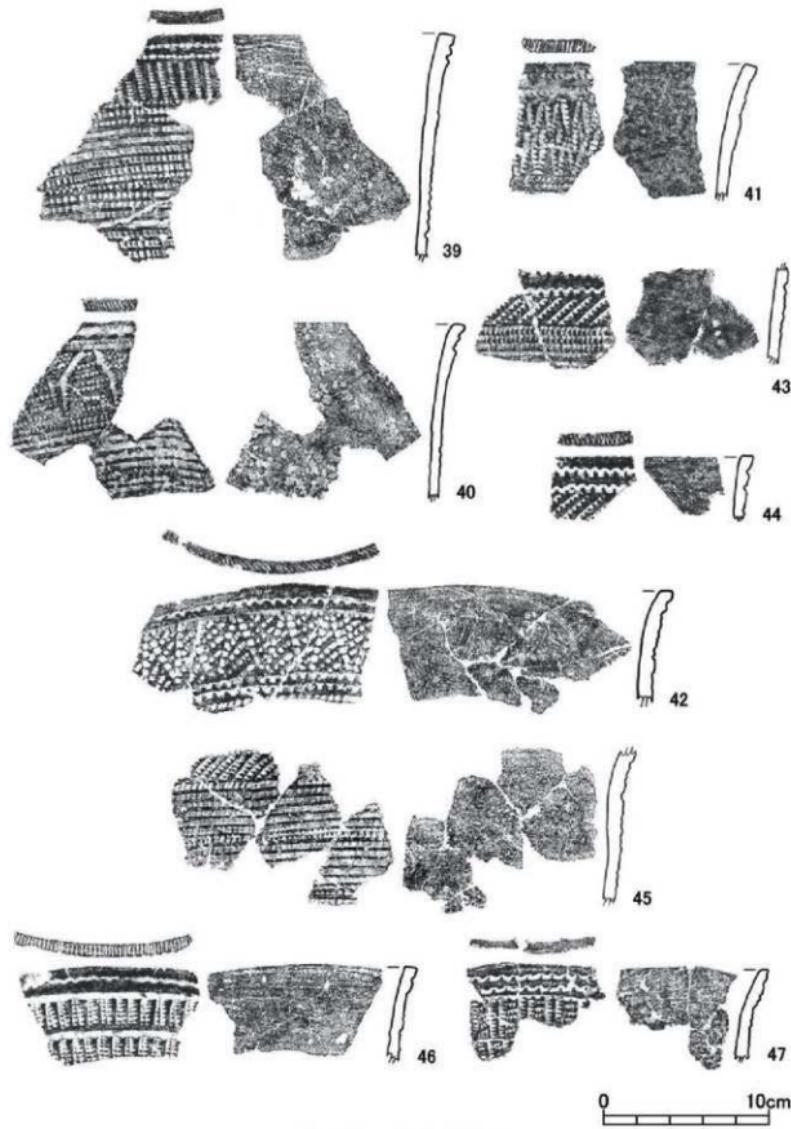
21



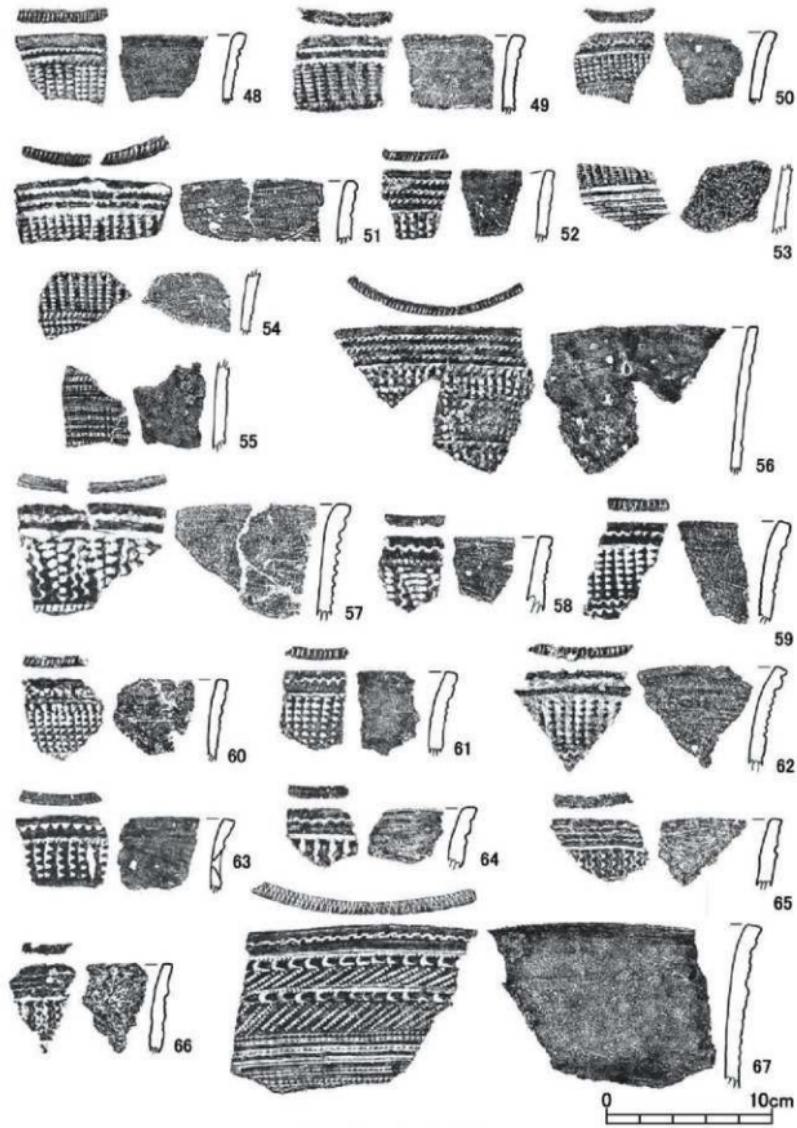
第17図 出土土器(2)



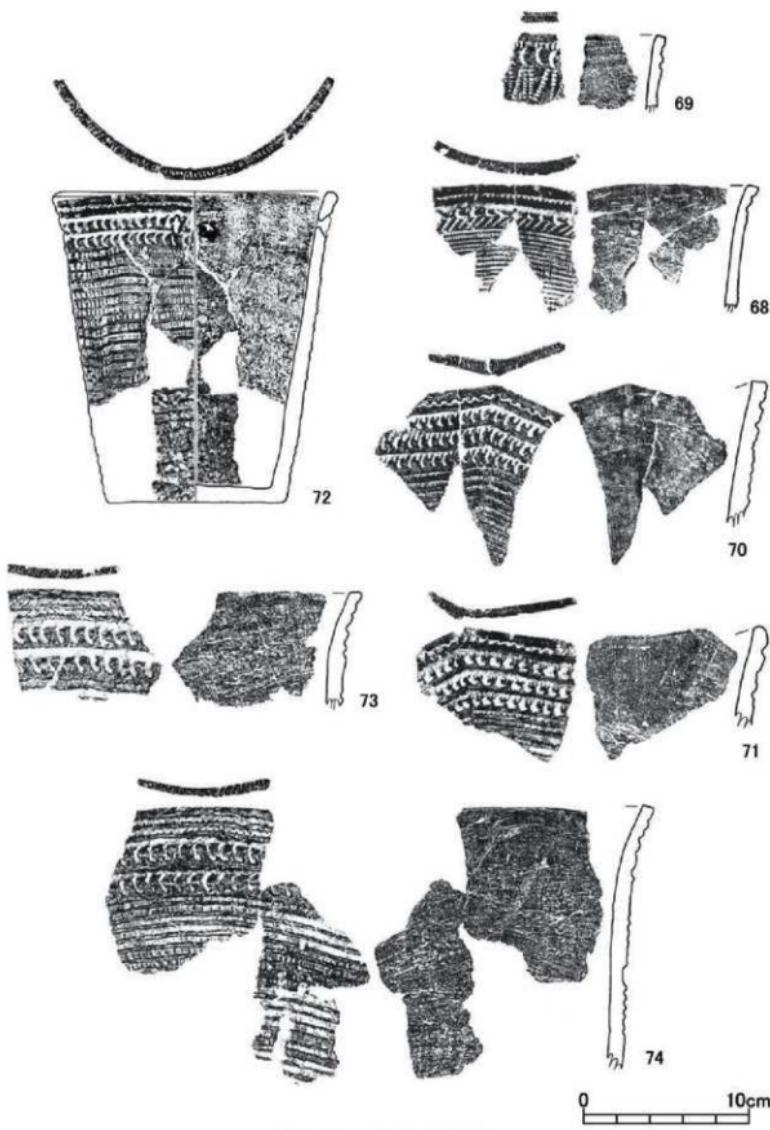
第18図 出土土器(3)



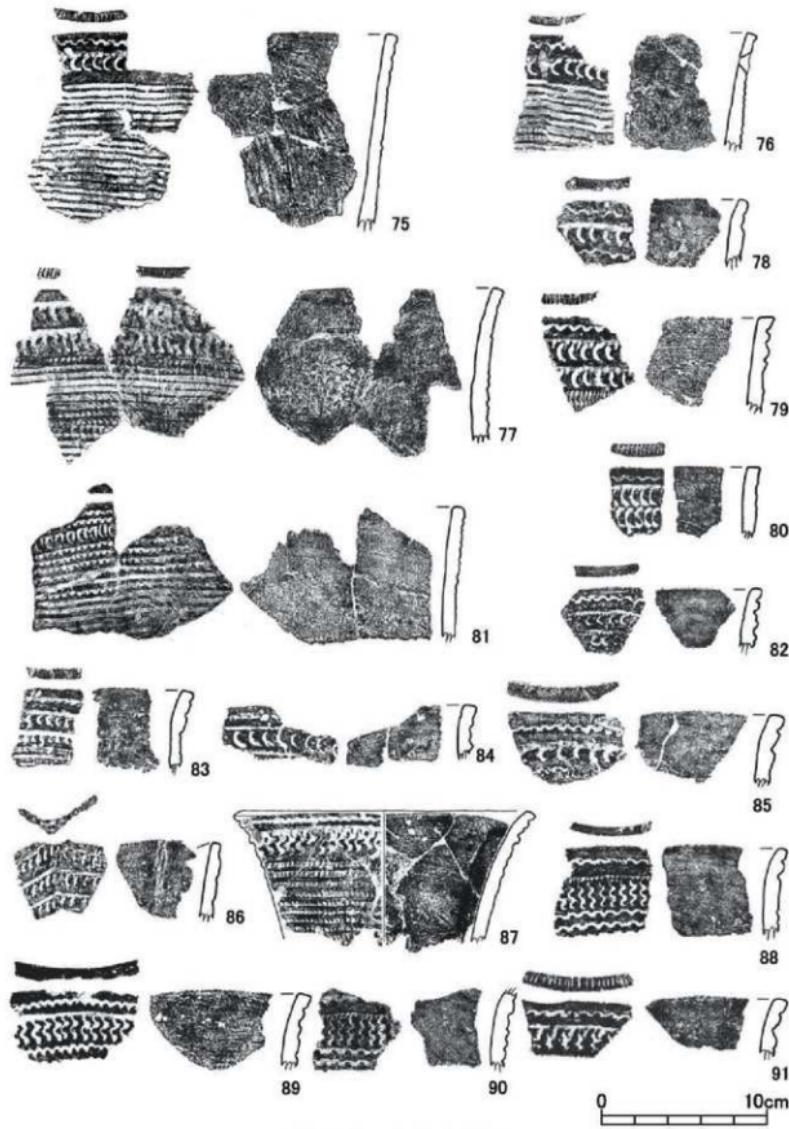
第19図 出土土器(4)



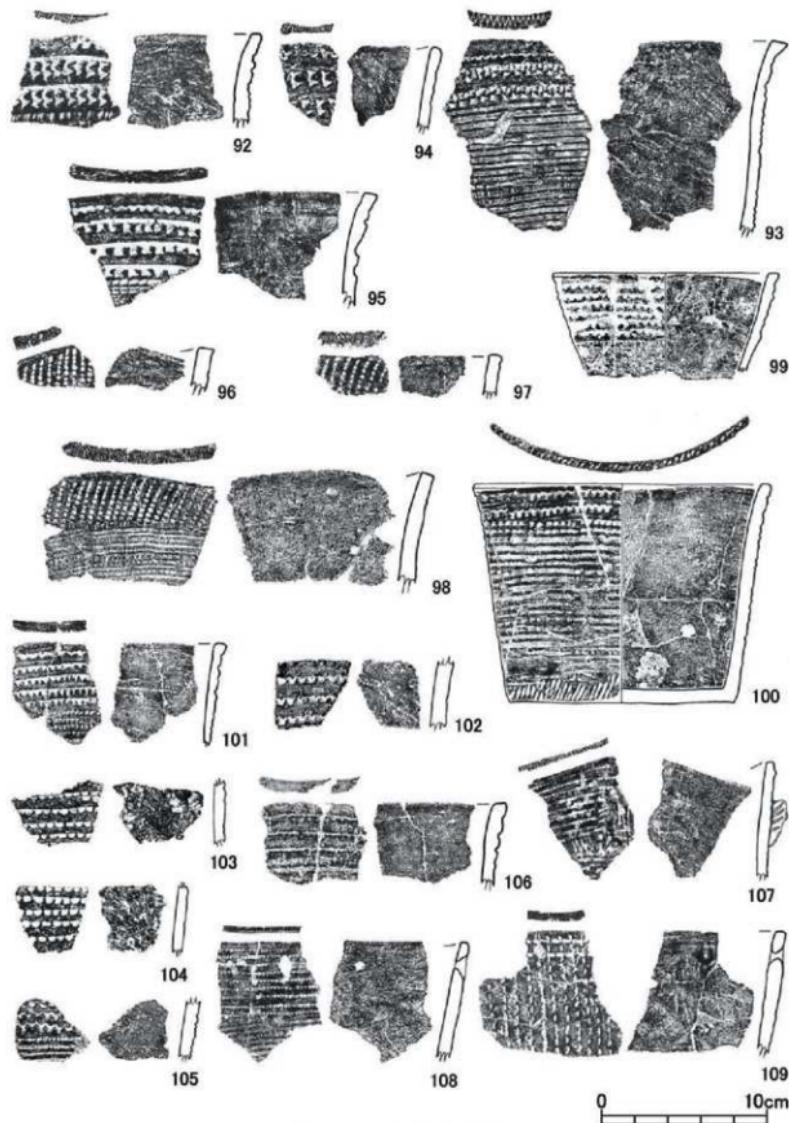
第20図 出土土器(5)



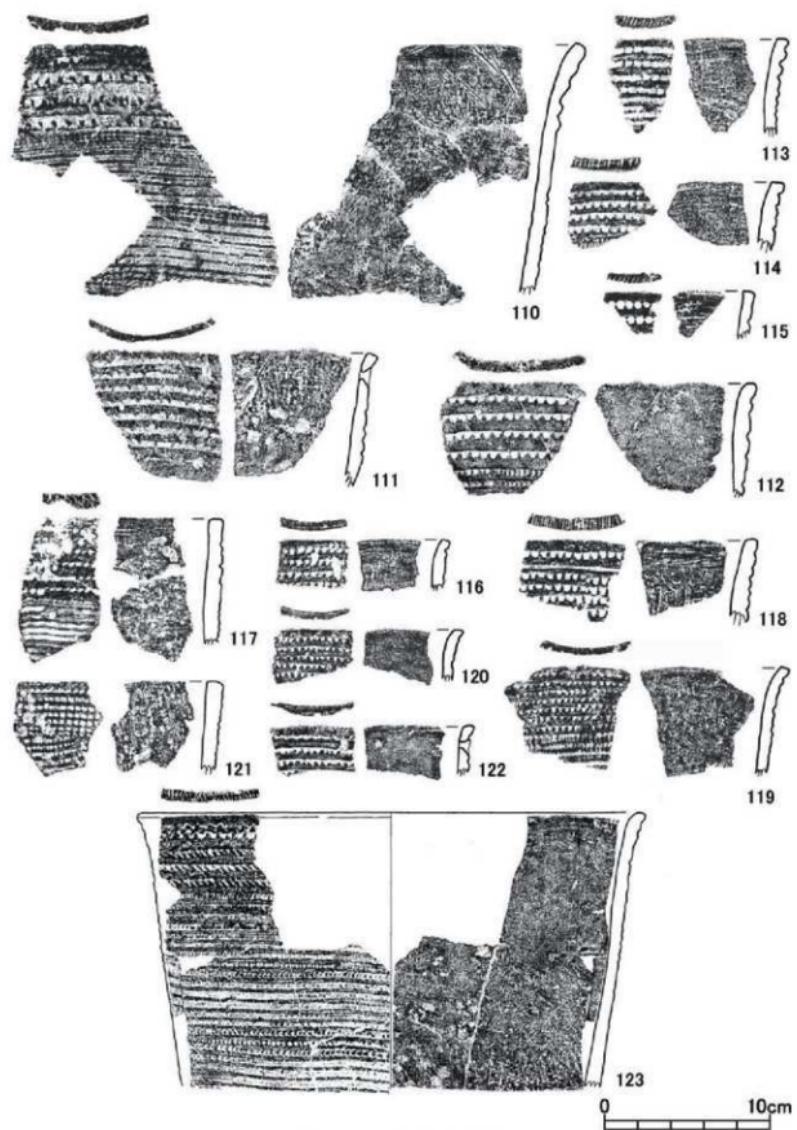
第21図 出土土器(6)



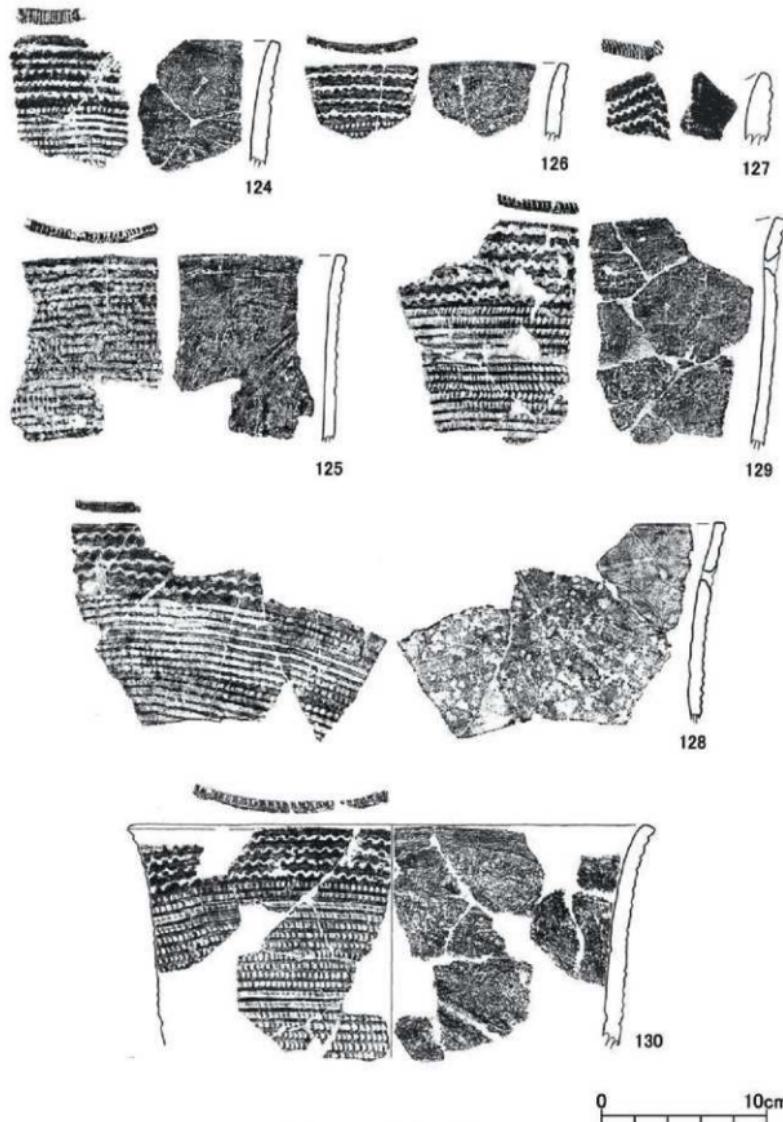
第22図 出土土器(7)



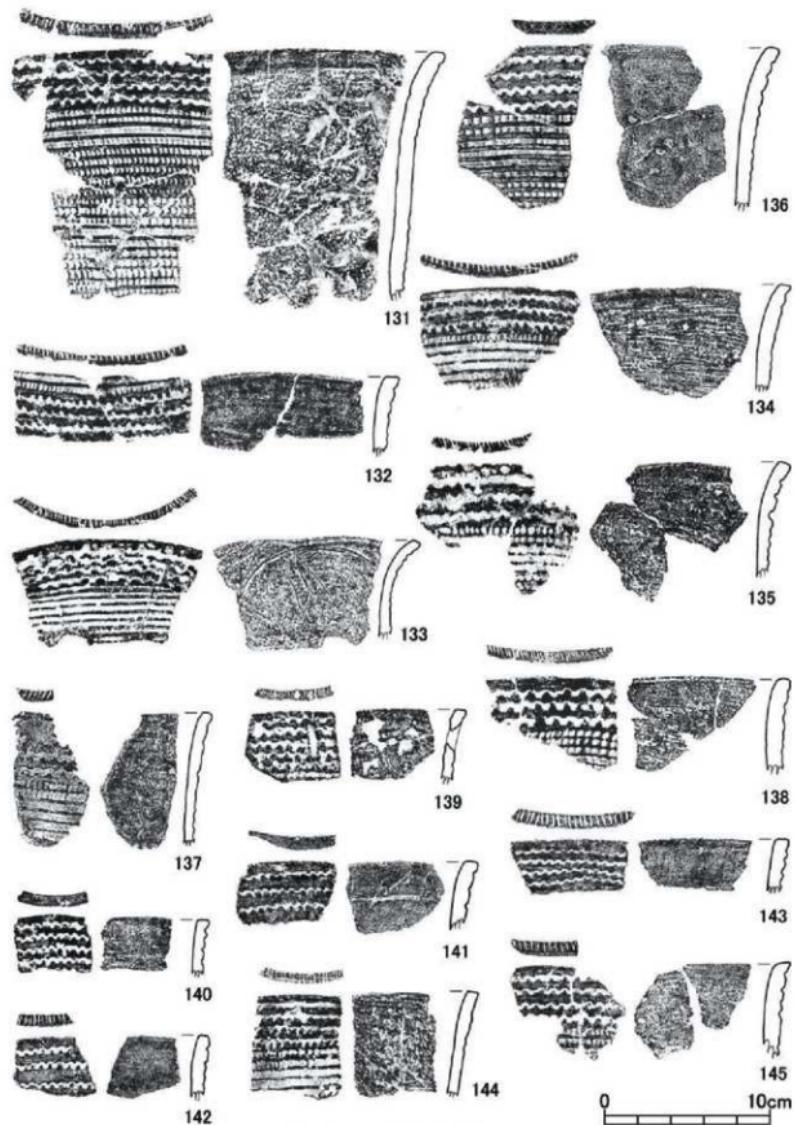
第23図 出土土器(8)



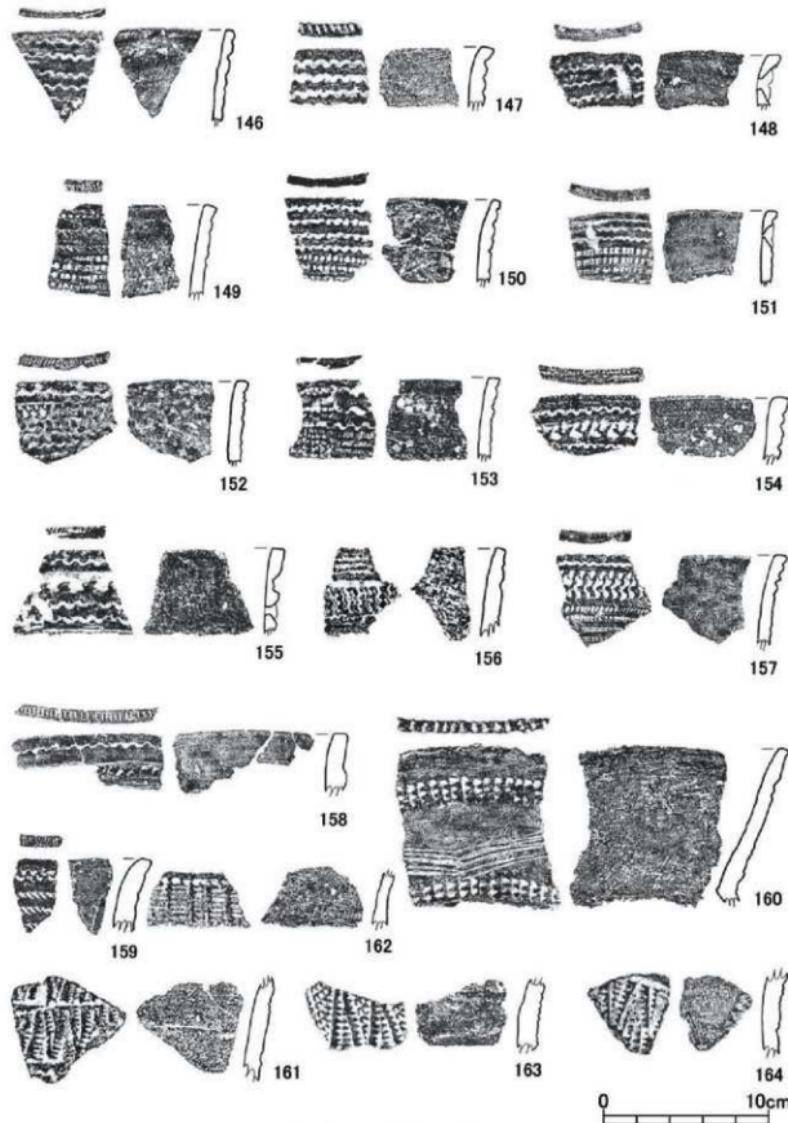
第24図 出土土器(9)



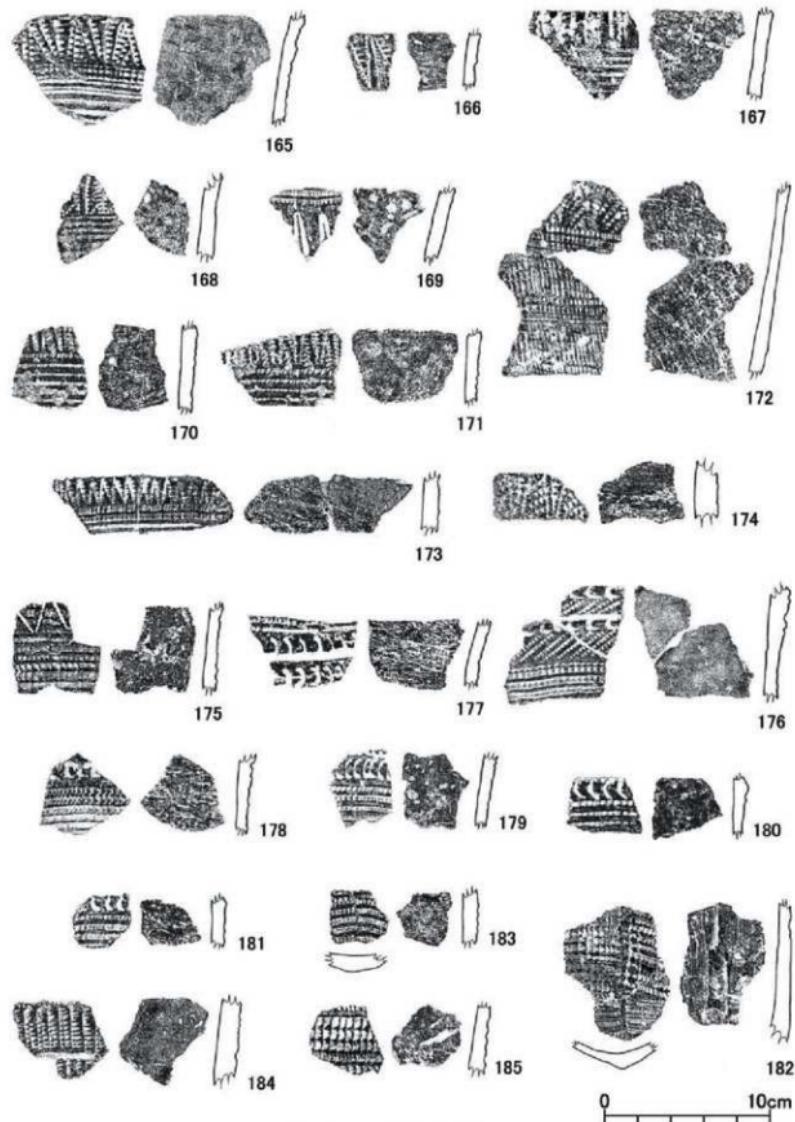
第25図 出土土器(10)



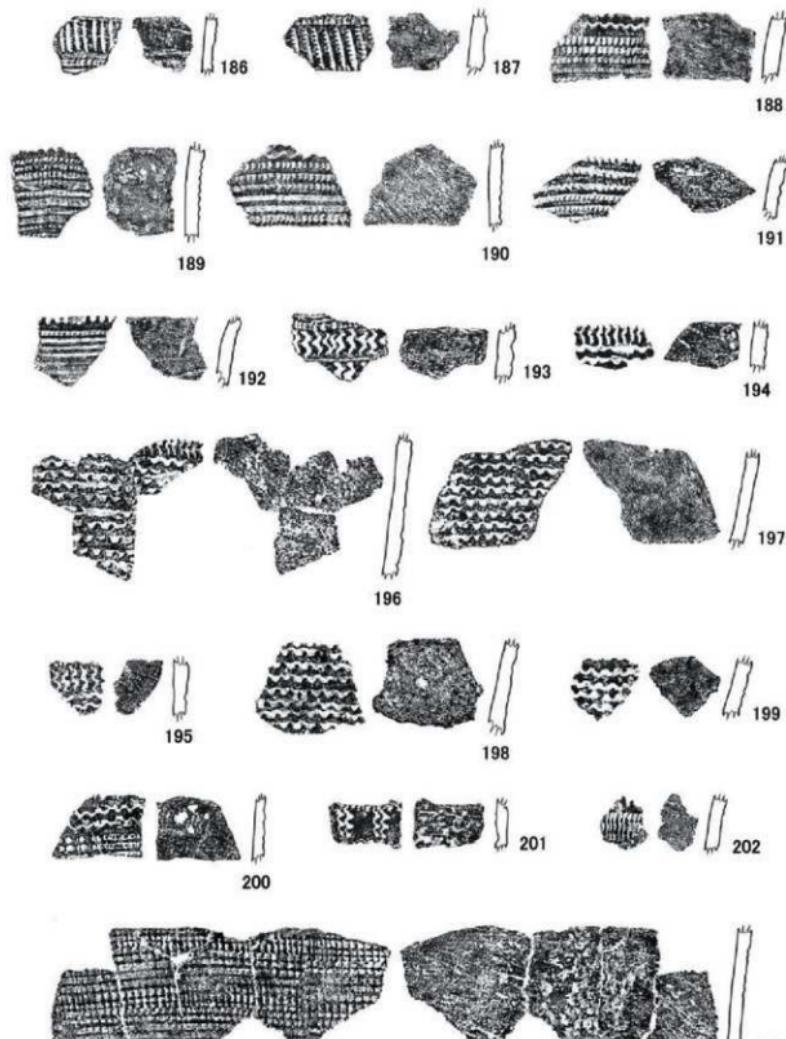
第26図 出土土器(11)



第27図 出土土器(12)

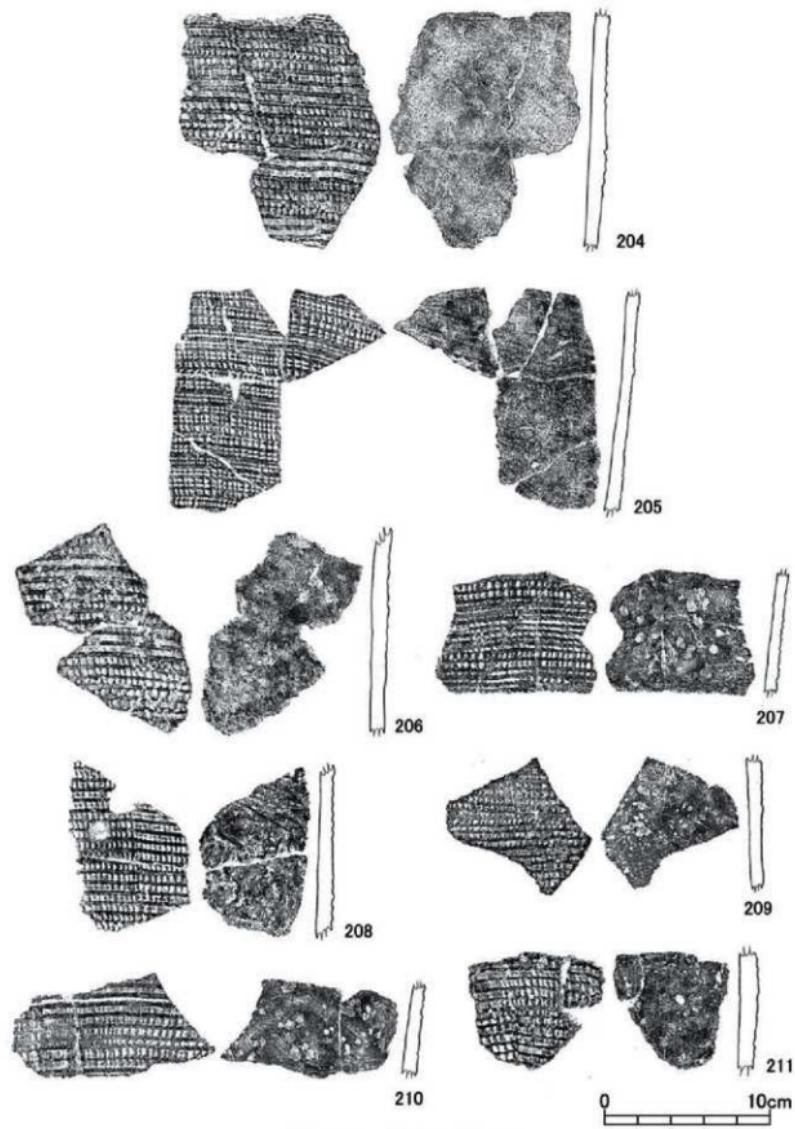


第28図 出土土器(13)

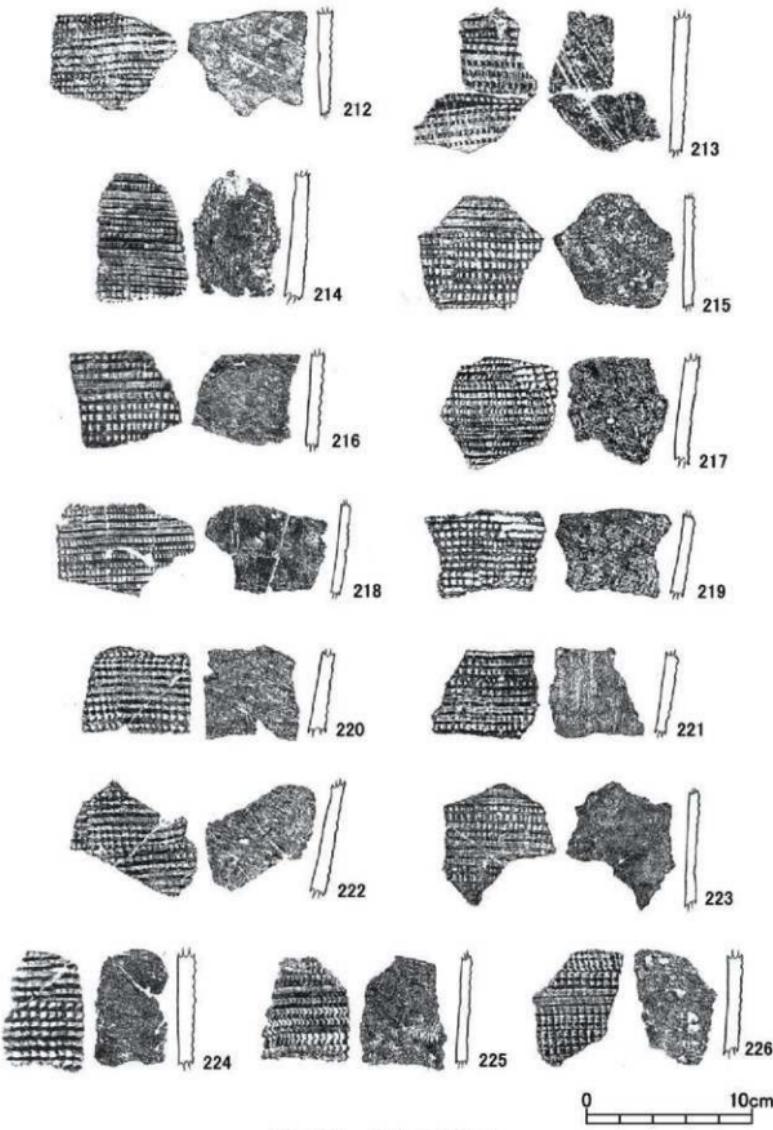


0 10cm

第29図 出土土器(14)



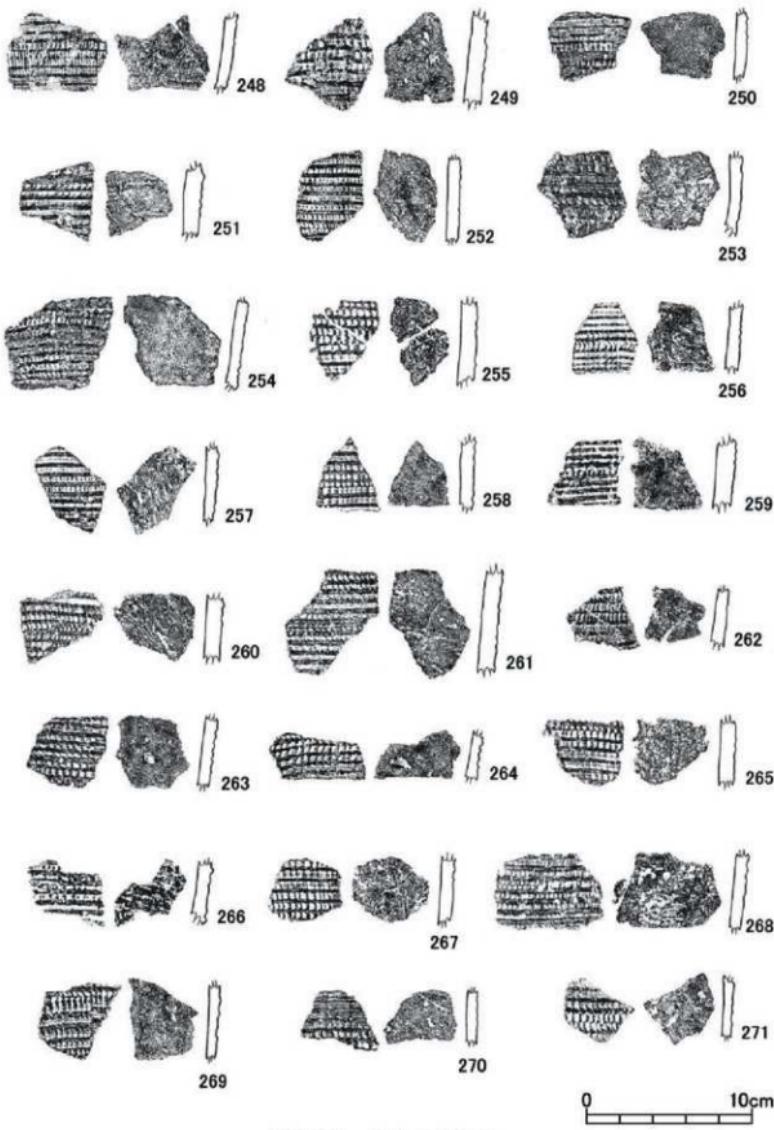
第30図 出土土器(15)



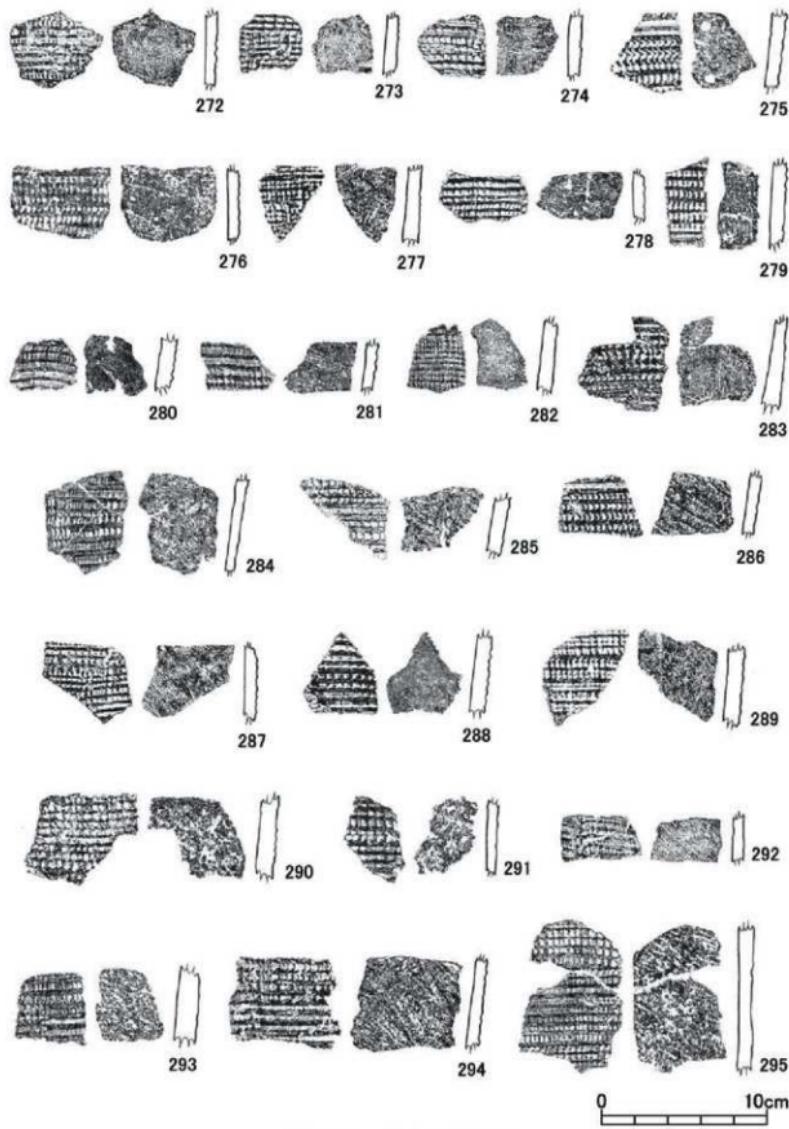
第31図 出土土器(16)



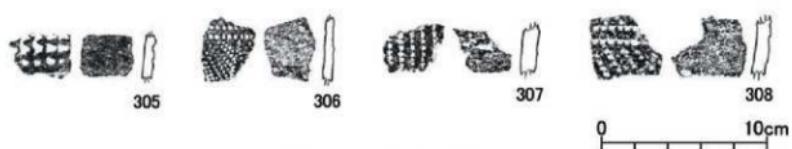
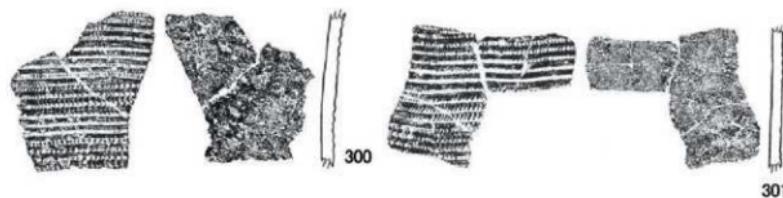
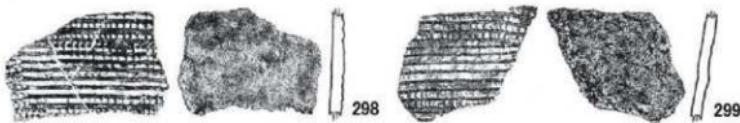
第32図 出土土器(17)



第33図 出土土器(18)

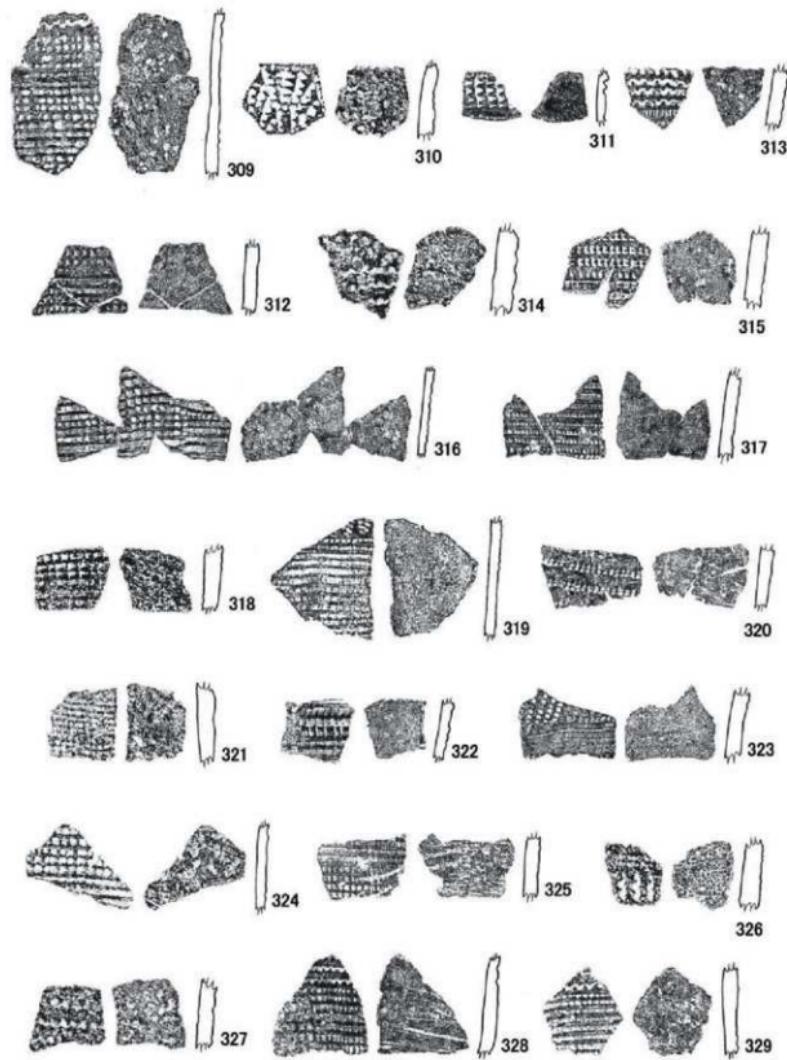


第34図 出土土器(19)



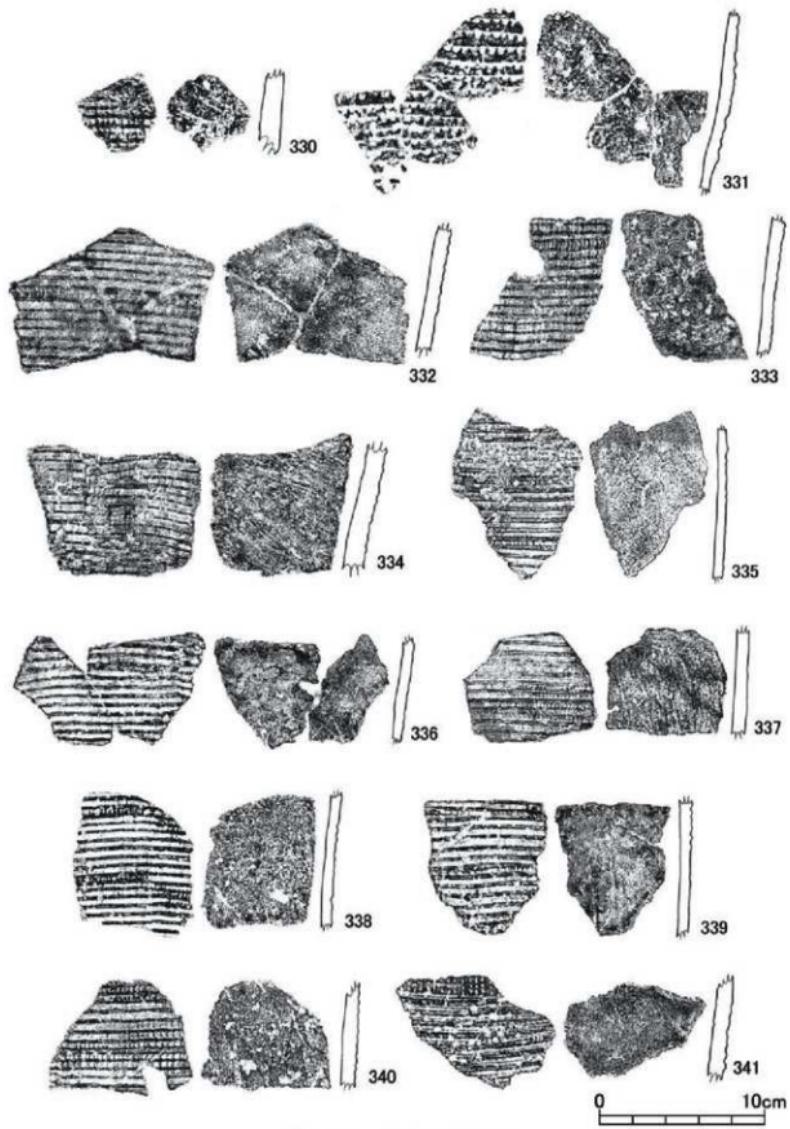
0 10cm

第35図 出土土器(20)

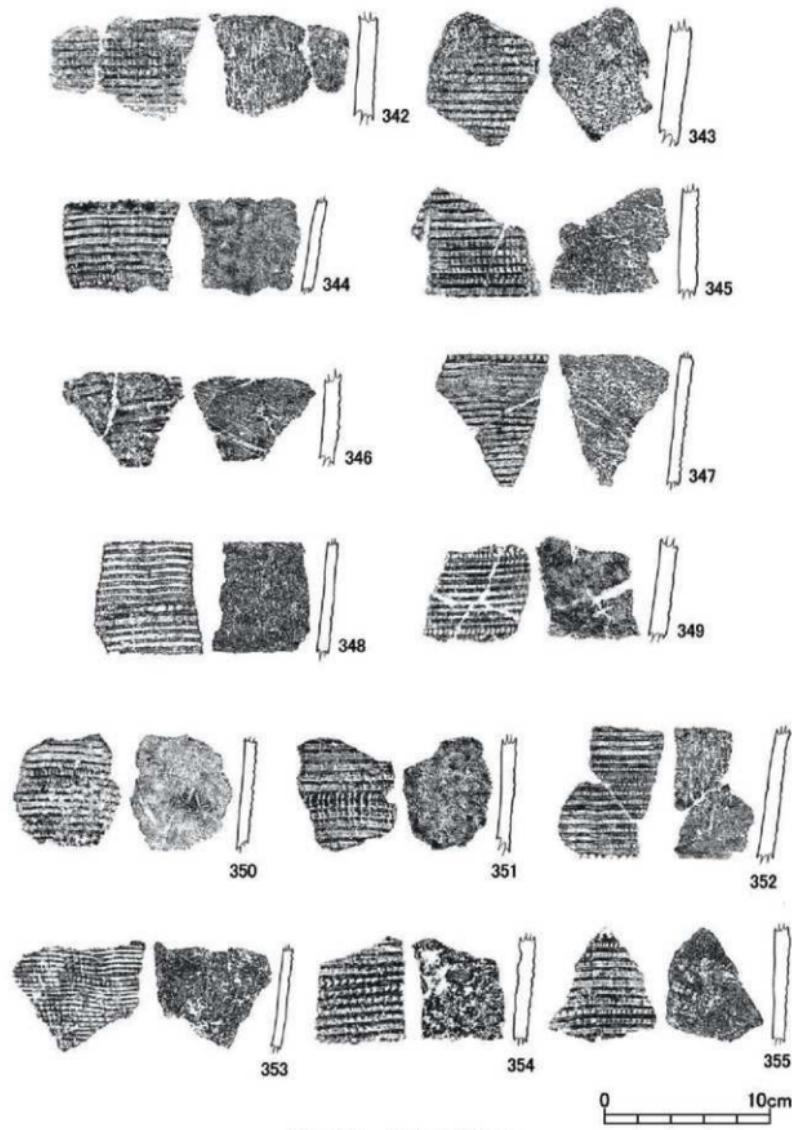


第36図 出土土器(21)

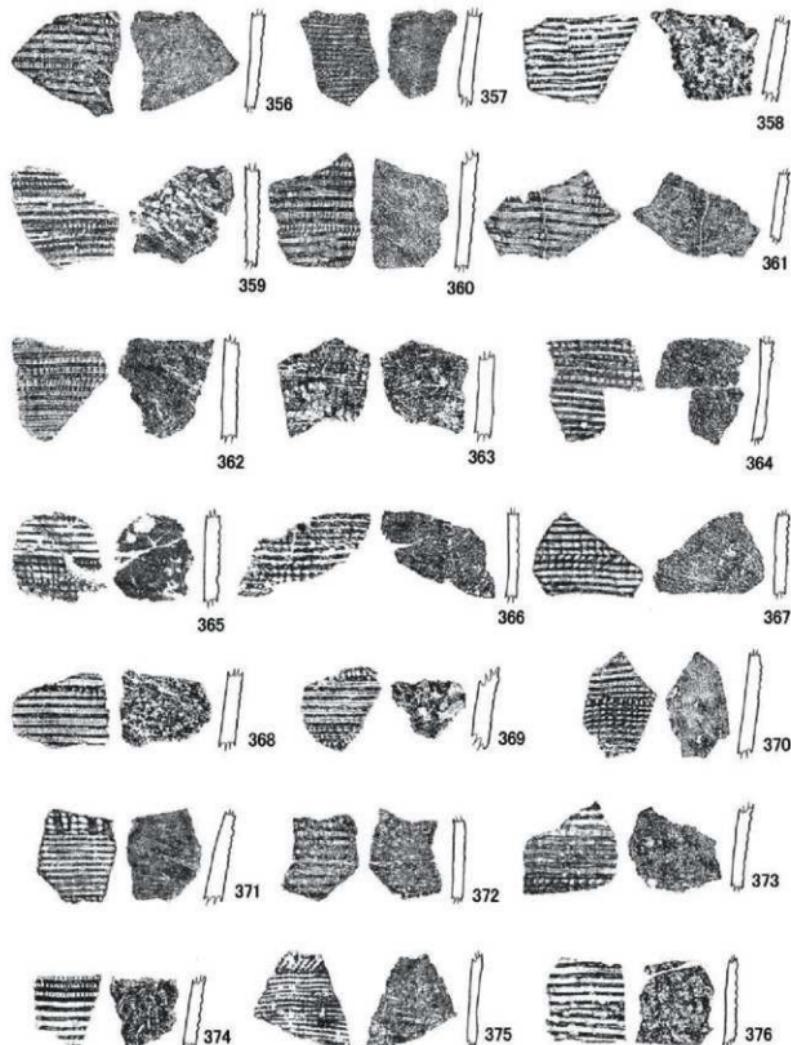
0 10cm



第37図 出土土器(22)

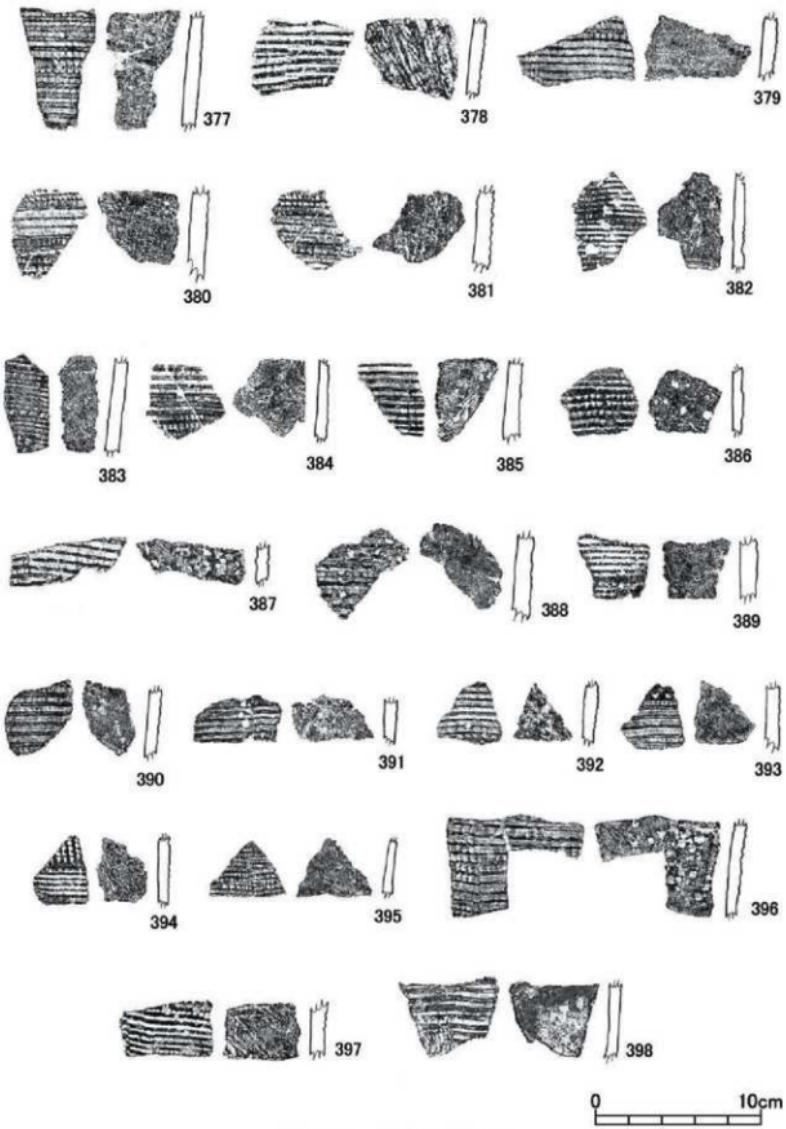


第38図 出土土器(23)

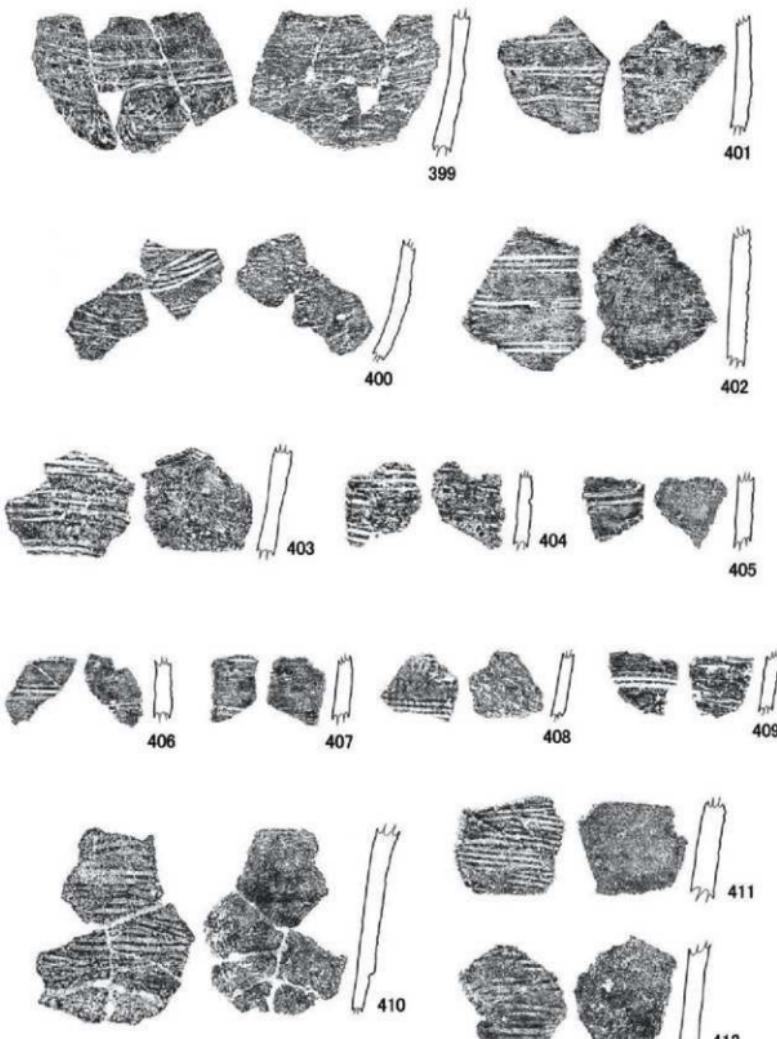


0 10cm

第39図 出土土器(24)

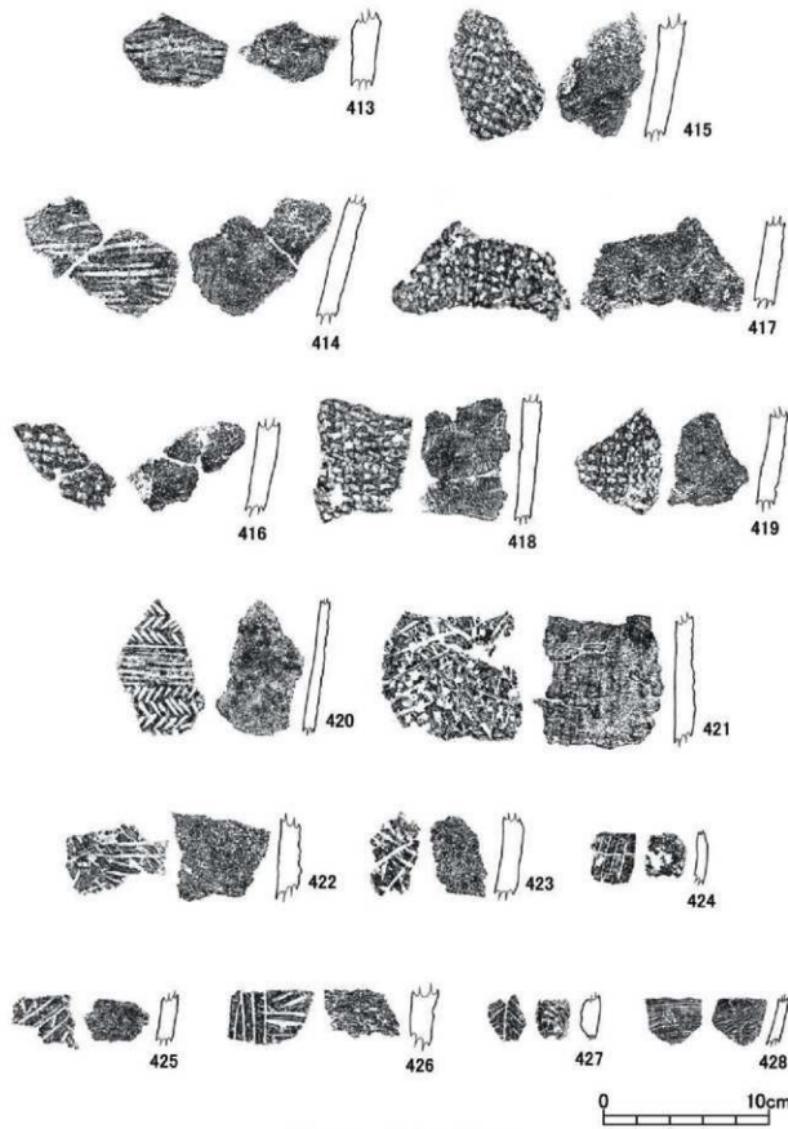


第40図 出土土器(25)

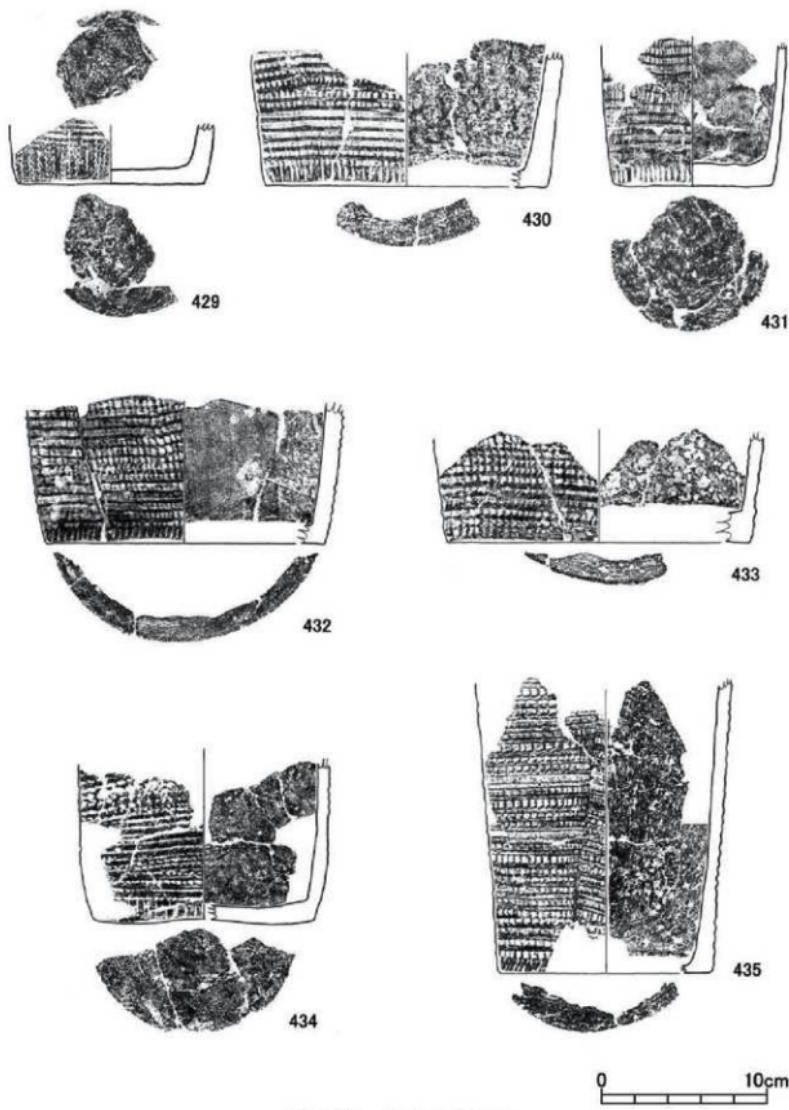


第41図 出土土器(26)

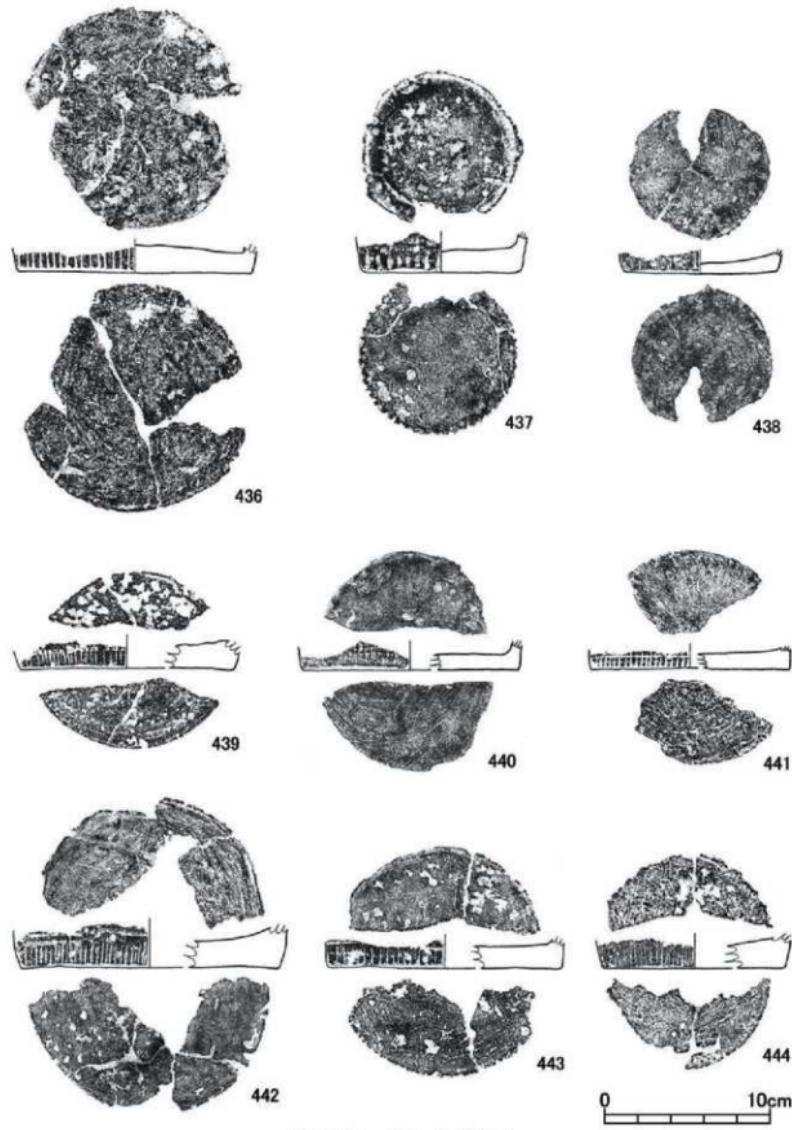
0 10cm



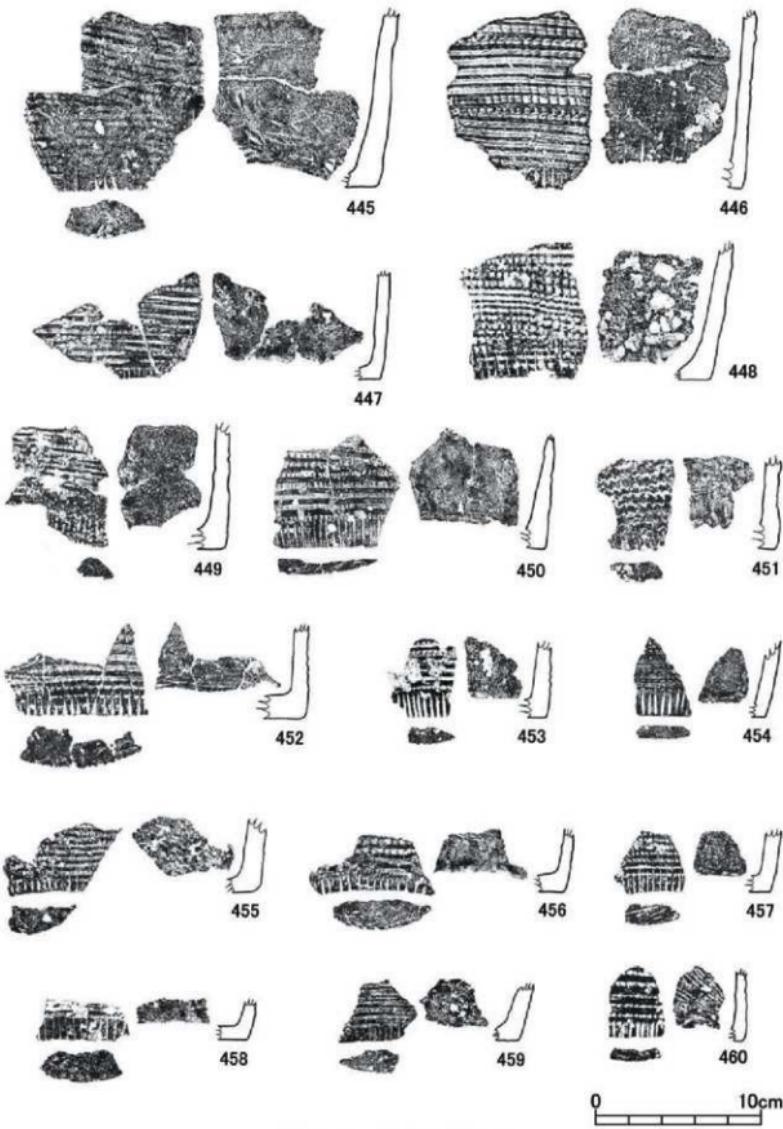
第42図 出土土器(27)



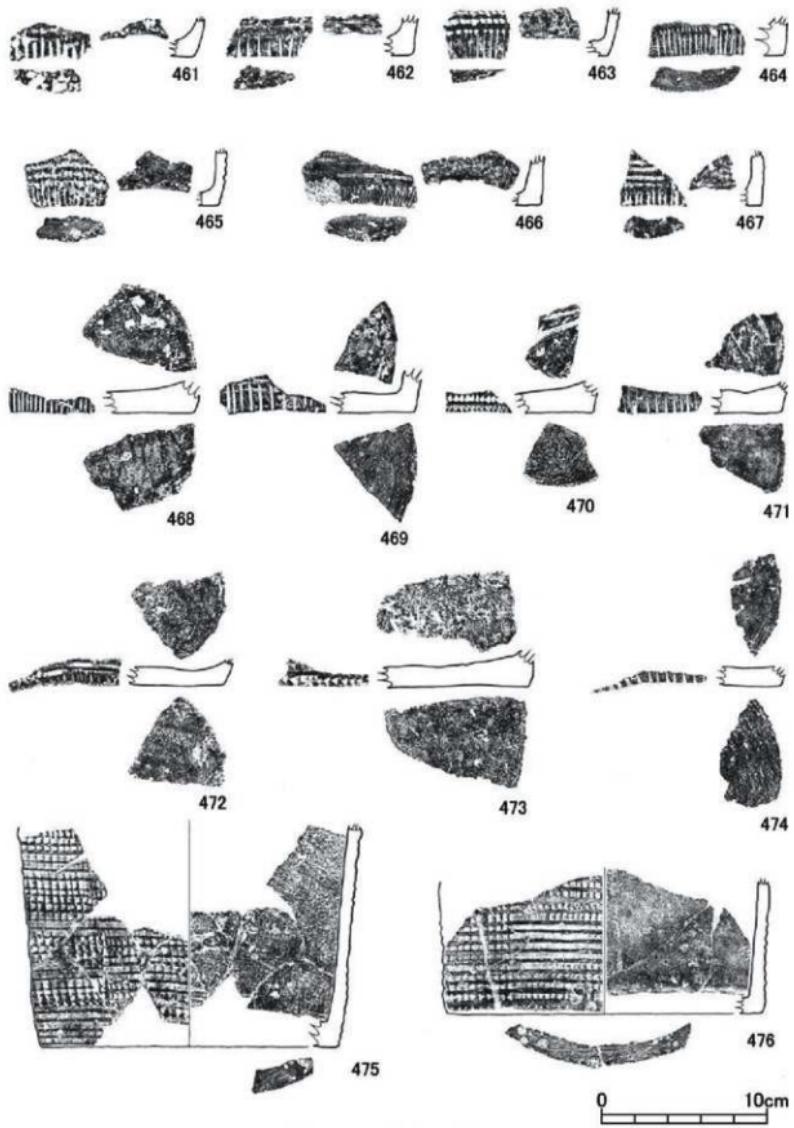
第43図 出土土器(28)



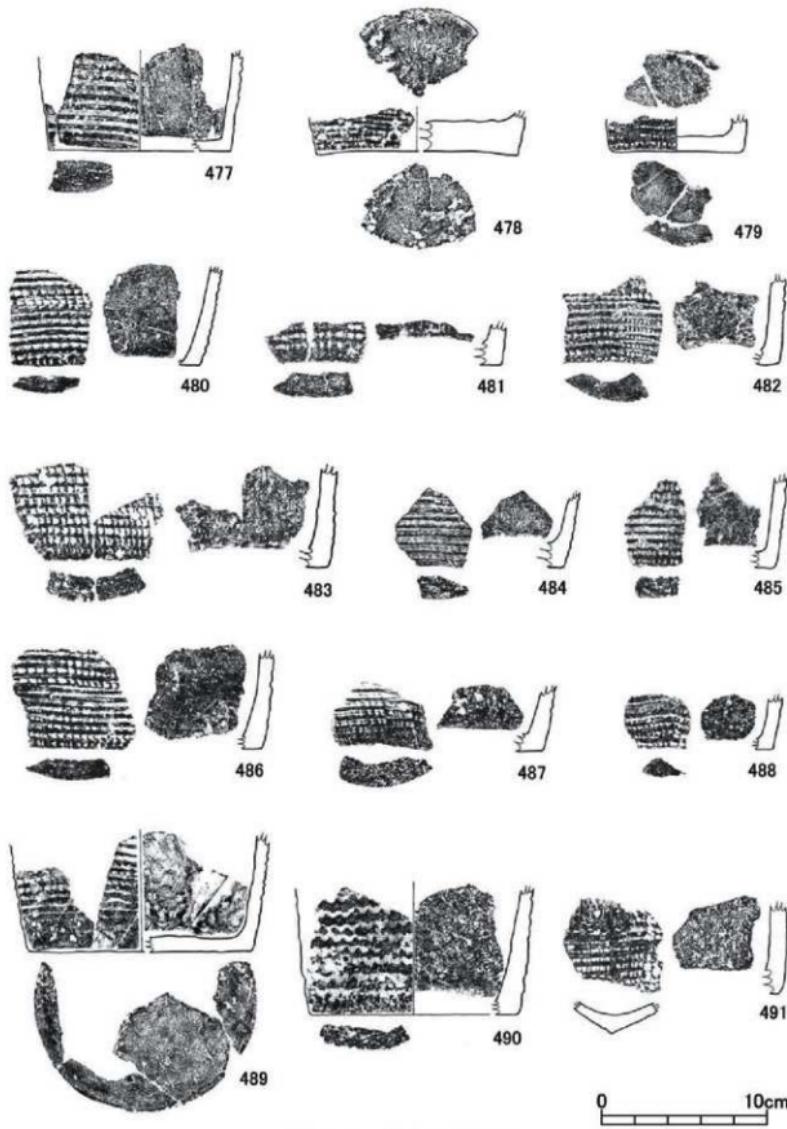
第44図 出土土器(29)



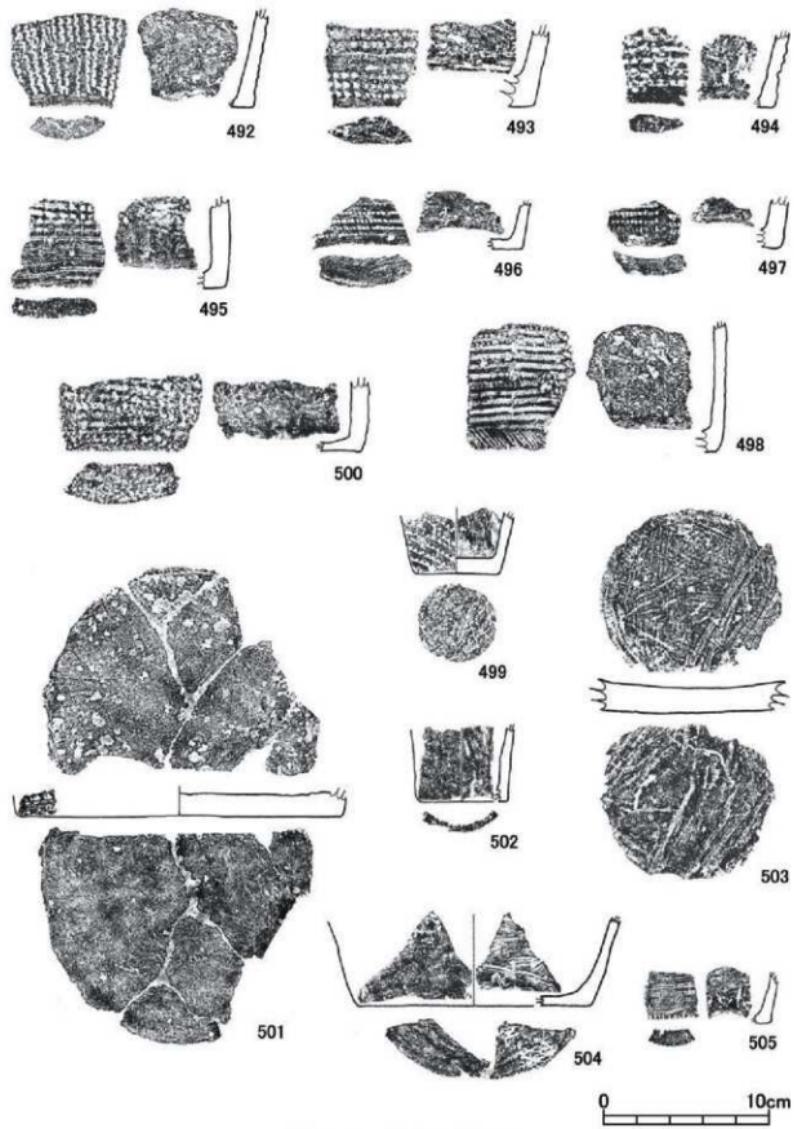
第45図 出土土器(30)



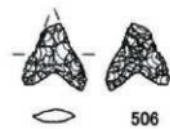
第46図 出土土器(31)



第47図 出土土器(32)



第48図 出土土器(33)

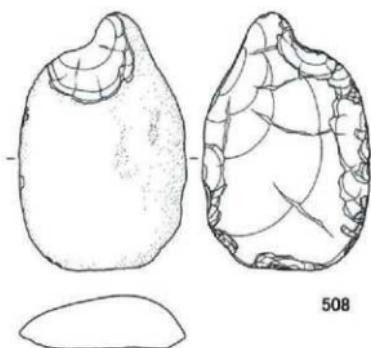


506

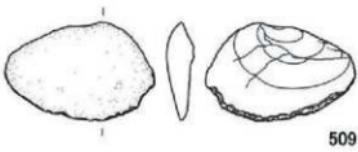


507

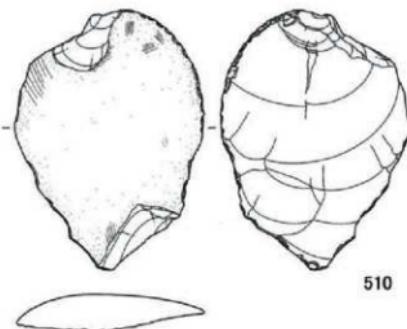
0 5cm

A scale bar indicating 0 and 5 cm.

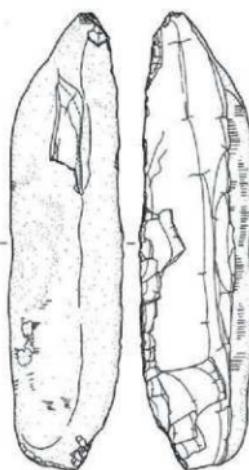
508



509



510

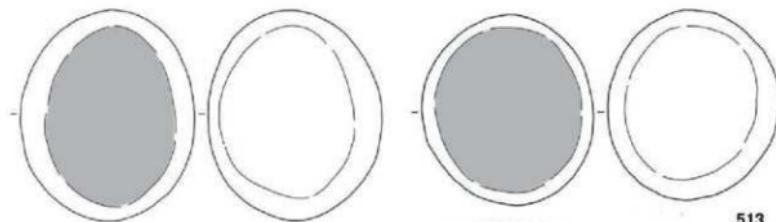


511

0 10cm

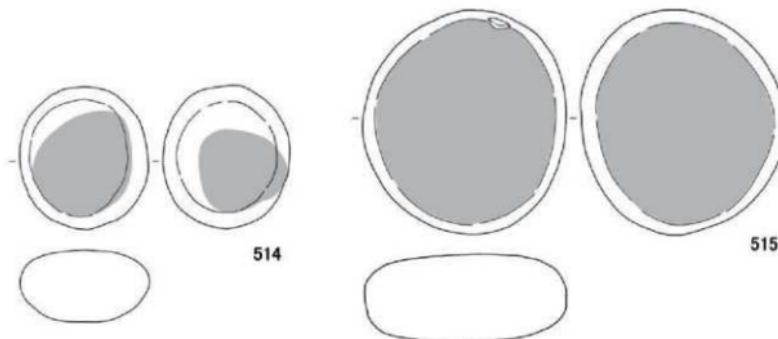
A scale bar indicating 0 and 10 cm.

第49図 出土石器(1)



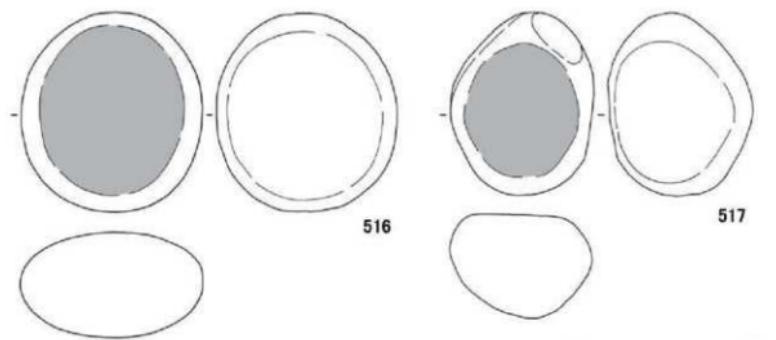
512

513



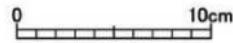
514

515

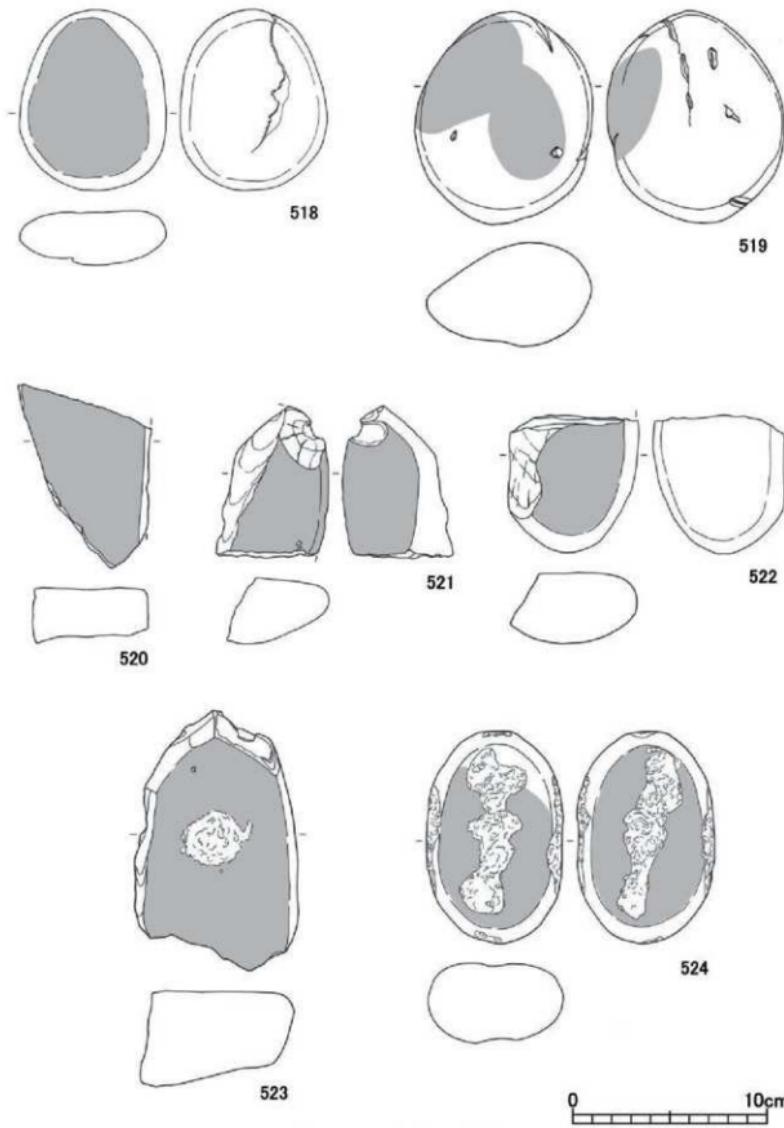


516

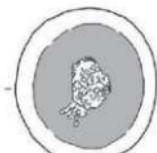
517



第50図 出土石器(2)



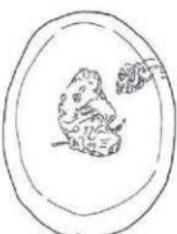
第51図 出土石器(3)



525



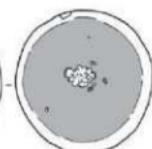
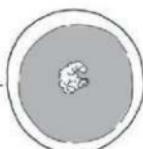
526



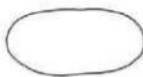
527



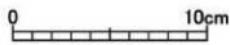
528



529



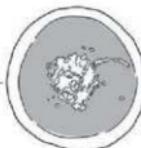
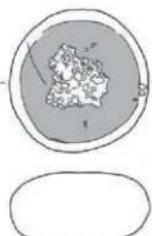
530



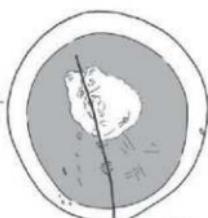
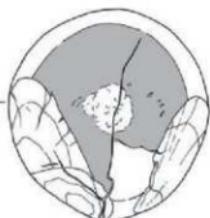
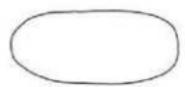
第52図 出土石器(4)



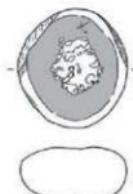
531



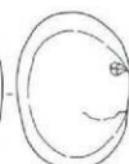
532



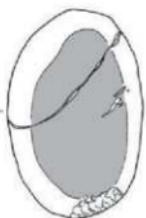
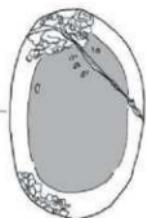
534



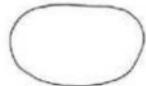
533



535



536



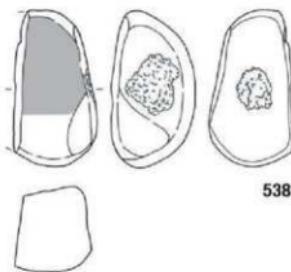
537



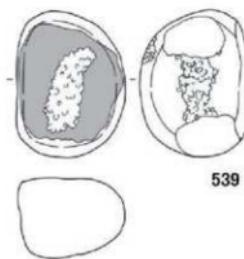
0

10cm

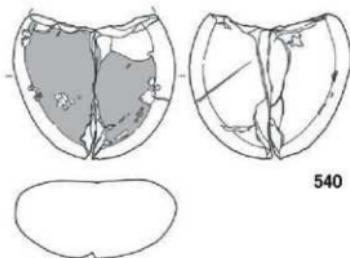
第53図 出土石器(5)



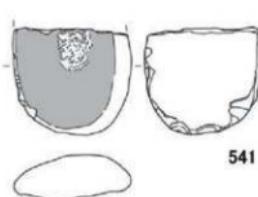
538



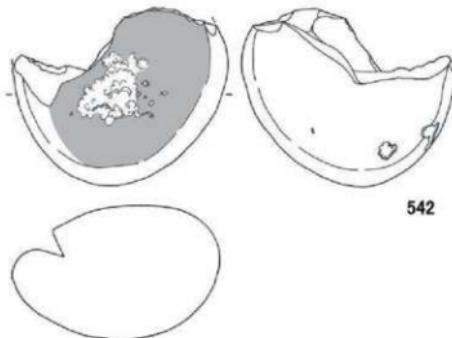
539



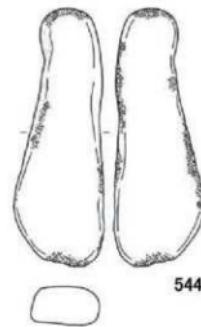
540



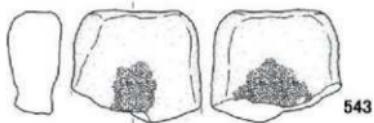
541



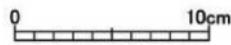
542



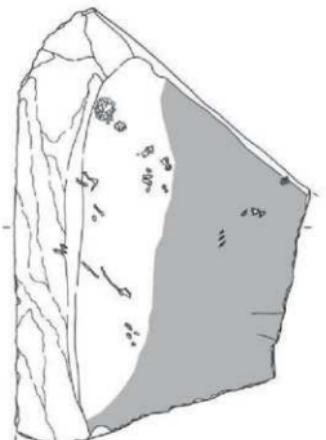
544



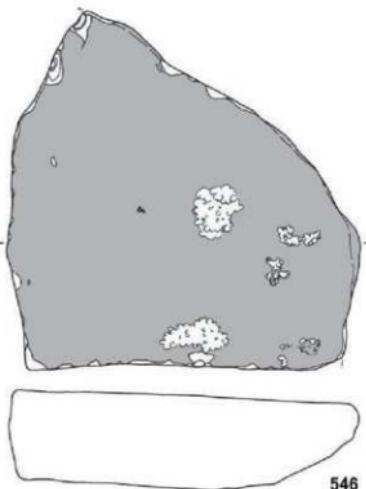
543



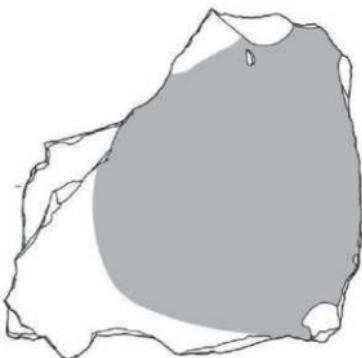
第54図 出土石器(6)



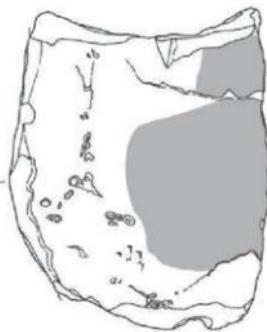
545



546



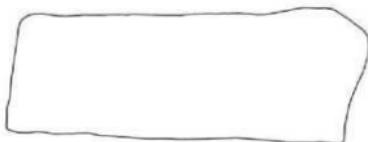
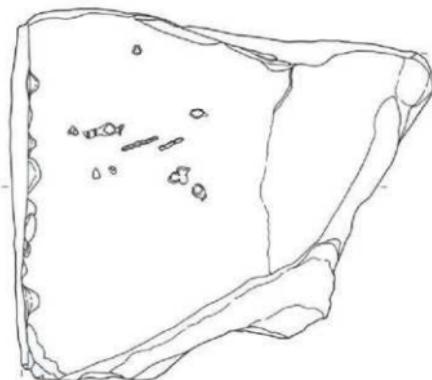
547



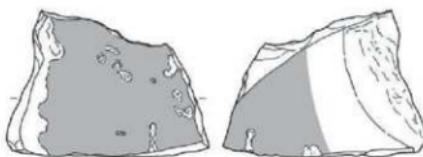
548

A scale bar indicating a length of 10 cm, with a smaller 0 mark at the left end.

第55図 出土石器(7)



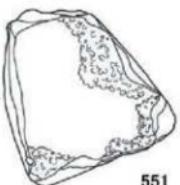
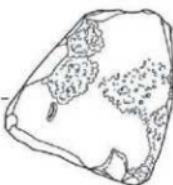
549



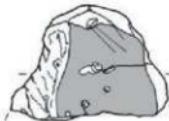
550



0 10cm



551



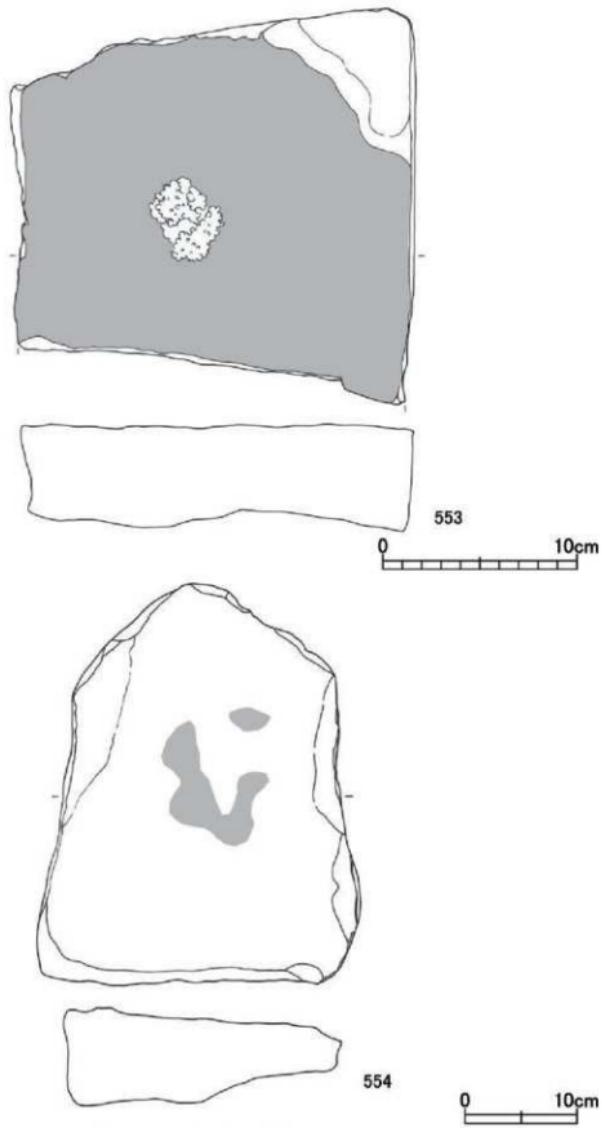
552



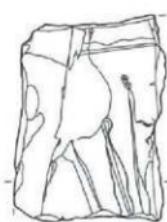
0

10cm

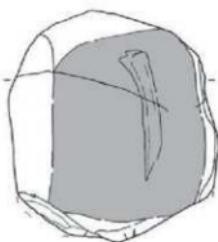
第56図 出土石器(8)



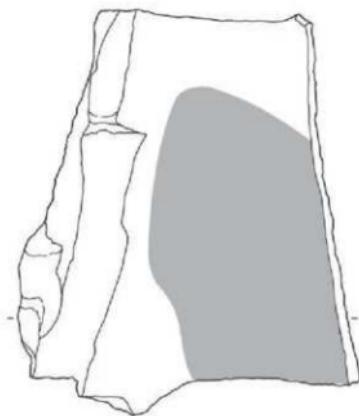
第57図 出土石器(9)



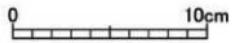
555



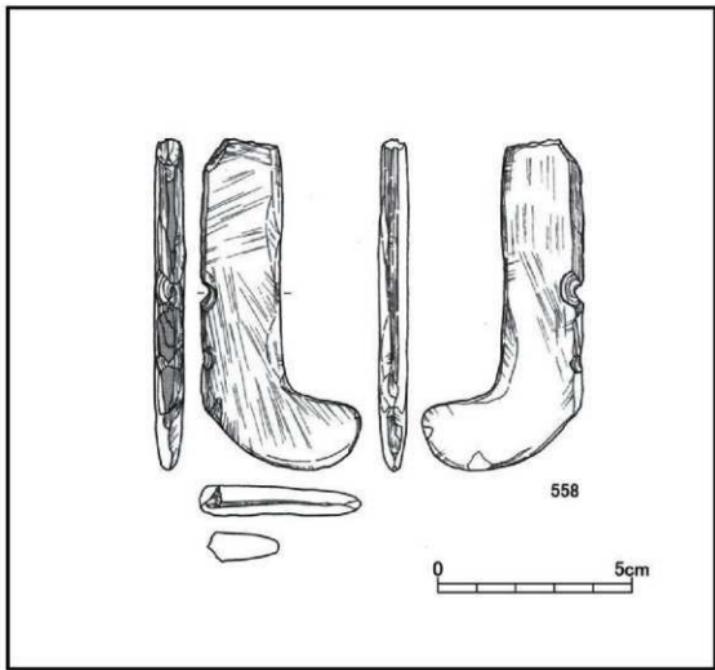
556



557

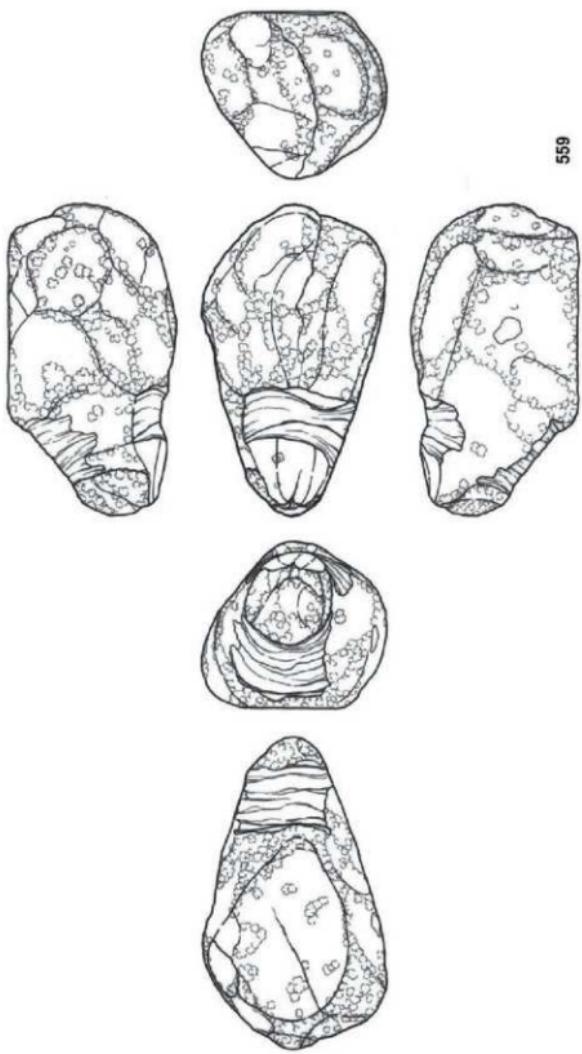


第58図 出土石器(10)



第59図 出土石器(11)

第60図 出土石器(12)



第2表 土器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	取上番号	出土層	出土区	部位	色調外面	色調内面
16	1	116-1,116-2,116-3	IV	10A	胴部	明赤褐	明赤褐
	2	1002-1,1002-2,1007,1008,一括13	IV	2B	口縁部	にぶい赤褐	橙
	3	1010-1~1010-5	IV	2B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	4	10,531,054	IV	7A	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	5	804-1,804-2,804-3	IV	5B	口縁部	橙	にぶい赤褐
	6	243	IV	9B	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐
	7	一括20,一括22	IV	7B	口縁部	にぶい赤褐	淡橙
	8	236	IV	9B	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐
	9	一括C19,一括C20	IV	9B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい橙
	10	393	IV	9A	口縁部	にぶい橙	橙
	11	570	IV	7B	口縁部	明赤褐	にぶい赤褐
	12	350	IV	9A	口縁部	明赤褐	赤褐
	13	200	IV	9B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい橙
	14	3	IV	10B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	15	992-1,992-2	IV	4B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
17	16	一括1	IV	5B	口縁部	にぶい橙	橙
	17	一括C21	IV	9B	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐
	18	837	IV	5B	口縁部	にぶい橙	橙
	19	822,827-1~6,830,832,836,862-1~8,865	IV	5B	口縁部	にぶい橙	橙
	20	900,902,一括24	IV	5A	口縁部	橙	橙
18	21	807,809-1,809-2,828,829,833,834,840	IV	5B	口縁部	にぶい橙	橙
	22	838,841-1,841-2	IV	5B	口縁部	にぶい橙	橙
	23	785	IV	6A	口縁部	橙	にぶい橙
	24	984-1,984-2,984-3,984-4	IV	3B	口縁部	橙	橙
	25	1055	IV	7A	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	26	418	IV	9A	口縁部	橙	橙
	27	143	IV	10A	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	28	861	IV	5B	口縁部	にぶい橙	明赤褐
	29	1005-1~1005-6	IV	2B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	30	201,209,216	IV	9B	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐
	31	568,569	IV	7B	口縁部	灰褐	灰褐
	32	331	IV	9A	口縁部	赤褐	にぶい赤褐
	33	738	IV	8B	口縁部	にぶい褐	明赤褐
	34	443	IV	8B	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐
	35	一括4	IV	8B	口縁部	にぶい橙	橙
	36	一括C40	IV	9B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい橙
	37	1057	IV	7A	口縁部	赤褐	赤褐
19	38	81,82,一括16	IV	10B	口縁部	橙	にぶい赤褐
	39	930-1,930-2,931,一括2	IV	4B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	40	108,111-1~111-4,122-1,122-2	IV	10A	口縁部	にぶい赤褐	にぶい橙
	41	87,88	IV	10B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	42	903-1~903-11,904-1,904-2	IV	5A	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	43	758,759	IV	6B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	44	760	IV	6B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
20	45	952-1~952-4,954,955-1,955-2,962-1	IV	4B	胴部	赤褐	暗赤褐
	46	678-1,678-2,678-3	IV	7B	口縁部	にぶい赤褐	赤褐
	47	162-1,162-2,一括6,一括8	IV	9B	口縁部	にぶい赤褐	赤褐
	48	800	IV	5B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	49	990	IV	3B	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐
	50	996	IV	3A	口縁部	にぶい橙	にぶい橙

第3表 土器観察表(2)

掲図番号	遺物番号	取上番号	出土層	出土区	部位	色調外面	色調内面
20	51	32,41	IV	10B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	52	283	IV	9B	口縁部	にぶい橙	橙
	53	697	IV	8B	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	54	1011	IV	2B	胸部	明赤褐	にぶい赤褐
	55	433	IV	9A	胸部	にぶい赤褐	にぶい橙
	56	277,297-1,297-2	IV	9B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	57	774-1,774-2,774-3	IV	6A	口縁部	にぶい赤褐	にぶい橙
	58	766	IV	6A	口縁部	暗赤褐	赤褐
	59	629	IV	7B	口縁部	赤褐	赤褐
	60	592	IV	7B	口縁部	明赤褐	明赤褐
	61	690	IV	8A	口縁部	赤褐	明赤褐
	62	466	IV	8B	口縁部	赤褐	赤褐
	63	630	IV	7B	口縁部	にぶい赤褐	明赤褐
	64	一括C22	IV	9B	口縁部	明赤褐	明赤褐
	65	30	IV	10B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい橙
	66	22	IV	10B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	67	658	IV	8A	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙
21	68	677-1~677-6	IV	7B	口縁部	にぶい赤褐	暗赤褐
	69	1022	IV	2B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	70	184,195,214	IV	9B	口縁部	にぶい赤褐	明赤褐
	71	890	IV	5A	口縁部	暗赤褐	暗赤褐
	72	57,64-1~2,65-1~3,66-1,66-2, 67,68,70,73,79,83-1,83-2,85,86, 96-1,98,99,100,101,102,104,121	IV	10B	口縁部	暗赤褐	にぶい赤褐
	73	731-1,731-2	IV	8B	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙
	74	720-1~720-6,722	IV	8B	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐
	75	914-1~914-4,一括7	IV	5A	口縁部	赤褐	暗赤褐
	76	922-1,922-2,923	IV	4B	口縁部	赤褐	暗赤褐
	77	513,514,522,531-1,531-2	IV	11A	口縁部	明赤褐	明赤褐
22	78	360	IV	9A	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	79	866	IV	5A	口縁部	にぶい赤褐	にぶい橙
	80	13	IV	10B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	81	964-1,964-2,965-1,965-2,980	IV	4A	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	82	674	IV	8A	口縁部	暗赤褐	にぶい赤褐
	83	751	IV	6B	口縁部	にぶい橙	灰褐
	84	一括9,一括10	IV	8A	口縁部	明赤褐	明赤褐
	85	803-1,803-2	IV	5B	口縁部	橙	橙
	86	1028	IV	2B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	87	708,726,733,740-1~740-5	IV	8B	口縁部	橙	橙
	88	651	IV	8A	口縁部	赤褐	明赤褐
23	89	579	IV	7B	口縁部	赤褐	極暗赤褐
	90	645	IV	8A	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	91	663	IV	8A	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	92	631	IV	7B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	93	816,863	IV	5B	口縁部	橙	明赤褐
	94	659	IV	8A	口縁部	極暗赤褐	極暗赤褐
	95	38-1,38-2	IV	10B	口縁部	橙	橙
24	96	一括14	IV	8B	口縁部	橙	橙
	97	一括18	IV	7B	口縁部	明赤褐	赤褐
25	98	375-1~375-4,376-1,376-2	IV	9A	口縁部	にぶい赤褐	赤褐

第4表 土器観察表(3)

挿図番号	遺物番号	取上番号	IV	出土区	部位	色調外面	色調内面
23	99	51,62-1~2,80,89,90-1~2,94-1~4	IV	10B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	100	449,450,451,453,454,456,458,465-1,465-2,472-3	IV	8B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	101	1006-1,1006-2,1006-3	IV	2B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	102	1030	IV	2B	胴部	にぶい橙	橙
	103	588	IV	7B	胴部	灰褐	にぶい橙
	104	一括C10	IV	7B	胴部	暗赤褐	明赤褐
	105	634	IV	8A	胴部	赤褐	
	106	407-1~407-3	IV	9A	口縁部	橙	明赤褐
	107	892	IV	5A	口縁部	にぶい赤褐	明赤褐
	108	883-1,883-2,883-3	IV	5A	口縁部	にぶい赤褐	明赤褐
24	109	574-1,574-2,575-1,575-2	IV	7B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい橙
	110	549,551,552,553-1~2,554-1~2,555,556	IV	11A	口縁部	にぶい橙	赤褐
	111	439	IV	8B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	112	1024-1,1024-2	IV	2B	口縁部	赤褐	明赤褐
	113	436	IV	8B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	114	476	IV	8B	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐
	115	一括3	IV	11A	口縁部	灰褐	にぶい橙
	116	74	IV	10B	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐
	117	851,852	IV	5A	口縁部	明褐灰	明褐灰
	118	215	IV	9B	口縁部	にぶい赤褐	明赤褐
25	119	224	IV	9B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	120	一括C12	IV	9B	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐
	121	336	IV	9A	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	122	1004	IV	2B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	123	171,180,196-1~3,218-1~3,一括C3	IV	9B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	124	561-1,561-2,561-3,561-4	IV	7B	口縁部	赤褐	にぶい赤褐
	125	270-1,270-2,270-3,271	IV	9B	口縁部	明赤褐	明赤褐
	126	642-1,642-2	IV	8A	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	127	1051	IV	7A	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	128	220-1~2,286-1~3,288-1~4	IV	9B	口縁部	にぶい橙	橙
26	129	739-1~7,741,742,743	IV	8B	口縁部	にぶい橙	灰褐
	130	610,611,612-1~2,613-1~2,614,617-1~3,675,一括23,一括26,一括C5,一括C8,一括C9,一括C13,一括C16,一括C19~一括C21	IV	7B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	131	595-1~595-12,595-15~595-18	IV	7B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	132	5(10B),142-1,142-2	IV	10A	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	133	44	IV	10B	口縁部	にぶい赤褐	明赤褐
	134	138	IV	10A	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	135	535,536,537,538	IV	11A	口縁部	明赤褐	にぶい赤褐
	136	391,402-4	IV	9A	口縁部	橙	橙
	137	524-1,524-2	IV	11A	口縁部	にぶい赤褐	灰褐
	138	628-1,628-2,一括6	IV	7B	口縁部	明赤褐	明赤褐
	139	1-1,1-2,1-3,1-4	IV	10B	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐
	140	78	IV	10B	口縁部	橙	にぶい赤褐
	141	397	IV	9A	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	142	409	IV	9A	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐
	143	312	IV	9B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	144	521	IV	11A	口縁部	橙	赤褐

第5表 土器観察表(4)

挿図番号	遺物番号	取上番号	出土層	出土区	部位	色調外面	色調内面
26	145	595-13,595-14	IV	7B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	146	一括C11	IV	9B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	147	426	IV	8B	口縁部	橙	橙
	148	311	IV	9B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	149	84	IV	10B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい橙
	150	1050,-1括3	IV	7A	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	151	813	IV	5B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい橙
	152	805	IV	5B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	153	227	IV	9B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	154	109	IV	10A	口縁部	浅黄橙	にぶい橙
27	155	512	IV	11A	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	156	45	IV	10B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	157	422	IV	9A	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐
	158	一括C1,-1括C2,-1括C7	IV	9B	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	159	131	IV	10A	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	160	792	IV	5B	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	161	728-1,728-2	IV	8B	胸部	明赤褐	明赤褐
	162	530	IV	11A	胸部	にぶい橙	浅黄橙
	163	943	IV	4B	胸部	明赤褐	明赤褐
	164	118	IV	10A	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	165	927	IV	4B	胸部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	166	一括15	IV	10B	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	167	529	IV	11A	胸部	にぶい赤褐	にぶい橙
	168	853	IV	5A	胸部	にぶい橙	灰褐
	169	540	IV	11A	胸部	にぶい赤褐	にぶい橙
	170	120	IV	10A	胸部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	171	247	IV	9B	胸部	にぶい橙	にぶい赤褐
	172	603,604-1~604-4	IV	7B	胸部	明赤褐	明赤褐
	173	290,295	IV	9B	胸部	赤褐	にぶい橙
	174	894	IV	5A	胸部	明赤褐	橙
28	175	158-1,158-2	IV	10A	胸部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	176	469,-1括11	IV	8B	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	177	729	IV	8B	胸部	にぶい橙	にぶい赤褐
	178	444	IV	8B	胸部	にぶい赤褐	赤褐
	179	557	IV	11A	胸部	にぶい赤褐	にぶい橙
	180	1066	IV	7A	胸部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	181	一括11	IV	7A	胸部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	182	275-1,275-2	IV	9B	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	183	799	IV	5B	胸部	橙	にぶい赤褐
	184	181	IV	9B	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	185	582	IV	7B	胸部	暗赤褐	にぶい赤褐
	186	480	IV	8B	胸部	灰黄褐	にぶい橙
	187	307	IV	9B	胸部	にぶい赤褐	赤褐
	188	753	IV	6B	胸部	にぶい赤褐	橙
	189	170	IV	9B	胸部	橙	にぶい赤褐
	190	386	IV	9A	胸部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	191	527	IV	11A	胸部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	192	772	IV	6A	胸部	にぶい橙	にぶい赤褐
	193	462	IV	8B	胸部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	194	一括5	IV	11A	胸部	灰褐	にぶい橙

第6表 土器観察表(5)

掲図番号	遺物番号	取上番号	出土層	出土区	部位	色調外面	色調内面
29	195	一括11	IV	7B	胴部	明赤褐	にぶい橙
	196	505,506-1,506-2,510	IV	11A	胴部	明赤褐	にぶい赤褐
	197	508	IV	11A	胴部	橙	にぶい橙
	198	517	IV	11A	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	199	533	IV	11A	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	200	223-1,223-2	IV	9B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	201	一括36	IV	9B	胴部	赤褐	明赤褐
	202	一括31	IV	5A	胴部	にぶい赤褐	暗赤褐
	203	806,831-1~831-4,835	IV	5B	胴部	にぶい橙	橙
	204	206-1,206-2,222-1,222-2	IV	9B	胴部	橙	にぶい赤褐
30	205	684,685,686,687,744	IV	8A	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	206	234-1,234-2,268	IV	9B	胴部	橙	にぶい橙
	207	653-1~653-8	IV	8A	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	208	1060,1061	IV	7A	胴部	明赤褐	橙
	209	198	IV	9B	胴部	橙	橙
	210	494,498	IV	11A	胴部	にぶい橙	橙
	211	一括C6,一括C31	IV	9B	胴部	明赤褐	橙
	212	173	IV	9B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	213	694,695	IV	8B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	214	754	IV	6B	胴部	淡橙	にぶい橙
31	215	320	IV	9B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	216	332-1	IV	9A	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	217	457	IV	8B	胴部	橙	明赤褐
	218	591-1~591-5	IV	7B	胴部	にぶい赤褐	明赤褐
	219	58	IV	10B	胴部	橙	にぶい赤褐
	220	1012-1,1012-2	IV	2B	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐
	221	4	IV	10B	胴部	明赤褐	暗赤褐
	222	1013,1014	IV	2B	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐
	223	213-1,213-2	IV	9B	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	224	600-1,600-2	IV	7B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
32	225	896	IV	5A	胴部	赤褐	赤褐
	226	839	IV	5B	胴部	橙	橙
	227	888-1,888-2	IV	5A	胴部	赤褐	にぶい赤褐
	228	1063-1,1063-2	IV	7A	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐
	229	199	IV	9B	胴部	橙	にぶい赤褐
	230	520	IV	11A	胴部	にぶい赤褐	橙
	231	826-1,826-2	IV	5B	胴部	にぶい赤褐	橙
	232	590-1,590-2	IV	7B	胴部	にぶい赤褐	明赤褐
	233	326	IV	9B	胴部	明赤褐	にぶい赤褐
	234	一括C13,一括C14,一括C15	IV	9B	胴部	橙	橙
33	235	293	IV	9B	胴部	赤褐	明赤褐
	236	177	IV	9B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	237	163	IV	9B	胴部	にぶい橙	明赤褐
	238	43	IV	10B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	239	24	IV	10B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	240	870	IV	5A	胴部	橙	明赤褐
	241	880-1,880-2	IV	5A	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	242	730	IV	8B	胴部	灰褐	極暗赤褐
	243	655	IV	8A	胴部	橙	暗赤褐
	244	846	IV	5A	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐

第7表 土器観察表(6)

挿図番号	遺物番号	取上番号	出土層	出土区	部位	色調外面	色調内面
32	245	562	IV	7B	胴部	赤褐	暗赤褐
	246	798	IV	5B	胴部	明赤褐	明赤褐
	247	36	IV	10B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
33	248	775	IV	6A	胴部	明赤褐	暗赤褐
	249	1059	IV	6B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	250	一括31	IV	9B	胴部	橙	にぶい赤褐
	251	1017	IV	2B	胴部	にぶい赤褐	明赤褐
	252	801	IV	5B	胴部	橙	にぶい橙
	253	239	IV	9B	胴部	橙	にぶい橙
	254	一括C9	IV	9B	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐
	255	618-1,618-2	IV	7B	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	256	770	IV	6A	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	257	412	IV	9A	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	258	一括C3	IV	7B	胴部	赤褐	明赤褐
	259	750	IV	6B	胴部	橙	橙
	260	238	IV	9B	胴部	明赤褐	赤褐
	261	993-1,993-2,993-3	IV	3A	胴部	橙	橙
	262	一括C7	IV	7B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	263	637	IV	8A	胴部	明赤褐	赤褐
	264	640	IV	8A	胴部	明赤褐	暗赤褐
	265	615	IV	7B	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	266	721	IV	8B	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐
	267	616	IV	7B	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	268	621	IV	7B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	269	432	IV	9A	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	270	823	IV	5B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	271	一括13	IV	5A	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
34	272	174	IV	9B	胴部	橙	赤褐
	273	一括14	IV	5B	胴部	橙	にぶい赤褐
	274	一括16	IV	5B	胴部	にぶい橙	赤褐
	275	779	IV	6A	胴部	明赤褐	にぶい赤褐
	276	855	IV	5A	胴部	明赤褐	明赤褐
	277	692	IV	8B	胴部	にぶい黄橙	にぶい橙
	278	一括32	IV	9B	胴部	にぶい赤褐	明赤褐
	279	676-1,676-2	IV	7B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	280	769	IV	6A	胴部	明赤褐	にぶい赤褐
	281	一括35	IV	5A	胴部	明赤褐	明赤褐
	282	991	IV	3B	胴部	橙	橙
	283	994-1,994-2	IV	3A	胴部	橙	にぶい赤褐
	284	627-1,627-2,627-3	IV	8A	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	285	一括15	IV	5A	胴部	明赤褐	赤褐
	286	463	IV	8B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	287	400-1,400-2	IV	9A	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	288	667	IV	8A	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	289	477	IV	8B	胴部	にぶい黄橙	明褐灰
	290	28	IV	10B	胴部	橙	にぶい橙
	291	849	IV	5A	胴部	暗赤褐	明赤褐
	292	一括C29	IV	9B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	293	856	IV	5A	胴部	にぶい赤褐	明赤褐
	294	525	IV	11A	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐

第8表 土器観察表(7)

捕団番号	遺物番号	取上番号	出土層	出土区	部位	色調外面	色調内面
34	295	601-1,601-2	IV	7B	胴部	明赤褐	明赤褐
	296	401-1,401-2	IV	9A	胴部	明赤褐	にぶい赤褐
	297	107-1,107-2	IV	10A	胴部	橙	明赤褐
	298	385-1,385-2,385-3	IV	9A	胴部	赤褐	にぶい赤褐
	299	491	IV	11A	胴部	赤褐	赤褐
	300	368,369	IV	9A	胴部	明赤褐	にぶい赤褐
	301	329,330-1,330-2	IV	9A	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
35	302	335,337-1,337-2,345	IV	9A	胴部	にぶい橙	橙
	303	47	IV	10B	胴部	にぶい赤褐	暗赤褐
	304	895-1,895-2	IV	5A	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐
	305	一括1	IV	7B	胴部	赤褐	にぶい赤褐
	306	一括34	IV	9B	胴部	にぶい赤褐	にぶい橙
	307	一括20	IV	2B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	308	783	IV	6A	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	309	244,245	IV	9B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	310	294	IV	9B	胴部	にぶい橙	明赤褐
	311	一括10	IV	7B	胴部	赤褐	にぶい赤褐
	312	402-1,402-2,402-3	IV	9A	胴部	にぶい赤褐	にぶい橙
	313	140	IV	10A	胴部	にぶい橙	橙
	314	332-2	IV	9A	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	315	669	IV	8A	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	316	31,40,一括9	IV	10B	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐
	317	419,一括1	IV	9A	胴部	橙	にぶい赤褐
	318	485	IV	8B	胴部	にぶい橙	橙
36	319	34	IV	10B	胴部	暗赤褐	にぶい赤褐
	320	一括C2,一括C6	IV	7B	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	321	一括15	IV	4B	胴部	明赤褐	にぶい赤褐
	322	1003	IV	2B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	323	671	IV	8A	胴部	橙	橙
	324	265-1,265-2	IV	9B	胴部	橙	にぶい赤褐
	325	907	IV	5A	胴部	明赤褐	にぶい橙
	326	717	IV	8B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	327	989	IV	3B	胴部	橙	にぶい橙
	328	1041	IV	2A	胴部	明赤褐	赤褐
	329	884	IV	5A	胴部	明赤褐	橙
	330	474	IV	8B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	331	1032,1033,1035(2B)	IV	2A	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	332	33,35,37	IV	10B	胴部	橙	橙
	333	787	IV	6A	胴部	明赤褐	明赤褐
	334	644	IV	8A	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	335	204	IV	9B	胴部	橙	暗赤褐
	336	261,262-1,262-2	IV	9B	胴部	明赤褐	赤褐
	337	一括C8	IV	9B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	338	211	IV	9B	胴部	明赤褐	橙
	339	192,一括26	IV	9B	胴部	明赤褐	にぶい赤褐
	340	183	IV	9B	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐
	341	113-1,113-2	IV	10A	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐
38	342	915,一括18	IV	5A	胴部	明赤褐	にぶい橙
	343	483	IV	8B	胴部	にぶい橙	橙
	344	1019	IV	2B	胴部	にぶい橙	にぶい橙

第9表 土器観察表(8)

挿図番号	遺物番号	取上番号	出土層	出土区	部位	色調外面	色調内面
38	345	912-1,912-2	IV	5A	胸部	にぶい赤褐	にぶい橙
	346	997-1,997-2	IV	3A	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	347	1023,1025	IV	2B	胸部	明赤褐	明赤褐
	348	26	IV	10B	胸部	にぶい橙	にぶい赤褐
	349	749-1~749-4	IV	6B	胸部	橙	橙
	350	1026	IV	2B	胸部	明赤褐	赤褐
	351	358	IV	9A	胸部	にぶい赤褐	橙
	352	998,999	IV	2B	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	353	608	IV	7B	胸部	明赤褐	暗赤褐
	354	698	IV	8B	胸部	にぶい黄橙	にぶい赤褐
	355	589	IV	7B	胸部	にぶい赤褐	赤褐
	356	793	IV	5B	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	357	377	IV	9A	胸部	にぶい赤褐	赤褐
	358	526	IV	11A	胸部	明赤褐	明赤褐
	359	889-1,889-2	IV	5A	胸部	赤褐	にぶい赤褐
39	360	666	IV	8A	胸部	明赤褐	にぶい赤褐
	361	656-1,656-2	IV	8A	胸部	橙	橙
	362	906	IV	5A	胸部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	363	585	IV	7B	胸部	明赤褐	明赤褐
	364	一括4,一括27	IV	5A	胸部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	365	847-1~847-5	IV	5A	胸部	赤褐	にぶい赤褐
	366	576-1,576-2,576-3	IV	7B	胸部	赤褐	暗赤褐
	367	972	IV	4A	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	368	484	IV	8B	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	369	486	IV	8B	胸部	にぶい橙	にぶい赤褐
	370	661	IV	8A	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	371	973	IV	4A	胸部	にぶい橙	灰褐
	372	796-1,796-2	IV	5B	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	373	773-1	IV	6A	胸部	明赤褐	赤褐
	374	471	IV	8B	胸部	橙	にぶい赤褐
	375	609	IV	7B	胸部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	376	169	IV	9B	胸部	橙	にぶい橙
40	377	132-1,132-2	IV	10A	胸部	にぶい橙	橙
	378	447	IV	8B	胸部	にぶい橙	にぶい褐
	379	1018	IV	2B	胸部	明赤褐	暗赤褐
	380	913	IV	5A	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	381	911-1,911-2	IV	5A	胸部	明赤褐	にぶい橙
	382	882	IV	5A	胸部	赤褐	にぶい赤褐
	383	670	IV	8A	胸部	にぶい橙	橙
	384	878-1,878-2	IV	5A	胸部	明赤褐	にぶい赤褐
	385	327-4	IV	9B	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	386	一括5	IV	5A	胸部	にぶい赤褐	赤褐
	387	一括19,一括20	IV	9B	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	388	934	IV	4B	胸部	明赤褐	橙
	389	一括5	IV	4B	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	390	665	IV	8A	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	391	842	IV	5B	胸部	にぶい橙	灰褐
	392	一括34	IV	5A	胸部	にぶい橙	にぶい橙
	393	一括25	IV	7B	胸部	暗赤褐	赤褐
	394	373	IV	9A	胸部	灰褐	灰褐

第10表 土器観察表(9)

掲図番号	遺物番号	取上番号	出土層	出土区	部位	色調外面	色調内面
40	395	一括21	IV	7B	胴部	赤褐	極暗赤褐
	396	75,一括10(10B)	IV	10A	胴部	にぶい橙	橙
	397	202	IV	9B	胴部	にふい橙	にぶい橙
	398	258	IV	9B	胴部	橙	赤褐
41	399	794,795,797,859	IV	5B	胴部	橙	にぶい赤褐
	400	一括10,一括13	IV	5B	胴部	橙	にぶい赤褐
	401	346	IV	9A	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	402	352	IV	9A	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	403	253	IV	9B	胴部	明赤褐	灰褐
	404	718	IV	8B	胴部	橙	黒褐
	405	354	IV	9A	胴部	赤褐	暗赤褐
	406	348-1,348-2	IV	9A	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	407	353	IV	9A	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	408	一括2	IV	2A	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	409	460	IV	8B	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	410	956-2~956-7	IV	4B	胴部	にぶい赤褐	暗赤褐
	411	971	IV	4A	胴部	にぶい赤褐	暗赤褐
	412	950-1	IV	4B	胴部	にぶい赤褐	暗赤褐
	413	950-2	IV	4B	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
42	414	956-1,979-1	IV	4B	胴部	にぶい赤褐	暗赤褐
	415	1048-1	IV	2A	胴部	暗赤褐	にぶい赤褐
	416	1044-1,1044-2	IV	2A	胴部	暗赤褐	にぶい赤褐
	417	1046	IV	2A	胴部	にぶい橙	暗赤褐
	418	1045-1	IV	2A	胴部	にぶい赤褐	暗赤褐
	419	1045-2	IV	2A	胴部	にぶい赤褐	暗赤褐
	420	1043	IV	2A	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	421	877-1~877-4	IV	5A	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐
	422	891	IV	5A	胴部	にぶい橙	灰褐
	423	一括30	IV	5A	胴部	にぶい橙	明褐灰
	424	一括18	IV	4B	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	425	一括32	IV	5A	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐
	426	一括19	IV	4B	胴部	明赤褐	明赤褐
	427	一括47	IV	5A	胴部	にぶい赤褐	赤褐
	428	一括10	IV	3B	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
43	429	427,706-1,706-2	IV	8B	底部	にぶい橙	灰褐
	430	580-1,1580-2	IV	7B	底部	明赤褐	明赤褐
	431	928-1~18,978-1~4	IV	4B	底部	明赤褐	明赤褐
	432	327-1~3,490-1~3	IV	9B	底部	橙	明赤褐
	433	178,179,190	IV	9B	底部	にぶい橙	橙
	434	573,577-1~577-10	IV	7B	底部	明赤褐	明赤褐
	435	887,910-1,910-2,一括20,901,908	IV	5A	底部	赤褐	にぶい赤褐
44	436	691-1(8A),691-2(8A),693,700	IV	8B	底部	にぶい橙	にぶい橙
	437	2-1,2-2,2-3,一括17	IV	10B	底部	にぶい橙	橙
	438	154,156-1,156-2	IV	10A	底部	にぶい赤褐	赤褐
	439	133,168	IV	10A	底部	にぶい黄褐	にぶい黄褐
	440	46	IV	10B	底部	にぶい橙	にぶい橙
	441	435	IV	8B	底部	明赤褐	赤褐
	442	242,266,281-1~4	IV	9B	底部	にぶい橙	にぶい赤褐
	443	189,287	IV	9B	底部	にぶい橙	にぶい橙
	444	282-1,282-2,302	IV	9B	底部	にぶい橙	にぶい橙

第11表 土器観察表(10)

掲図番号	遺物番号	取上番号	出土層	出土区	部位	色調外面	色調内面
45	445	976,977	IV	4A	底部	橙	橙
	446	298,300	IV	9B	底部	橙	明赤褐
	447	251,256-1,256-2	IV	9B	底部	明赤褐	にぶい赤褐
	448	264	IV	9B	底部	にぶい橙	にぶい橙
	449	709,746	IV	8B	底部	にぶい橙	にぶい褐
	450	808-1,808-2	IV	5B	底部	にぶい橙	にぶい赤褐
	451	680	IV	8A	底部	にぶい橙	にぶい赤褐
	452	854,一括45,一括46	IV	5A	底部	橙	にぶい赤褐
	453	188	IV	9B	底部	にぶい橙	にぶい橙
	454	194	IV	9B	底部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	455	一括10	IV	2A	底部	にぶい赤褐	にぶい橙
	456	791	IV	5B	底部	橙	橙
	457	428	IV	8B	底部	にぶい橙	にぶい橙
	458	546	IV	11A	底部	橙	明赤褐
	459	824	IV	5B	底部	にぶい橙	橙
	460	563	IV	7B	底部	にぶい橙	にぶい赤褐
	461	一括4	IV	11A	底部	にぶい橙	にぶい橙
	462	一括9	IV	2A	底部	明赤褐	赤褐
46	463	581	IV	7B	底部	灰褐	暗赤褐
	464	367	IV	9A	底部	にぶい褐	にぶい橙
	465	208	IV	9B	底部	明赤褐	にぶい赤褐
	466	817	IV	5B	底部	明赤褐	明赤褐
	467	一括5	IV	7A	底部	赤褐	赤褐
	468	185	IV	9B	底部	にぶい橙	明赤褐
	469	61	IV	10B	底部	橙	橙
	470	445	IV	8B	底部	にぶい赤褐	明赤褐
	471	一括C18	IV	9B	底部	にぶい赤褐	にぶい橙
	472	1058	IV	6B	底部	にぶい赤褐	にぶい橙
	473	748	IV	6B	底部	にぶい橙	にぶい橙
	474	916	IV	5A	底部	にぶい橙	にぶい橙
	475	819,820-1~3,821,825-1~11	IV	5B	底部	にぶい橙	にぶい橙
	476	321,323-1,323-2,363	IV	9B	底部	にぶい橙	にぶい橙
47	477	193,203	IV	9B	底部	明赤褐	にぶい赤褐
	478	59	IV	10B	底部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	479	406,424-1~3	IV	9A	底部	にぶい赤褐	赤褐
	480	780	IV	6A	底部	にぶい赤褐	赤褐
	481	23-1,23-2	IV	10B	底部	にぶい橙	にぶい橙
	482	1015	IV	2B	底部	にぶい橙	にぶい橙
	483	618-3,一括C11	IV	7B	底部	明赤褐	にぶい赤褐
	484	662	IV	8A	底部	橙	明赤褐
	485	501-1,501-2	IV	11A	底部	橙	明赤褐
	486	1062	IV	7A	底部	にぶい赤褐	赤褐
	487	438	IV	8B	底部	橙	橙
	488	一括6	IV	2B	底部	にぶい橙	にぶい橙
	489	246,272,289,299,328	IV	9B	底部	橙	橙
48	490	503	IV	11A	底部	橙	にぶい橙
	491	152	IV	10A	底部	橙	明赤褐
	492	689	IV	8A	底部	にぶい橙	淡橙
	493	一括10	IV	2B	底部	橙	橙
494	494	587	IV	7B	底部	にぶい橙	にぶい橙

第12表 土器観察表(11)

挿図番号	遺物番号	取上番号	出土層	出土区	部位	色調外面	色調内面
48	495	725	IV	8B	底部	にぶい橙	にぶい橙
	496	623	IV	7B	底部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	497	一括19	IV	5A	底部	赤褐	にぶい赤褐
	498	310	IV	9B	底部	にぶい橙	にぶい橙
	499	869	IV	5A	底部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	500	一括C16	IV	9B	底部	橙	にぶい橙
	501	248,250,254,257,一括25	IV	9B	底部	にぶい橙	橙
	502	1038	IV	2A	底部	暗赤褐	暗赤褐
	503	467	IV	8B	底部	にぶい橙	にぶい橙
	504	42,49	IV	10B	底部	にぶい橙	にぶい橙
	505	一括7	IV	3B	底部	にぶい赤褐	にぶい赤褐

第13表 石器観察表(1)

掲図番号	遺物番号	器種	出土区	取上番号	出土層	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	石材
49	506	石礫	5A	858	IV	1.3	1.6	0.3	0.7	チャート
	507	石礫	10B	15	IV	1.7	1.3	0.2	0.4	頁岩
	508	剥片石器	9B	263	IV	10.4	5.8	2.1	192.3	砂岩
	509	剥片石器	9A	333	IV	4.0	6.1	1.1	22.7	砂岩
	510	剥片石器	9A	361	IV	10.5	7.7	1.6	123	砂岩
	511	剥片石器	10A	147	IV	18.5	4.6	2.2	260.7	砂岩
50	512	磨石	4B	932	IV	10.8	8.8	5.3	719	砂岩
	513	磨石	9A	382	IV	9.8	8.8	4.5	554	砂岩
	514	磨石	9A	389	IV	7.3	5.7	3.7	265	砂岩
	515	磨石	5A	873	IV	11.6	10.3	3.7	627	砂岩
	516	磨石	4B	920	IV	10.3	9.3	5.4	734	砂岩
	517	磨石	10A	151	IV	9.3	7.3	5.3	493	砂岩
51	518	磨石	6A	771	IV	10.2	7.5	2.7	255	砂岩
	519	磨石	8A	652	IV	15.0	12.0	5.4	619	砂岩
	520	磨石	5B	802	IV	9.4	5.9	2.9	222	砂岩
	521	磨石	9B	309	IV	7.8	5.2	3.4	151	砂岩
	522	磨石	4B	939	IV	7.0	6.6	3.8	235	砂岩
	523	磨石敲石	6A	776	IV	12.6	8.4	4.9	688	砂岩
52	524	磨石敲石	9B	319	IV	10.9	7.0	4.0	440	砂岩
	525	磨石敲石	10B	50	IV	8.0	7.3	3.2	264	砂岩
	526	磨石敲石	8B	425	IV	8.4	5.9	3.5	253	砂岩
	527	磨石敲石	8A	625	IV	11.5	8.8	4.7	631	砂岩
	528	磨石敲石	8A	660	IV	10.1	8.1	3.4	420	砂岩
	529	磨石敲石	4B	945	IV	7.3	7.0	3.4	250	砂岩
53	530	磨石敲石	9B	489	IV	10.2	8.3	4.5	583	砂岩
	531	磨石敲石	2B	1009	IV	11.5	8.6	3.8	567	砂岩
	532	磨石敲石	8A	681	IV	7.3	7.2	3.5	267	砂岩
	533	磨石敲石	4B	918	IV	6.1	5.5	2.7	130	砂岩
	534	磨石敲石	2B	1034	IV	10.8	10.3	4.8	730	砂岩
	535	磨石敲石	9A	349	IV	8.1	5.6	3.7	230	砂岩
54	536	磨石敲石	11A	558	IV	10.7	6.9	4.2	476	砂岩
	537	磨石敲石	8A	646	IV	8.0	6.2	3.0	218	砂岩
	538	磨石敲石	5A	886	IV	8.0	4.3	4.3	198	砂岩
	539	磨石敲石	10B	12	IV	7.5	5.5	4.1	245	砂岩
	540	磨石敲石	5A	881	IV	7.4	8.2	4.0	276	砂岩
	541	磨石敲石	6B	761	IV	5.4	6.0	2.3	99	砂岩
55	542	磨石敲石	4B	926	IV	8.9	11.0	6.9	699	砂岩
	543	磨石敲石	5B	812	IV	5.7	6.6	2.8	151.1	砂岩
	544	磨石敲石	10A	77	IV	13.2	4.6	1.9	151.1	砂岩
	545	台石石皿	10B	71	IV	22.0	15.1	5.0	1965	砂岩
	546	台石石皿	4A	982	IV	18.1	18.1	5.1	2380	砂岩
	547	台石石皿	9B	285	IV	17.7	17.7	5.6	2210	砂岩
56	548	台石石皿	4B	938	IV	15.8	13.3	7.0	2140	砂岩
	549	台石石皿	9B	176	IV	19.0	21.6	7.1	4050	砂岩
	550	台石石皿	7B	632	IV	7.5	10.4	2.2	225	砂岩
	551	台石石皿	8A	648	IV	7.2	6.8	3.0	201	砂岩
	552	台石石皿	8B	737	IV	4.7	6.5	3.8	100	砂岩
	553	台石石皿	9B	488	IV	20.2	20.7	5.6	3930	砂岩
57	554	台石石皿	8A	668	IV	35.6	28.6	9.8	11890	砂岩
	555	砥石	6B	757	IV	10.5	7.7	5.6	489	砂岩
	556	砥石	9B	292	IV	11.6	10.5	5.0	673	砂岩
	557	砥石	4B	929	IV	20.7	17.0	4.8	1910	砂岩
	558	I字型磨製異形石器	8B	707	IV	8.5	4.1	0.8	29.5	片岩
	60	右側	9A	343	IV	10.0	5.6	5.3	295	砂岩

# **写真図版**





写真図版1 発掘調査状況(上段9A区・下段4A,4B区)



写真図版2 遺物出土状況(上段8B, 9A区・下段8B区)



(左10A区・右10B区)



(左5A区・右8B区)



(左9A区・右9B区)

### 写真図版3 土器出土状況



(左5A区・右9A区)

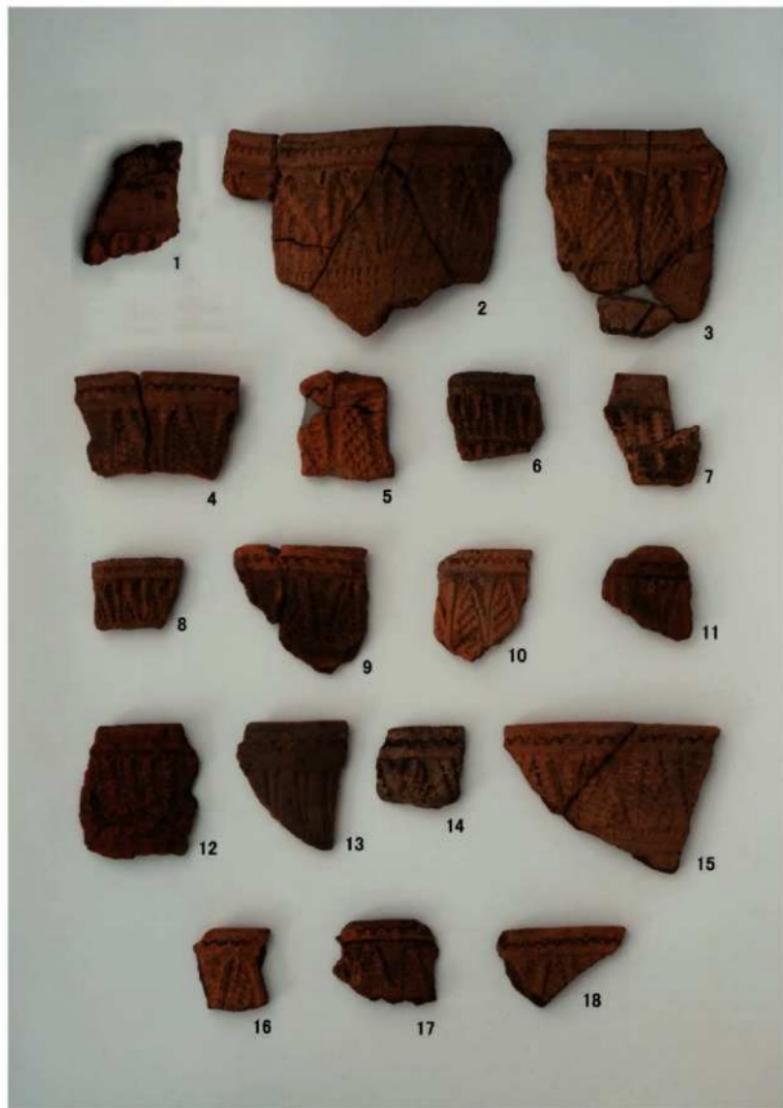


(左6B区・右10A区)



(8B区J字型磨製異形石器出土状況)

#### 写真図版4 石器出土状況



写真図版5 出土土器



19

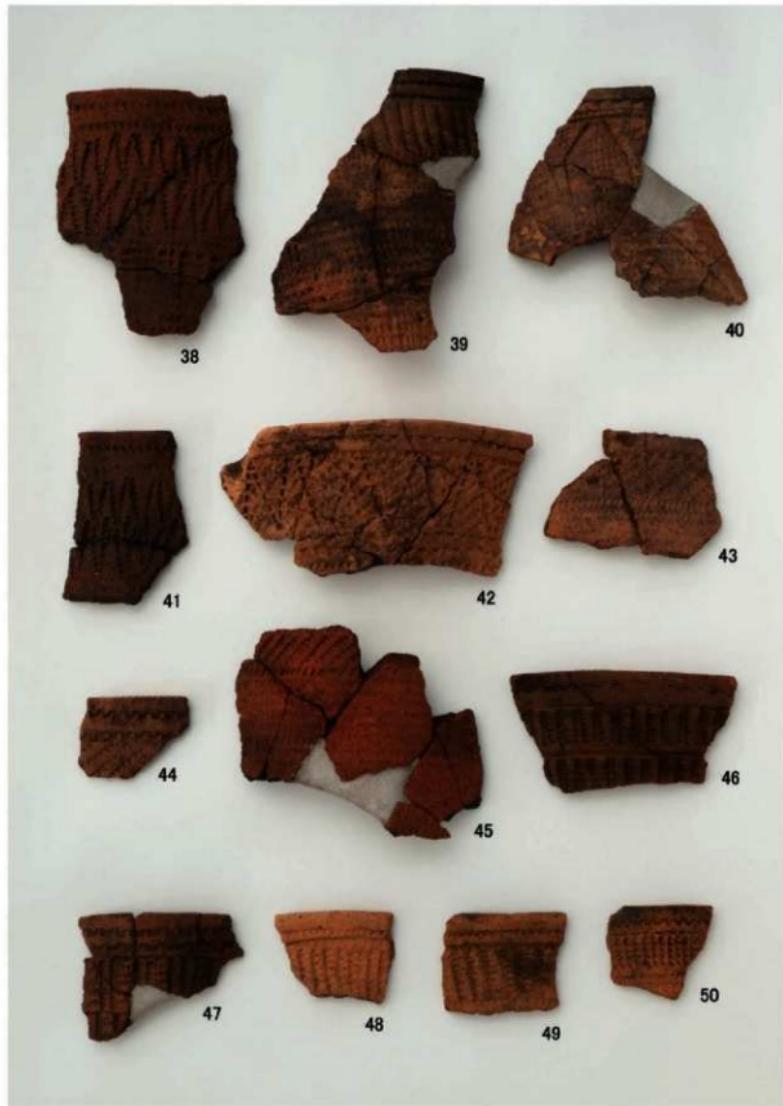


21

写真図版6 出土土器



写真図版7 出土土器



写真図版8 出土土器



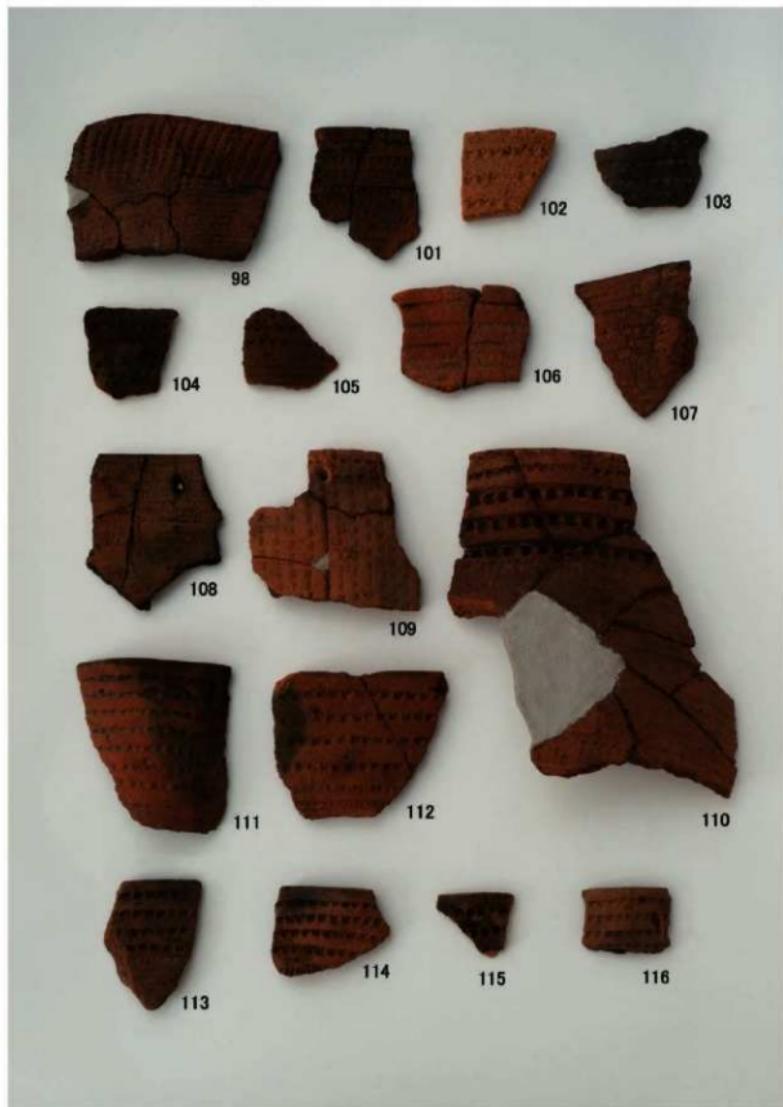
写真図版9 出土土器



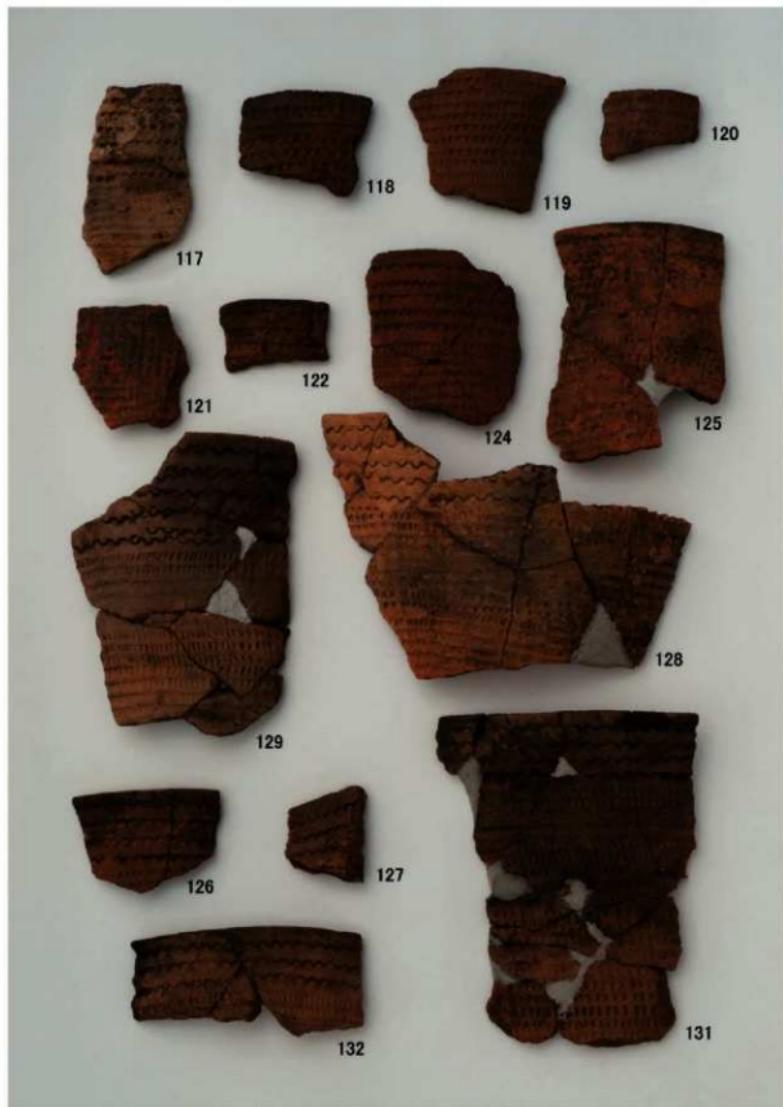
写真図版10 出土土器



写真図版11 出土土器



写真図版12 出土土器



写真図版13 出土土器

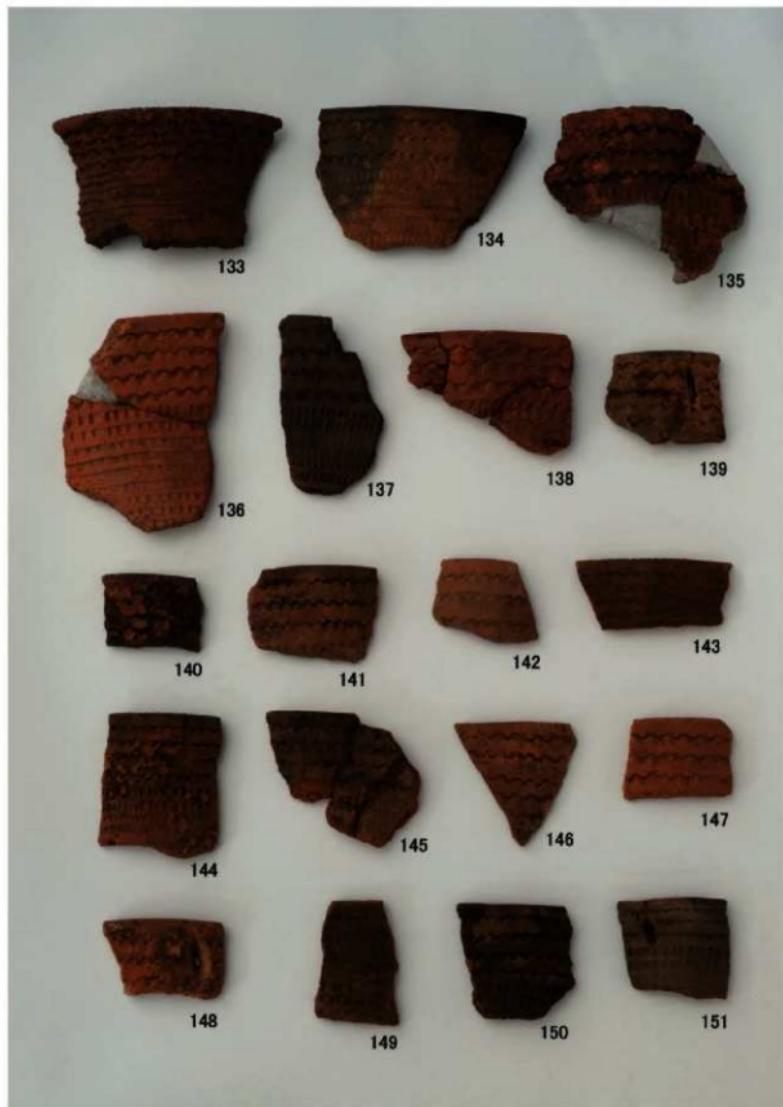


123



130

写真図版14 出土土器



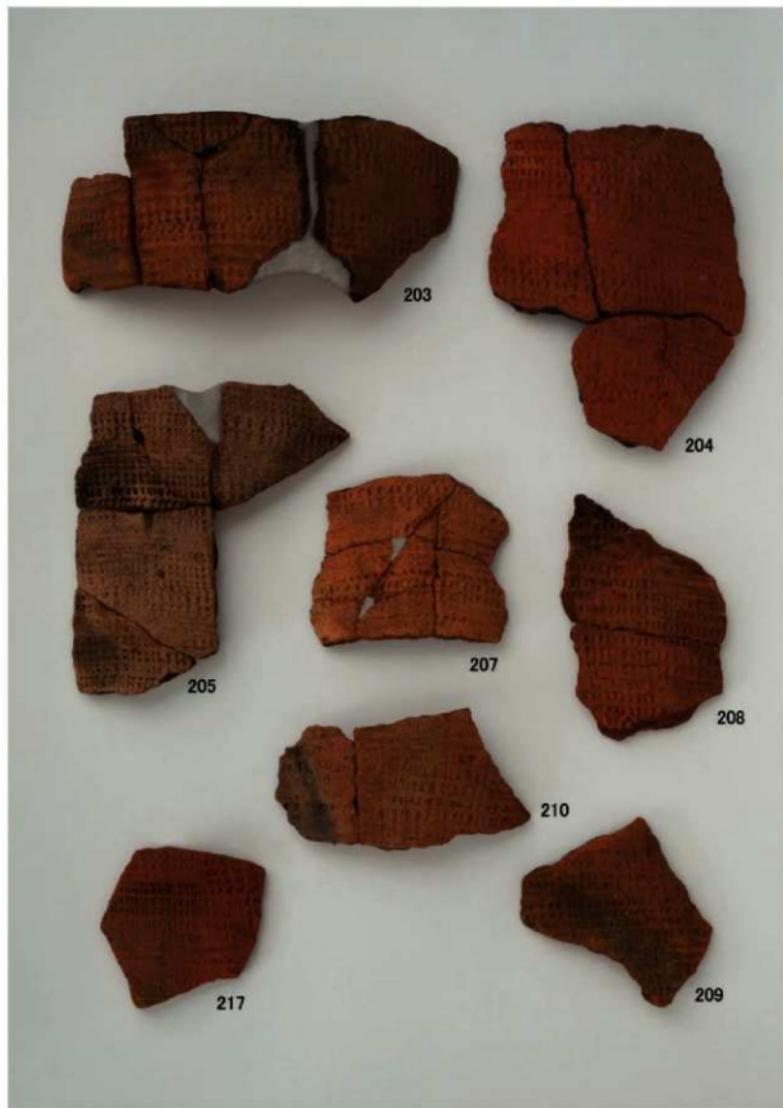
写真図版15 出土土器



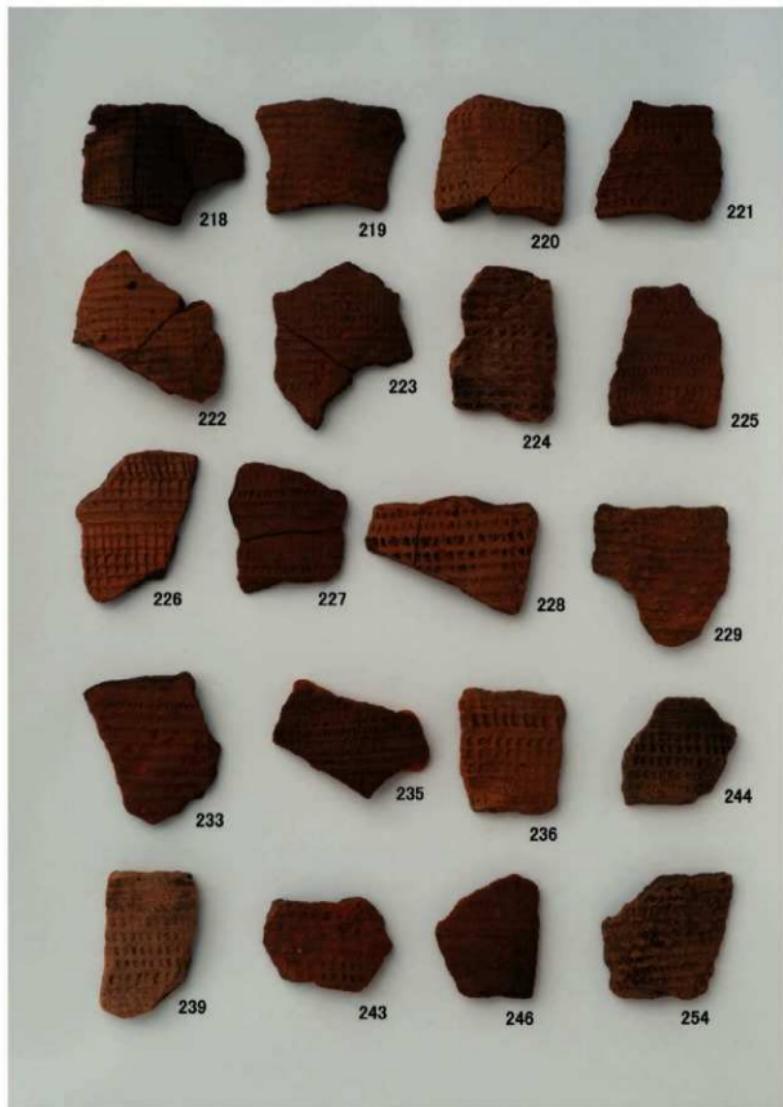
写真図版16 出土土器



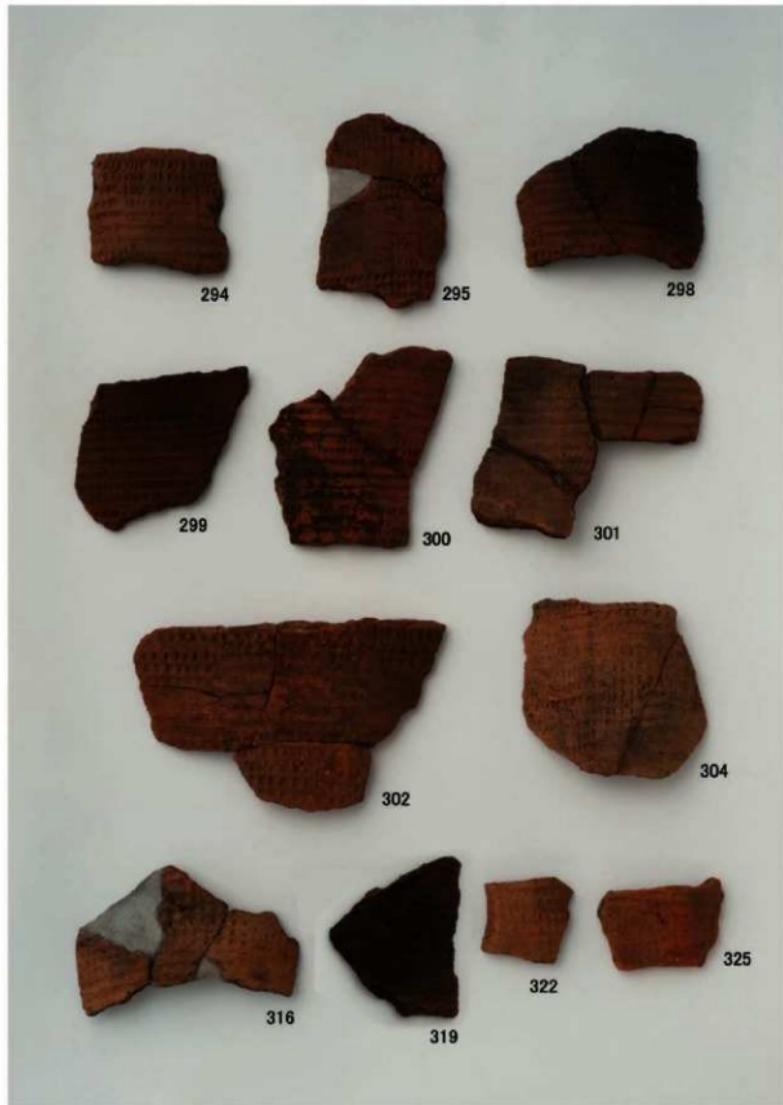
写真図版17 出土土器



写真図版18 出土土器



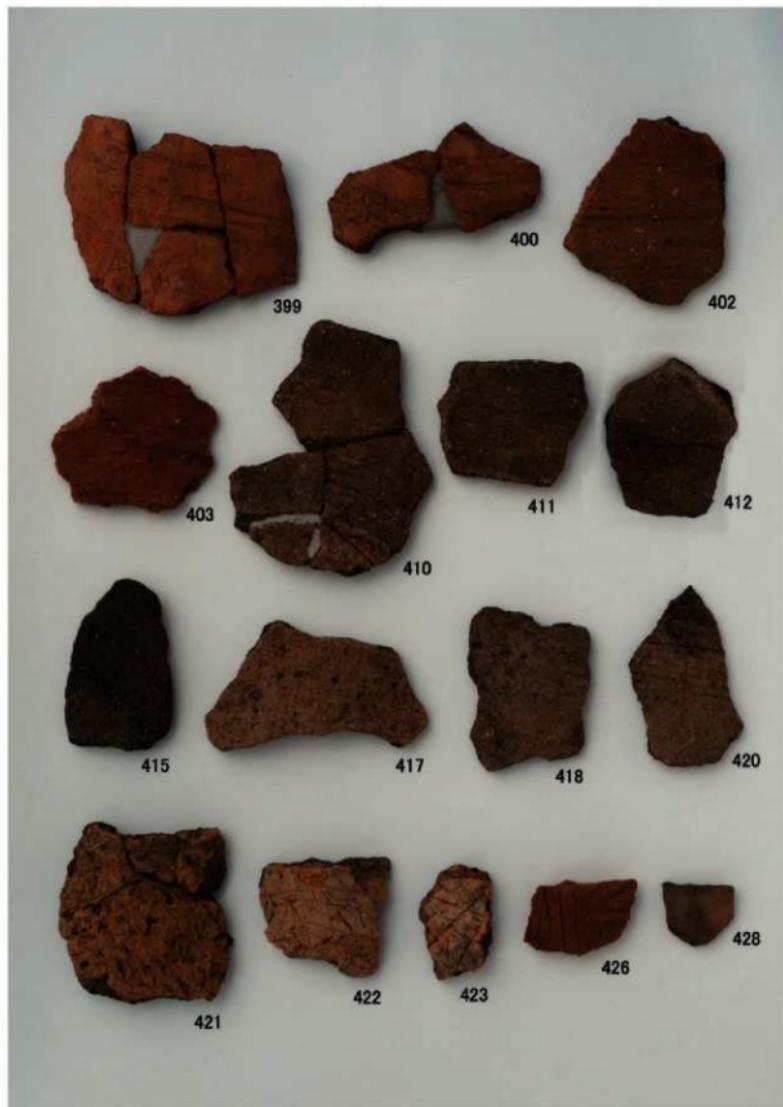
写真図版19 出土土器



写真図版20 出土土器



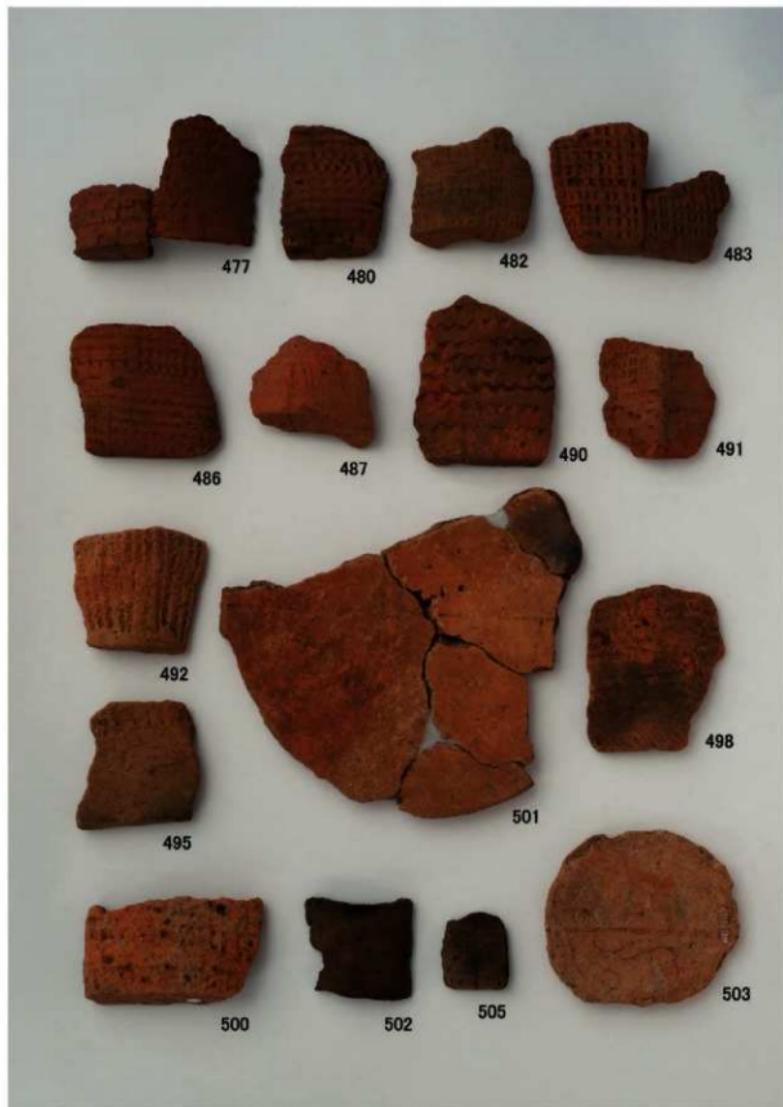
写真図版21 出土土器



写真図版22 出土土器



写真図版23 出土土器



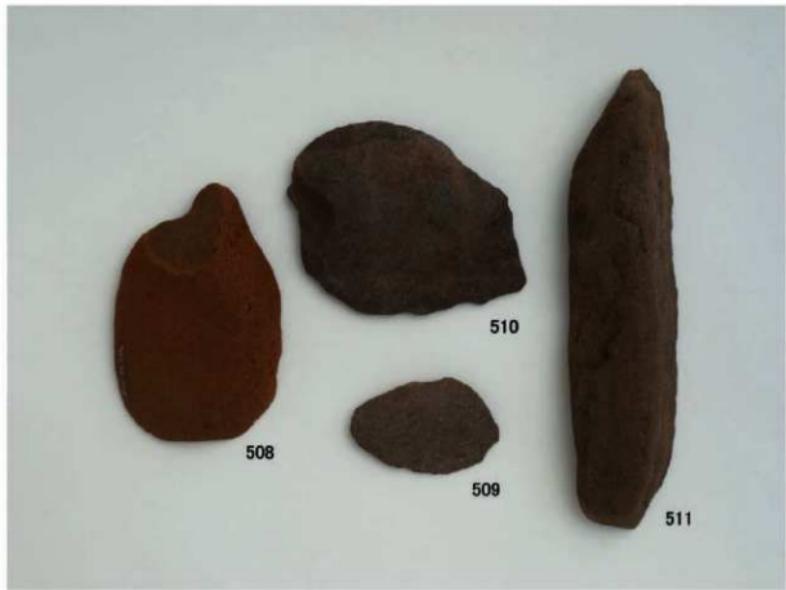
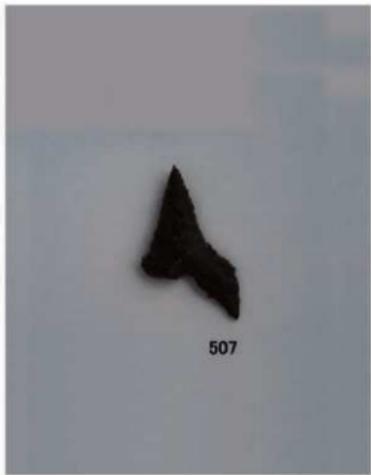
写真図版24 出土土器



写真図版25 出土土器



写真図版26 出土土器



写真図版27 出土石器



写真図版28 出土石器



写真図版29 出土石器

写真図版30 出土石器



写真図版31 出土石器

559



## 第IV章 二石遺跡 発掘調査の概要

### 第1節 調査の概要

二石遺跡の発掘調査対象地に 20 m ごとに杭を設置し、調査を進めていった。調査対象地の道路は調査期間中も耕作道として利用されている農道であり、道沿いに隣接する畠地の管理を耕作者が常に行う必要があったため、複数の耕作者と協議調整を行ないながら、調査着手順を決めて作業を行った。よって、調査は必ずしも調査区界順どおりには、行うことが出来なかつた。

調査は、表土から第III層までを重機で取り除いた後、人力で掘り下げながら、遺物及び遺構の検出を行なつていった。遺物の出土分布状況は、調査区ごとにバラつきが見られ、0 区・9 区及び 13 区～15 区は遺物の出土分布量が密であり、遺物の平板実測・レベル測定作業にかなりの時間を割いた。調査地の土層断面は実測作業を行い、遺物出土状況・土層断面・発掘作業状況などは随時写真撮影で記録を行つた。

また、検出した 3 基の遺構（集石）については、写真撮影・実測作業を行つた。番号を付けて取上げた遺物は 860 点であった。調査面積は約 1,000 m<sup>2</sup>である。

### 第2節 層位

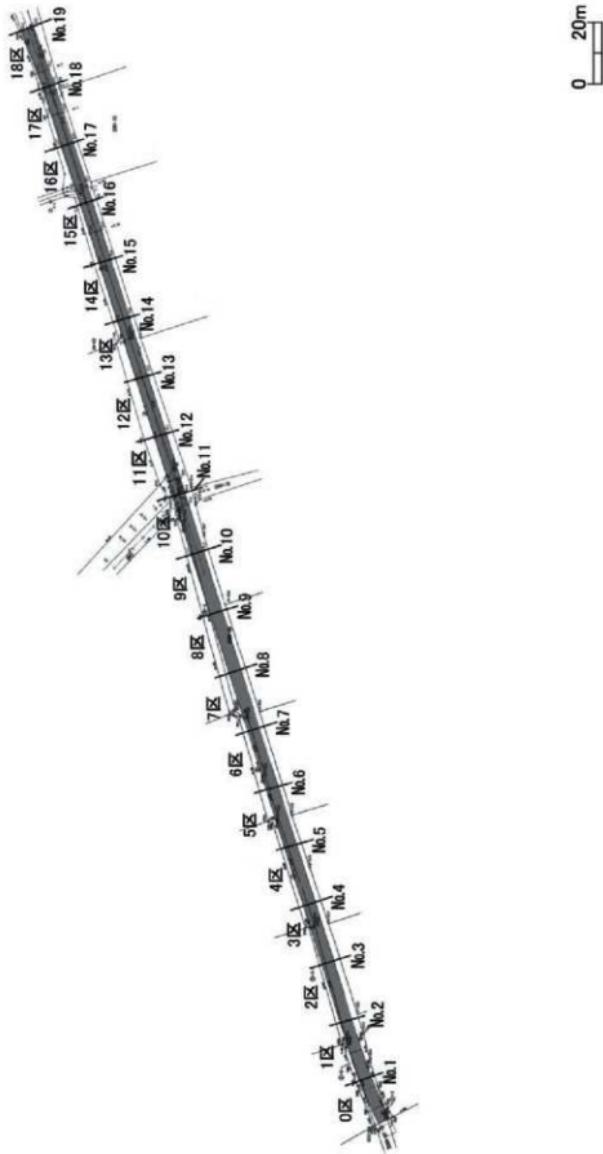
土層は場所によって一部の層が欠落している部分もあるが、基本的には下記のとおりである。土層の堆積状況は下位にいくにつれ良好であった。前述した、長迫遺跡の層位と同様である。

I層 表土	ハエ石層を含む。場所によって、著しく堅く締まっている。
II層 黒色土層(旧表土)	下位にカクラン層が混じる場合あり。
III層 黄橙色火山灰土層	アカホヤ火山灰層、鬼界カルデラ噴出堆積物。場所によっては、「III a」・・・・2次堆積物 「III b」・・・・1次堆積物に分層可能である。
IV層 ベージュ色粘質土層	遺物包含層（縄文時代早期）
V層 暗褐色土層	場所によって粘質が強くなる。IV層との分層部分に漸移がみられる。
VI層 黄褐色ローム層	粘質が強い。

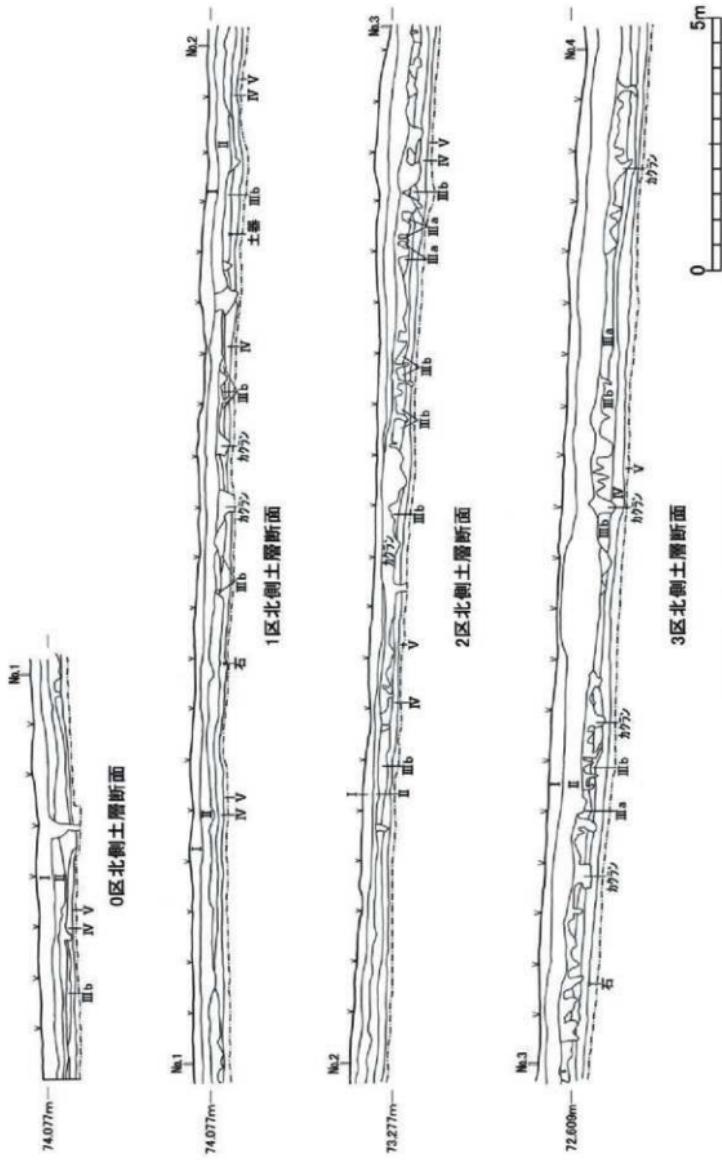


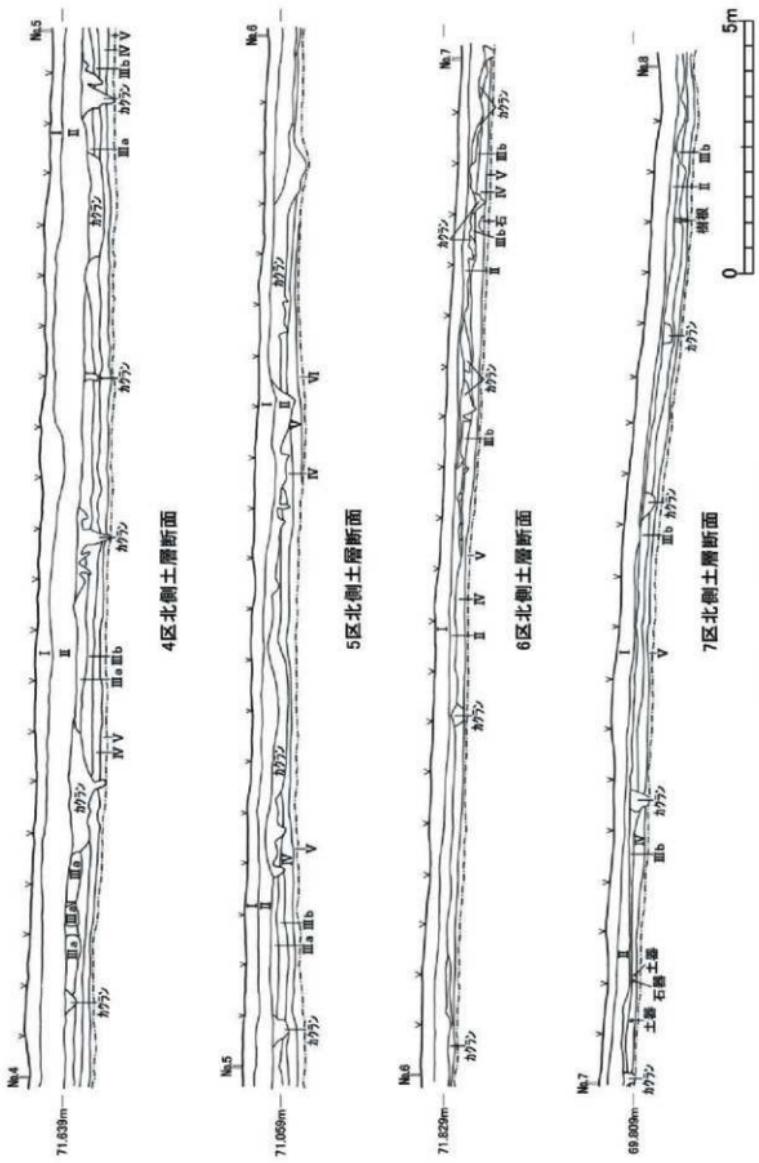
第1図 発掘調査対象地

第2図 発掘調査対象地グリット配置図



第3图 土 剖面图(1)



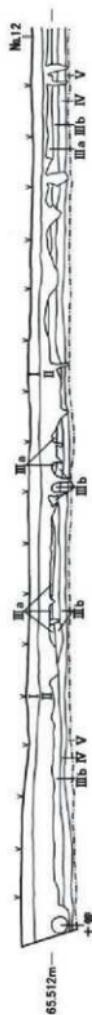


第4図 土層断面図(2)

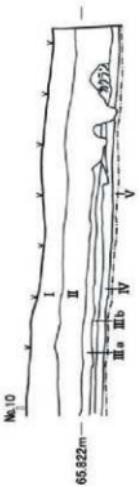
5m

第5图 土层断面图(3)

11区北侧土层断面



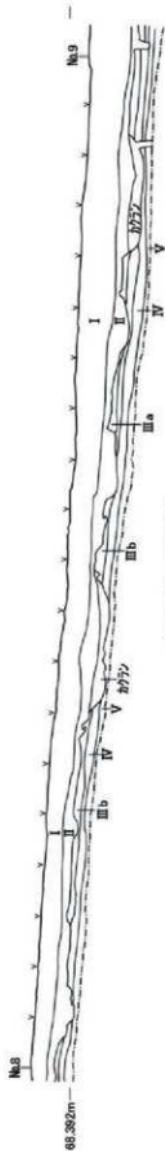
10区北侧土层断面

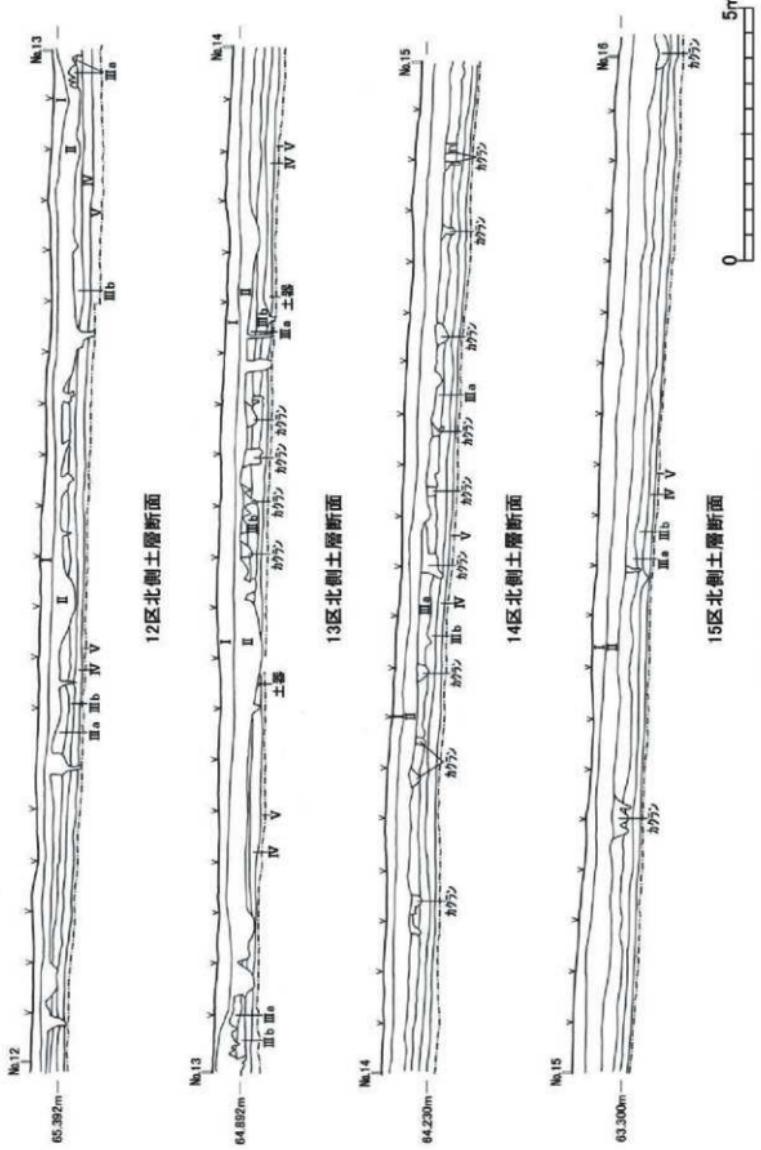


9区北侧土层断面



8区北侧土层断面



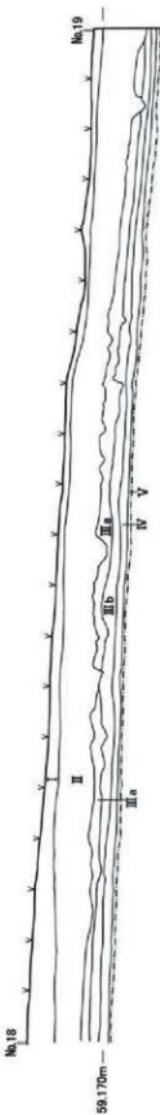


第6図 土層断面図(4)

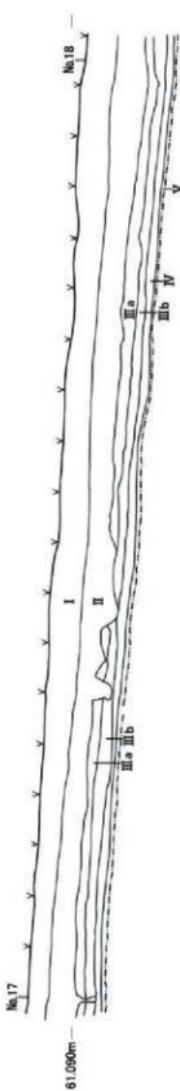
5m

第7圖 土層斷面圖(5)

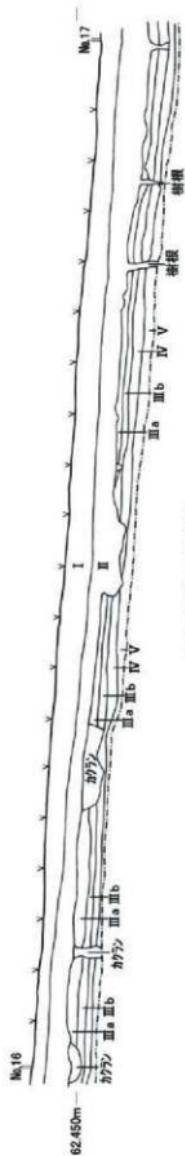
18區北側土層斷面



17區北側土層斷面



16區北側土層斷面



### 第3節 遺構

遺構は集石が3基検出され、検出地は1区・12区・13区であった。検出面はいずれも第IV層である。

#### 1号集石遺構（第9図）

検出状況 1区、第IV層面で検出。

形状と規模 100cm×100cmの範囲内に、約30cmの大型の礫が2点配置され、その北側に50cm以下の中粒数点十点が一部まとまった状態で検出されたが、礫がぎっしり密集している感ではなく、全体的にはばらついた状態である。大型の礫2点は炎熱を受け赤化していた。

#### 2号集石遺構（第9図）

検出状況 13区、第IV層面で検出。

形状と規模 80cm×70cmの範囲内に、礫約50点がぎっしり密集した形で構成されている。礫のほとんどが炎熱を受け赤化している。また、炭化物が付着している礫が2点あり、サンプルを採取し年代測定を行った。構成される礫の大きさは拳大か、それよりやや大きめのものであった。

#### 3号集石遺構（第10図）

検出状況 12区北側壁面そば、第IV層面で検出。

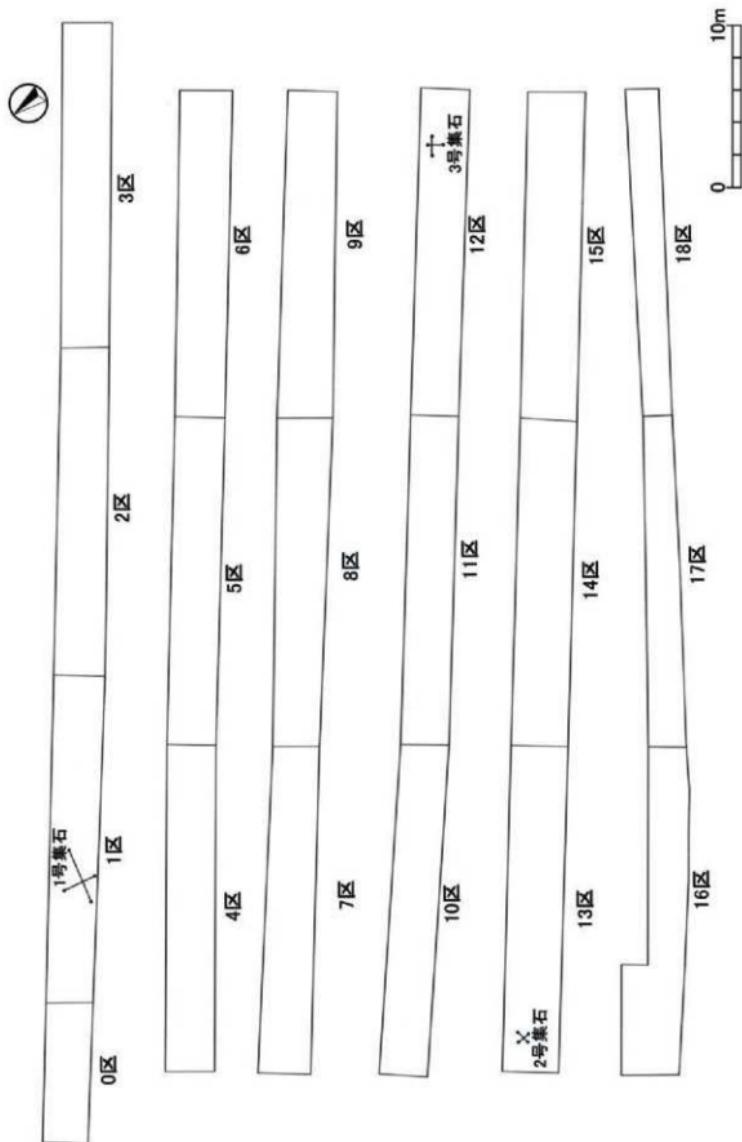
形状と規模 80cm×60cmの範囲内に、礫約40点から構成されており、礫はぎっしり密集した形である。礫は大きいもので約20cm、小さいものは約5cmであり、全体的に炎熱を受け赤化しており、熱破碎を受けているものも一部見られる。北壁面側での検出であったため、全体像を捉えることができず、集石は北壁面側に向けて若干広がると思われる。なお、集石から約20cm離れたところで、稜をもつ吉田式土器が出土している。

### 第4節 遺物

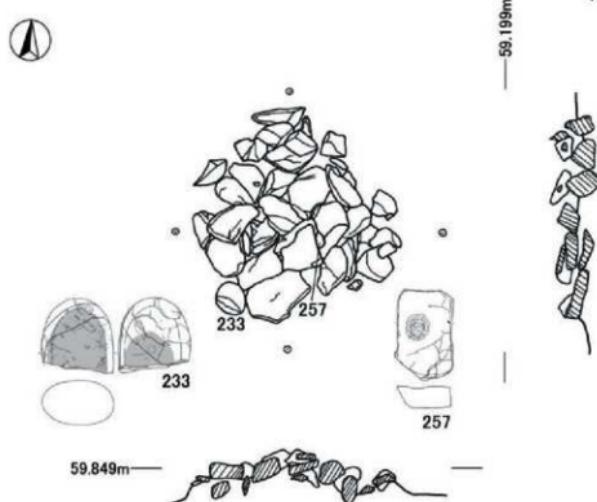
遺物は土器片・石器類等が出土した。出土した層は全てアカホヤ火山灰層下位の、第IV層である。時期区分では1を除いて、縄文時代早期に該当するものである。

#### (1) 土器

土器片は全て第IV層からの出土であり、番号を付けて取り上げた土器片は507点であった。これらを口縁部の諸特徴から大きく第1類～第6類に分類した。分類は文様のあり方及び器形を総合的に判断して行った。なお、胴部片・底部片は特徴ごとに一括して掲載している。

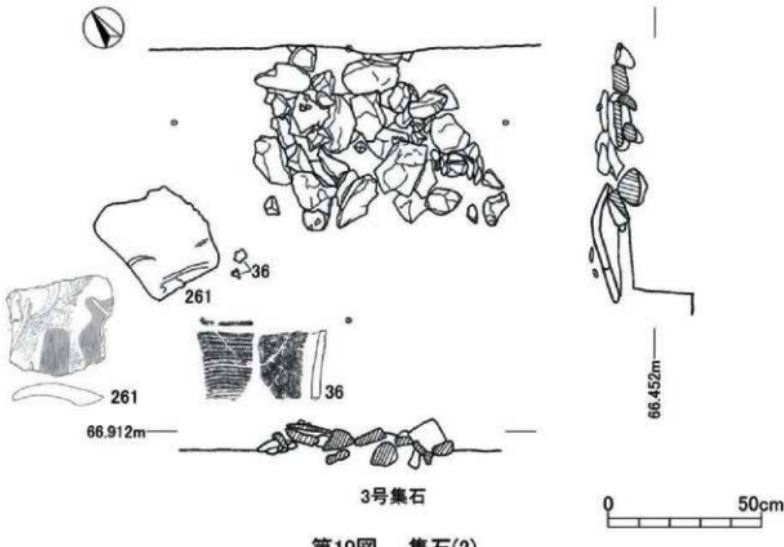


第8図 遺構配置図



第9図 集石(1)

0 50cm



第10図 集石(2)

#### ①第1類土器（第18図1）

12区から出土したものである。器面（胴部）に1条の隆帯を施し、器面全体は丁寧になでられている。本市の奥ノ仁田遺跡・鬼ヶ野遺跡で出土しているものと同じタイプであり、縄文時代草創期のものである。このタイプのものは1点だけの出土であった。

#### ②第2類土器（第18図2～5）

口縁部が緩やかに外傾する円筒形が主であるが、口縁部に稜をもつ器形もあり、中には角筒の器形に近いものもある。口唇部には連続した浅いキザミを施すものもあり、口縁部下に貝殻腹縁部により横位の刺突文を1段～2段めぐらす。その下位に縦位のクサビ形の貼付文をめぐらす。また、貝殻腹縁による押圧文を意識して、クサビ形貼付文の名残として表現されたと考えられる縦位の貝殻刺突文を施しているものなどである。この類の最大の特徴はこのクサビ形の貼付文であり、細分化するとクサビ形の貼付文を有するものと、クサビ形の貼付文を意識して施文しているもの一群である。胴部には貝殻腹縁による押し引き文が施されるが、押し引きと貝殻条痕文を交互に施すなどのアクセントを付けているものもある。内面は丁寧なナデ整形がみられる。

#### ③第3類土器（第18図6～第19図26）

口縁部が緩やかに外傾する円筒形または口縁部に稜をもつ器形で、中には角筒の器形に近いものがあり、口縁部の角部が4つのものと2つのものがある。口縁部下位にクサビ形が崩れたと考えられる縦位の貝殻刺突文がV字状に非常に密に、または間延びして施文が行われているものである。なかには、この貝殻刺突文を斜位に施すものも見られる。これらの文様は1段のものもあるが、多くは2段～3段、または4段施されているものもある。胴部の文様帶は貝殻腹縁部を利用した押し引き文が施されている。この押し引き文は横位に施されているが、押し引き文自体に強弱をつけたり、あるいは貝殻条痕文と組み合わせた施文を行っているものがある。内面には丁寧なナデ整形がみられる。

#### ④第4類土器（第19図27～第20図33）

口縁部が緩やかに外傾する円筒形や、稜を有し角筒形に近いものもあり、口縁部の角部が4つのものと2つのものがある。口縁部下位に貝殻腹縁部による横位の刺突文を1～3段めぐらし、その下位に大きな特徴である半截竹管状工具による「C」あるいは逆「C」字形の刺突文を2～5段程めぐらす。胴部は貝殻腹縁による横位の押し引き文や貝殻条痕文を施すものである。「C」状の施文は基本的にクサビ形貼付文の流れを系譲するものであると考えられる。また一部「C」状が崩れ、「爪形」状に施文が施されているものもある。大きな特徴として、「C」状の施文は、「C」状のみのものと、「C」状+斜位の貝殻腹縁刺突文が施されているものがある。内面には丁寧なナデ整形が見られる。

## ⑤第5類土器（第20図34～第22図65）

口縁部が緩やかに外傾する円筒土器が主であるが、口縁部に稜を持つ角筒形に近い器形の土器も存在し、口縁部の角部が4つのものと2つのものがある。口唇部には連続したキザミを施す。キザミは密なものとやや幅広のものも見られる。口縁部下位に貝殻腹縁部による横位の刺突文を1～4段めぐらすが、4段以上の複数段施すものもある。またこの横位の刺突文が斜位に施されているものもある。この斜位の施文は「横位の施文のバリエーションのひとつ」と思われる。貝殻腹縁部による刺突文の形状は連点状・波形状・三角形状あるいは刺突文が浅く明瞭でないもの等がある。胴部は貝殻腹縁部による押し引き文を横位に施すが、押し引き文と貝殻条痕文を交互に施したり、条痕文のみのものなどがある。内面は丁寧なナデ整形がみられ、精製されたものが多いことが特徴である。

## ⑥第6類土器（第22図66～第22図74）

口縁部が緩やかに外傾あるいは直行し、バケツ状を呈するものである。口唇部はやや内湾氣味のものもある。底部は平底である。貝殻腹縁部による横位または縦位の刺突文を施したり、先端の鋭利な工具による沈線もみられる。内面はナデ整形がみられる。器壁が厚いのが、特徴的である。

## ⑦胴部片（第22図75～第28図180）

75から152は2類土器から5類土器の範疇に入ると思われる胴部編を一括した。2類から5類の胴部は、胴部そのものでは、判別が困難であるため、胴部の施文パターンごとに掲載している。第1のパターンは胴部に貝殻腹縁部による横位の押し引き文を施し、貝殻腹縁部による密な連続刺突文の段間に無文部を置くタイプである。第2のパターンは胴部の施文が横位の貝殻腹縁部による押し引き文を施すが、一部貝殻腹縁部による連続刺突文をもつものである。第3のパターンは貝殻腹縁による横位の押し引き文がみられず、横位の貝殻条痕文を施しているものである。153から161はや、第6類土器の胴部片である。器面に貝殻腹縁部による横位または縦位の刺突文を施したり、先端の鋭利な工具による沈線もみられる。縄文時代早期の下剥峯式土器の範疇に入るものである162から180は外面に斜位や横位の貝殻刺突文・貝殻条痕文、条線・沈線文を施すものである。縄文時代早期の塞ノ神式土器の範疇に入るものである。

## ⑧底部片（第29図～第31図）

2類から5類土器相当（吉田式土器）の底部片を一括した。底部立ち上がりの施文により大きく3つのパターンがみられる。181～195は底部立ち上がりに鋭利なへラ状の施文具で縦位のキザミを施しているものである。このキザミは数センチに及ぶ長いものや、2重に施しているものもある。196～201は縦位のキザミが貝殻刺突文・押し引き文によって施されているものである。202～206は、この底部立ち上がり部分のキザミが消滅し、横位の貝殻腹縁による条痕文や無文のものなどである。206～209は丸底を呈するものである。なお、底部片のなかで下剥峯式・塞ノ神式土器の底部片を特定することはできなかった。

## (2) 石 器

本遺跡出土石器には、石鏃・石鏃破損品・剥片石器・石斧・磨石敲石類・台石石皿類・砥石・石製装飾品が出土した。いずれも縄文時代早期該当層である第IV層から出土したものである。番号を付けて取り上げた石器類は353点であった。

### ①石鏃（第32図210～217）

石鏃は、8点出土した。形状は正三角形状・二等辺三角形状・やや細身で縦長を呈し、石鏃基部に抉りをもち、この抉りが深いものや、浅いものである。全面磨製のものが1点で、他は打製である。石材は粘板岩・チャート・頁岩である。

### ②剥片石器（第32図218）

剥片石器は1点出土している。最大長5cm・最大幅3cm・最大厚1cmと小型のものである。石材は頁岩である。

### ③石斧（第32図219～222）

石斧は4点出土している。刃部を磨き上げて製作しているものが1点、他3点は打製である。石斧の石材は砂質ホルンフェルス・泥質ホルンフェルス・ホルンフェルス化した千枚岩などである。刃部の形状より、磨製の220は木材の伐採加工用として、219・221・222は土掘具としての用途が考えられる。

### ④磨石敲石類（第33図～第37図）

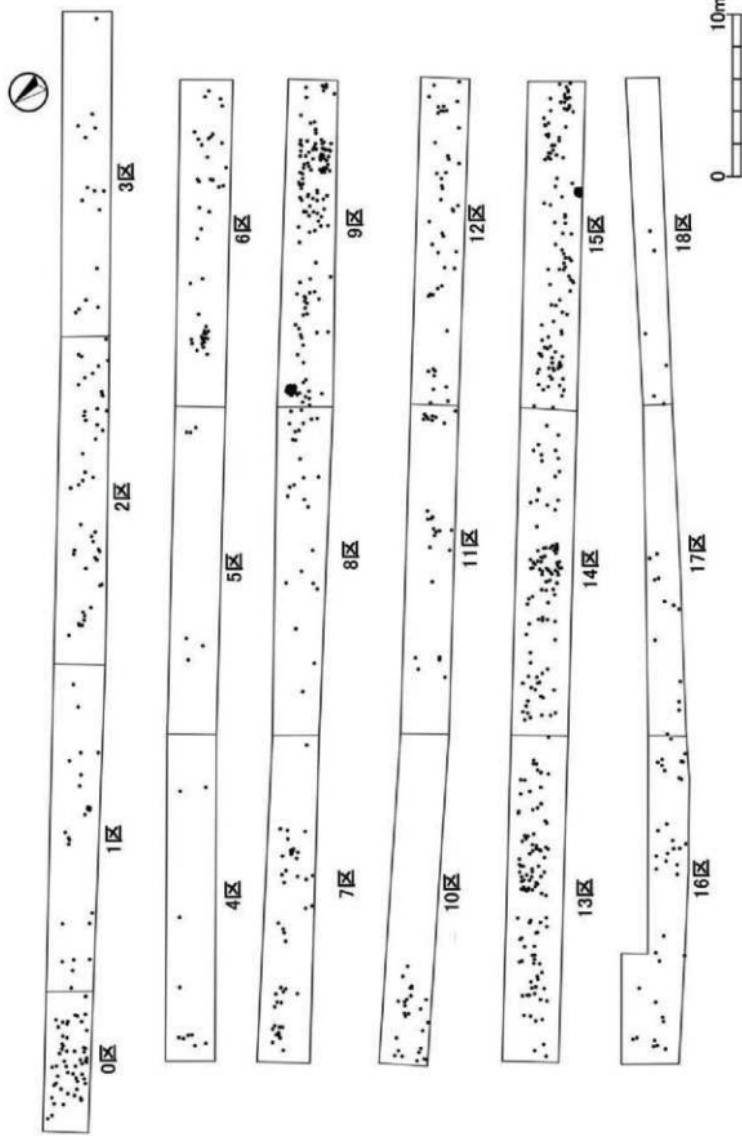
磨石・敲石類は本遺跡出土石器の中で大部分を占める。全てが砂岩を石材としている。円形のもの、楕円形のものなどがあり、「磨る」・「磨る+敲くの両方に使われたもの」・「敲打痕のみ顕著なもの」・「凹石として使われたもの」などがある。256は側面中央部に抉り痕が見られ、漁具として利用された可能性もある。

### ⑤台石石皿類・砥石（第38図～第40図265）

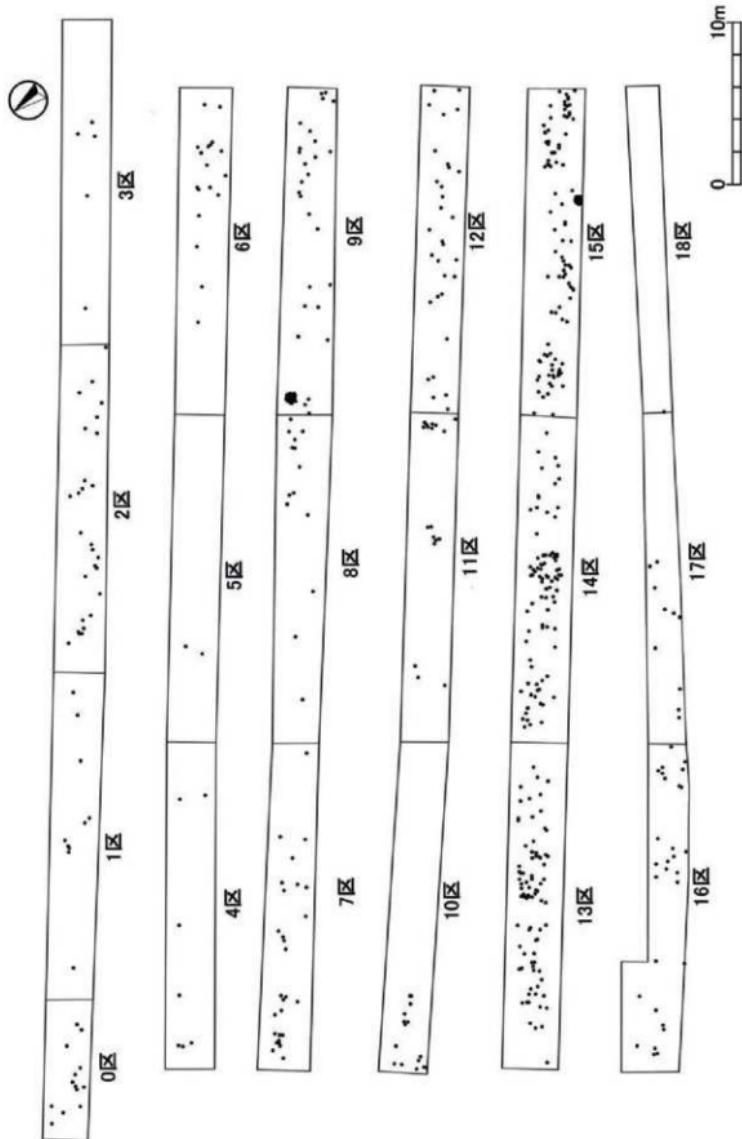
257～262は台石石皿類であり、形状により凹面が顕著なものを呈するもの、磨面が平坦なもの、凹状の凹部を持つものなどがある。磨面が平坦なものと凹部をもつものは石皿としての機能の他に台石としての使用が考えられる。261や262など最大長・最大幅が30cmを超える非常に大型のものや小型のものなどがある。石材は全て砂岩である。263～265は砥石であり、263・265は両面に使用痕が見られた。石材は砂岩である。

### ⑥石製装飾品

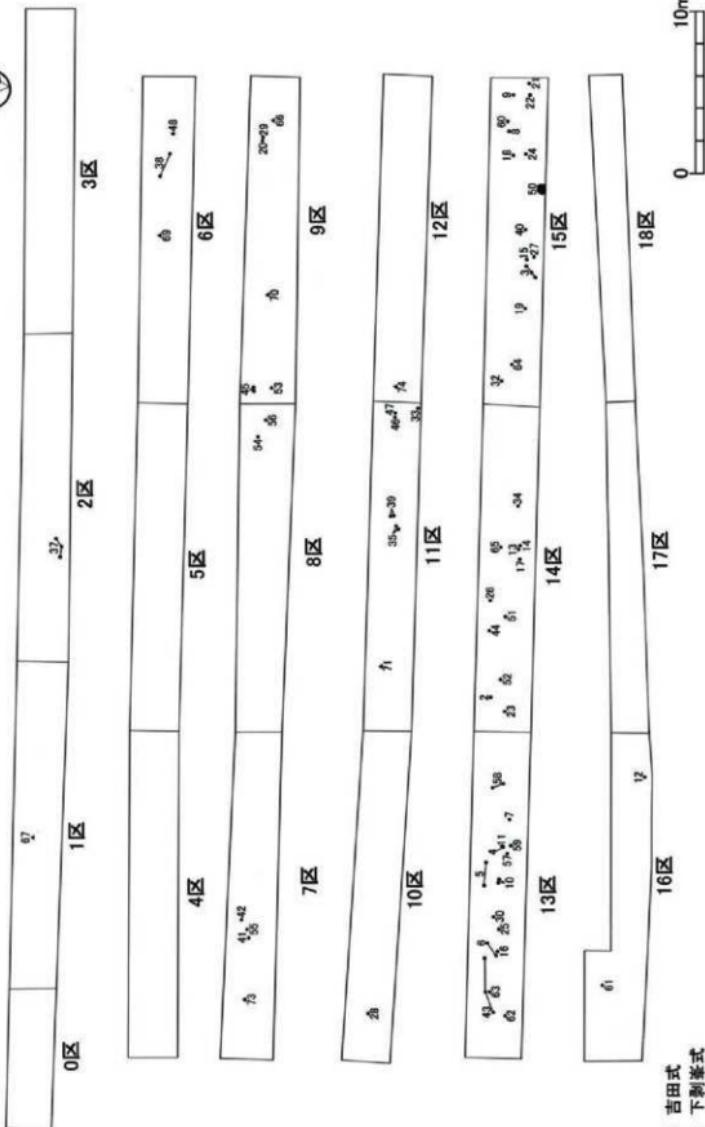
8区、第IV層からの出土であり、出土状況から吉田式土器に共伴するものである。最大長1.7cm・最大幅0.95cm・最大厚0.4cmを呈する。全面に研磨が施され、頭部に3筋の切込みが見られる。穿孔痕が1ヶ所あり、この穿孔部分から欠損している。石材は滑石と思われる。



第11図 全遺物出土状況



第12図 全土器出土状況



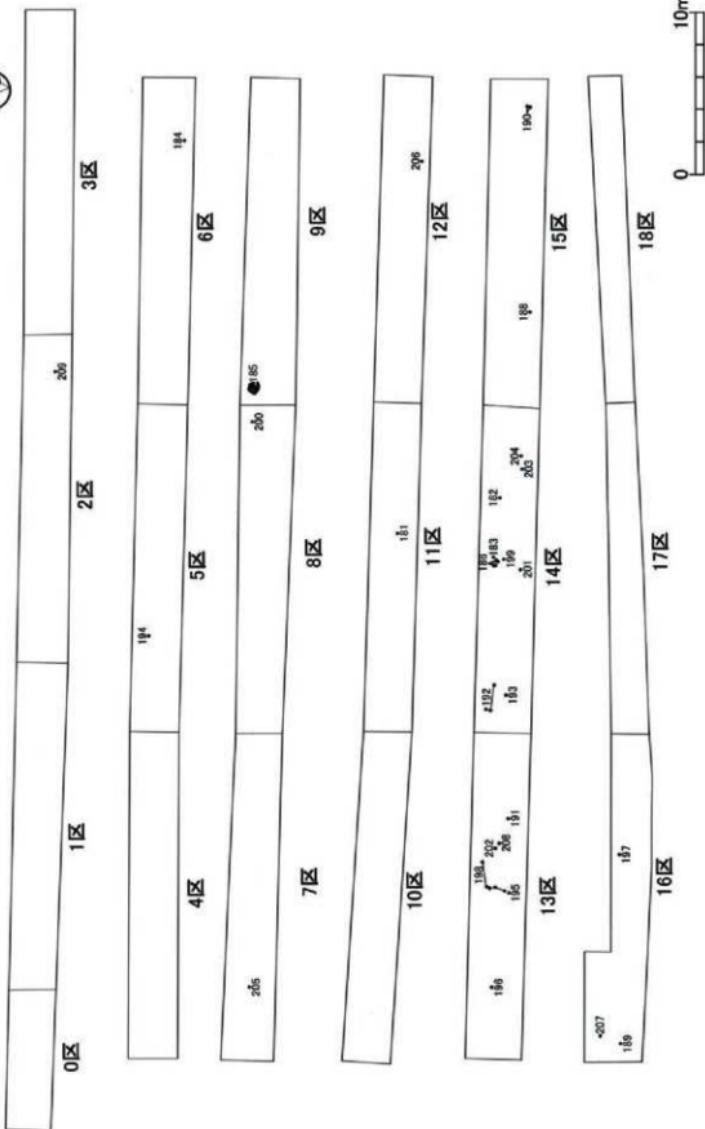
第13図 口縁部出土状況



1区	16 16 16 16 16	17 17 17 17 17	18 18 18 18 18	19 19 19 19 19	1区	14 14 14 14 14	15 15 15 15 15	16 16 16 16 16	17 17 17 17 17	1区	18 18 18 18 18	19 19 19 19 19	2区	19 19 19 19 19	2区	19 19 19 19 19	3区	19 19 19 19 19	3区	19 19 19 19 19				
4区					4区					4区			5区			5区			6区			6区		
7区	17 17 17 17 17	18 18 18 18 18	19 19 19 19 19	20 20 20 20 20	7区	15 15 15 15 15	16 16 16 16 16	17 17 17 17 17	18 18 18 18 18	7区	15 15 15 15 15	16 16 16 16 16	8区	15 15 15 15 15	16 16 16 16 16	8区	15 15 15 15 15	9区	15 15 15 15 15	9区	15 15 15 15 15			
10区	17 17 17 17 17	18 18 18 18 18	19 19 19 19 19	20 20 20 20 20	10区	15 15 15 15 15	16 16 16 16 16	17 17 17 17 17	18 18 18 18 18	10区	15 15 15 15 15	16 16 16 16 16	11区	15 15 15 15 15	16 16 16 16 16	11区	15 15 15 15 15	12区	15 15 15 15 15	12区	15 15 15 15 15			
13区	17 17 17 17 17	18 18 18 18 18	19 19 19 19 19	20 20 20 20 20	13区	15 15 15 15 15	16 16 16 16 16	17 17 17 17 17	18 18 18 18 18	13区	15 15 15 15 15	16 16 16 16 16	14区	15 15 15 15 15	16 16 16 16 16	14区	15 15 15 15 15	15区	15 15 15 15 15	15区	15 15 15 15 15			
16区	18 18 18 18 18	19 19 19 19 19	20 20 20 20 20	21 21 21 21 21	16区	16 16 16 16 16	17 17 17 17 17	18 18 18 18 18	19 19 19 19 19	16区	16 16 16 16 16	17 17 17 17 17	17区	16 16 16 16 16	17 17 17 17 17	17区	16 16 16 16 16	18区	16 16 16 16 16	18区	16 16 16 16 16			

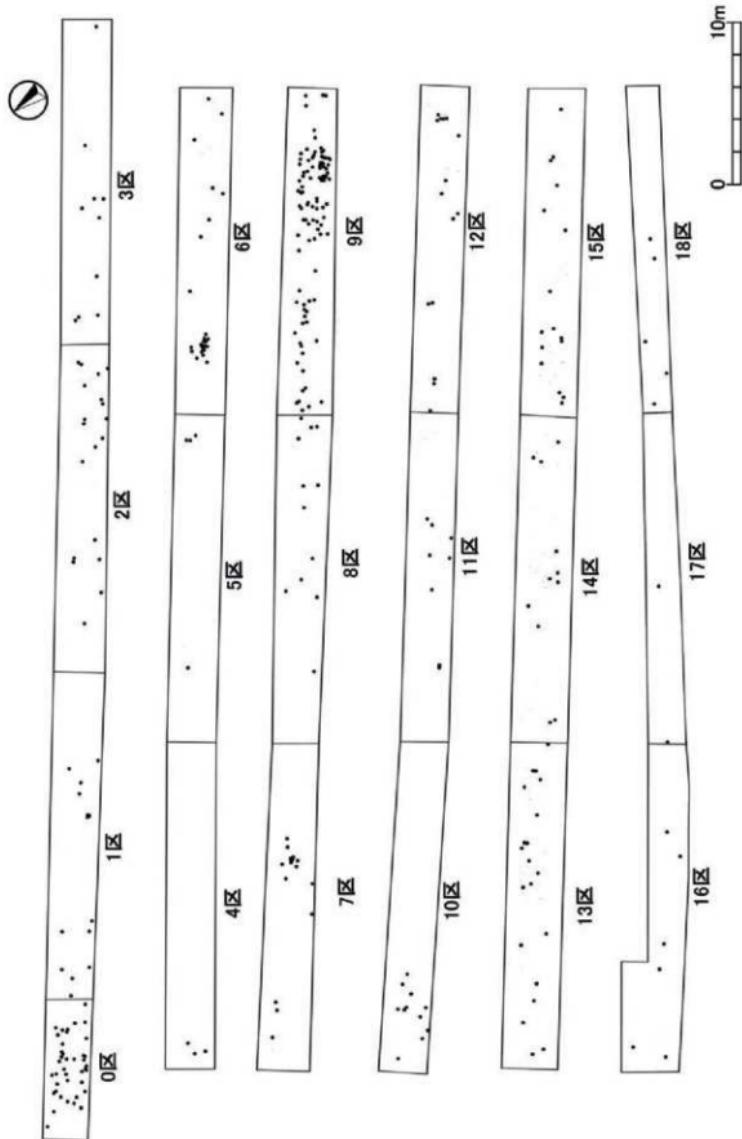
● 吉田式  
 ▲ 下剥蓋式  
 ■ 密ノ神式  
 ○ 隆帶式

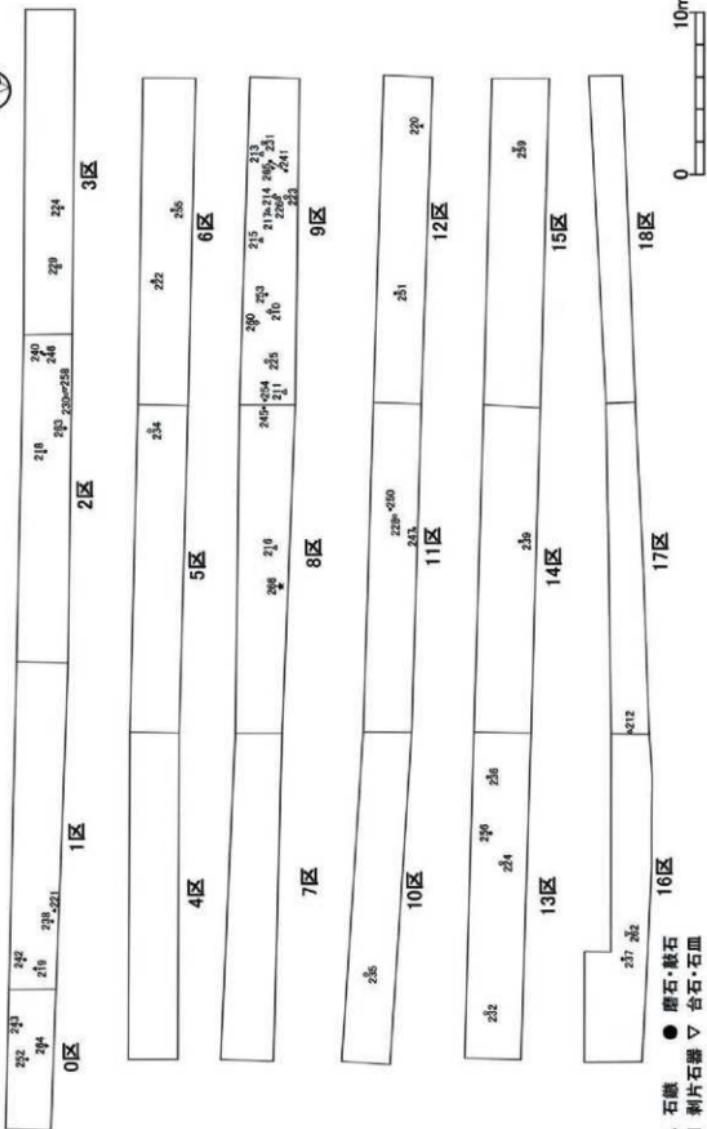
第14図 胸部出土状況



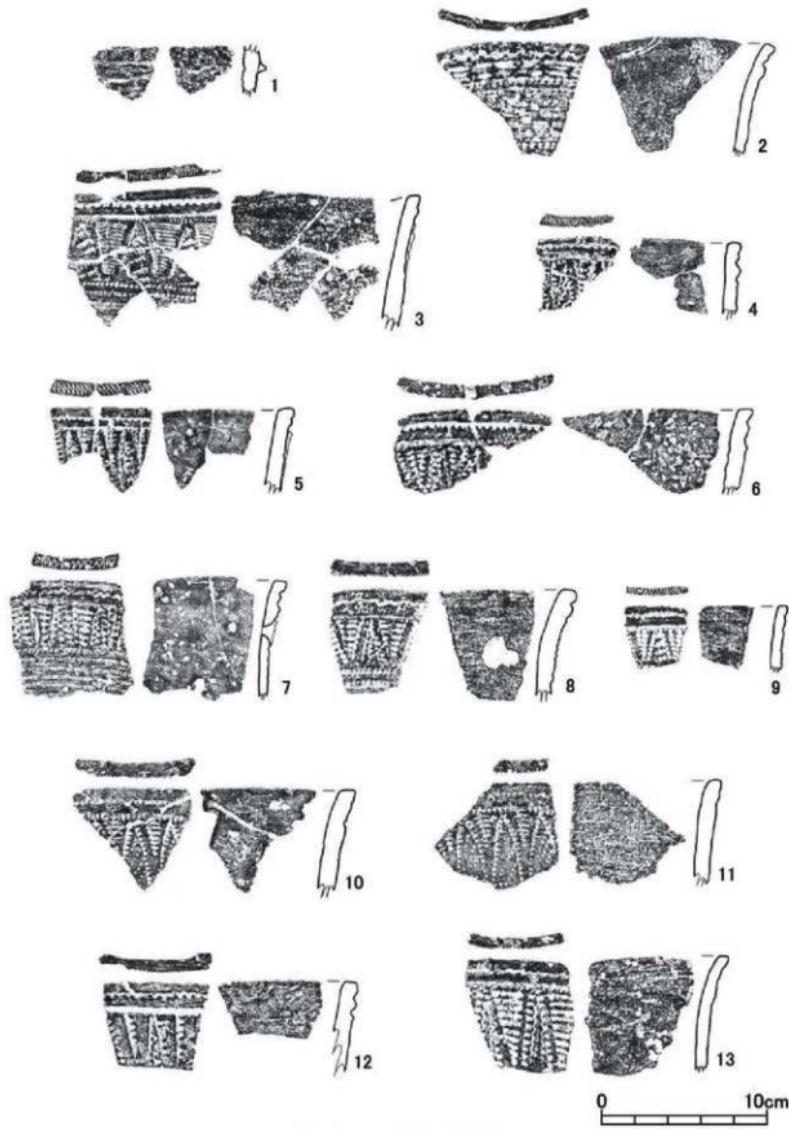
第15図 底部出土状況

第16図 全石器出土状況

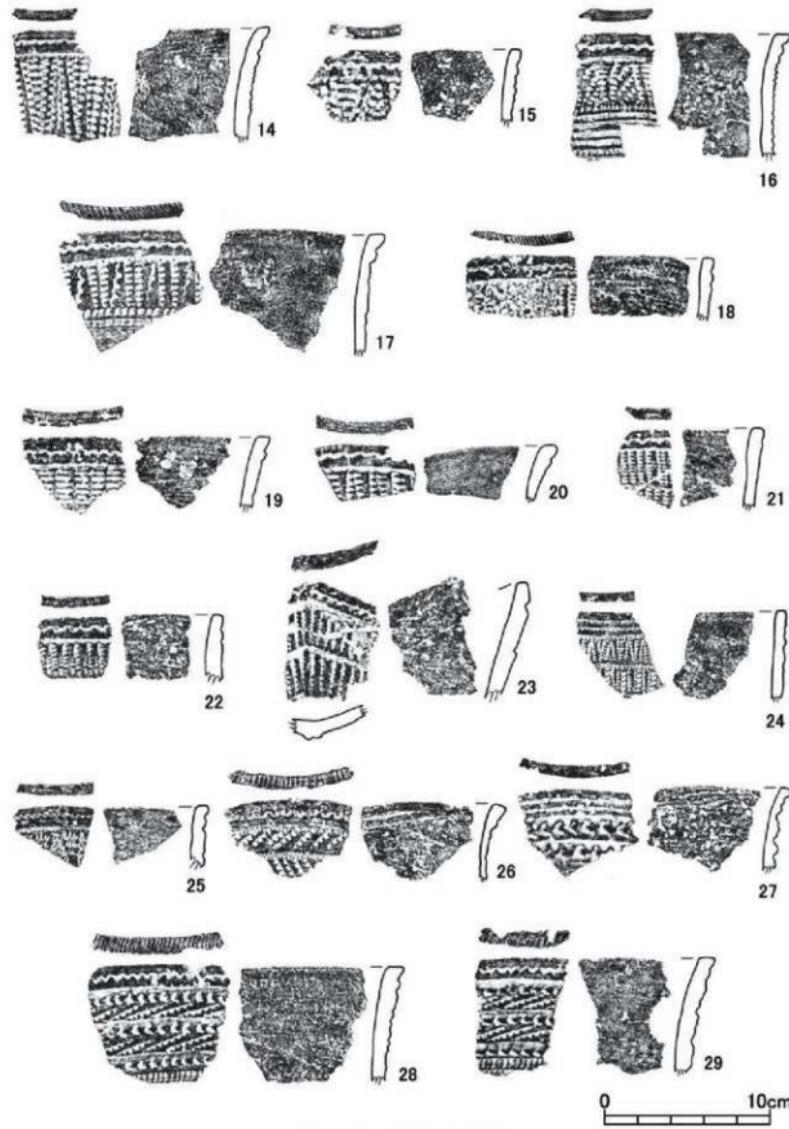




第17図 石器種別出土状況



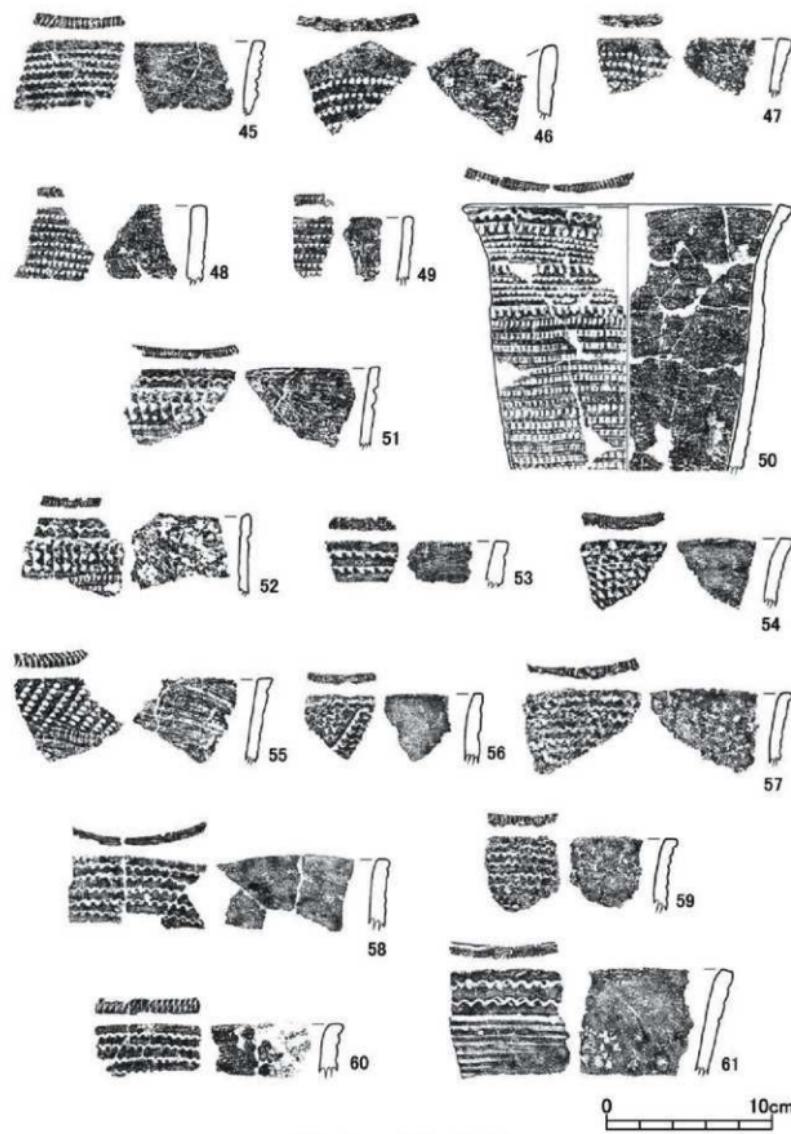
第18図 出土土器(1)



第19図 出土土器(2)



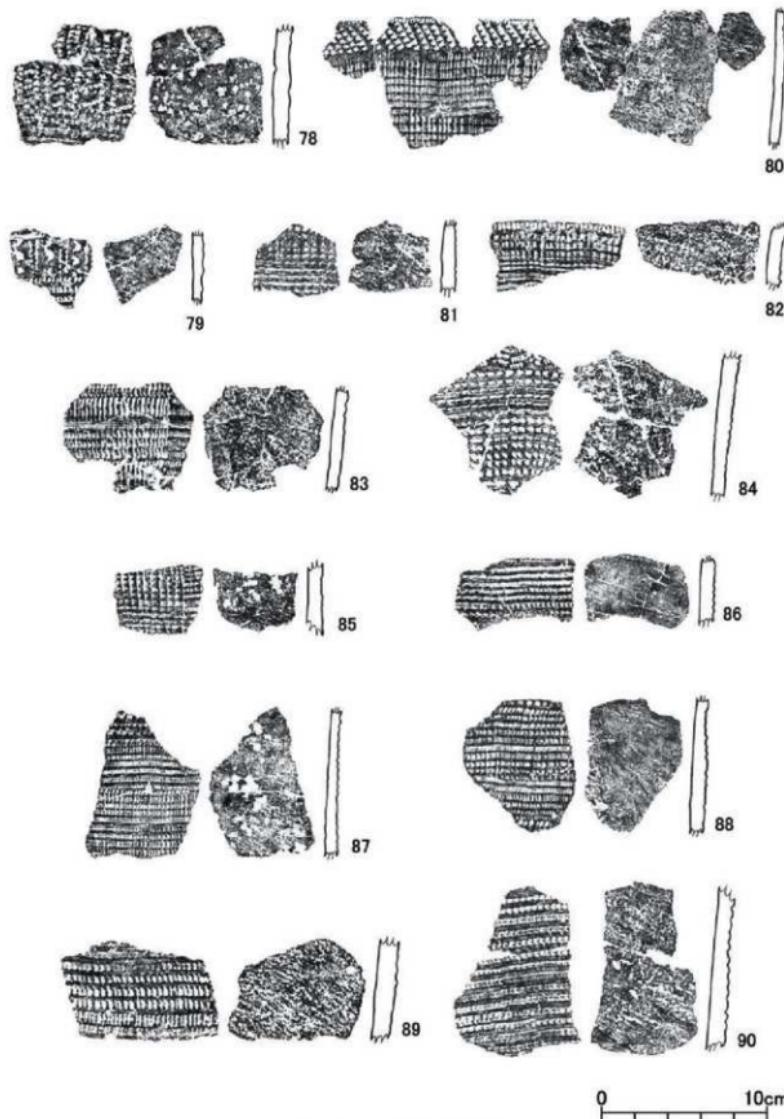
第20図 出土土器(3)



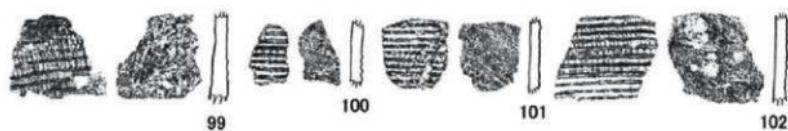
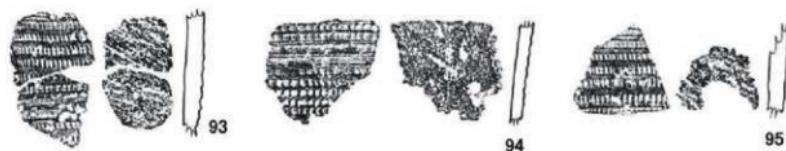
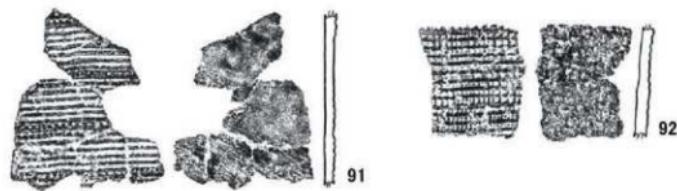
第21図 出土土器(4)



第22図 出土土器(5)

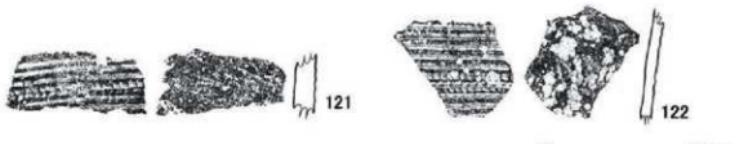
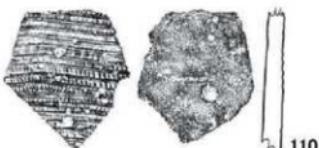


第23図 出土土器(6)



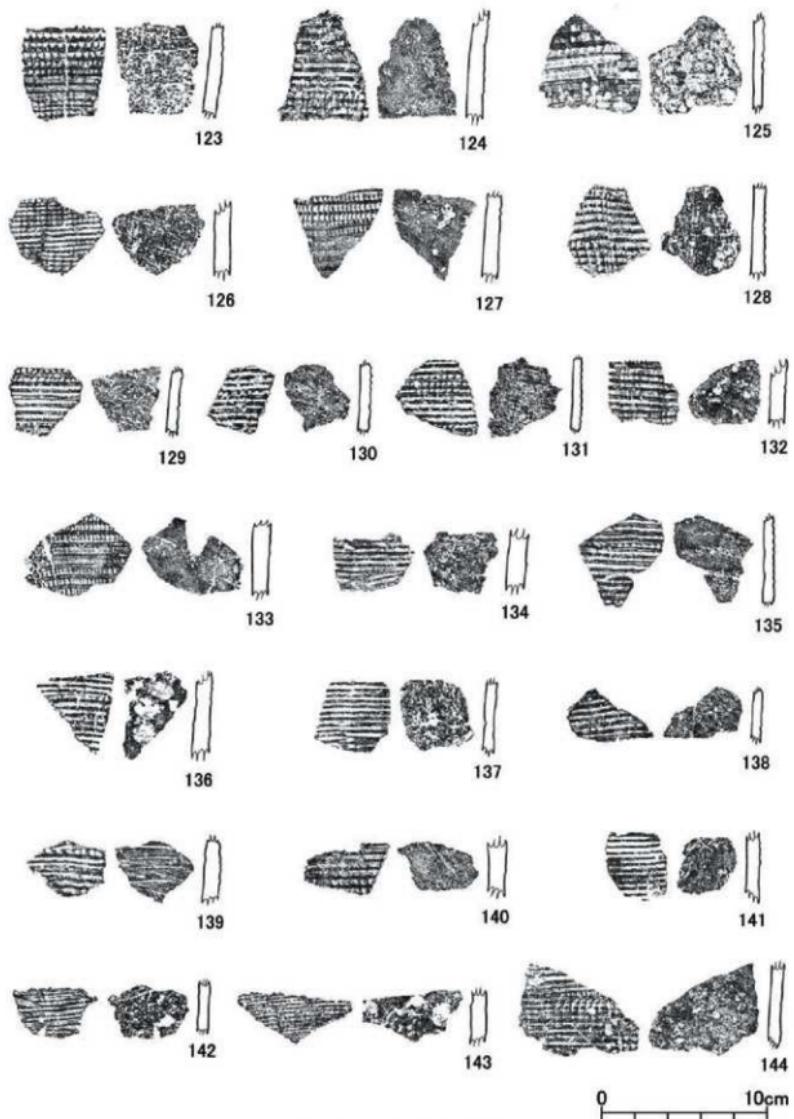
0 10cm

第24図 出土土器(7)

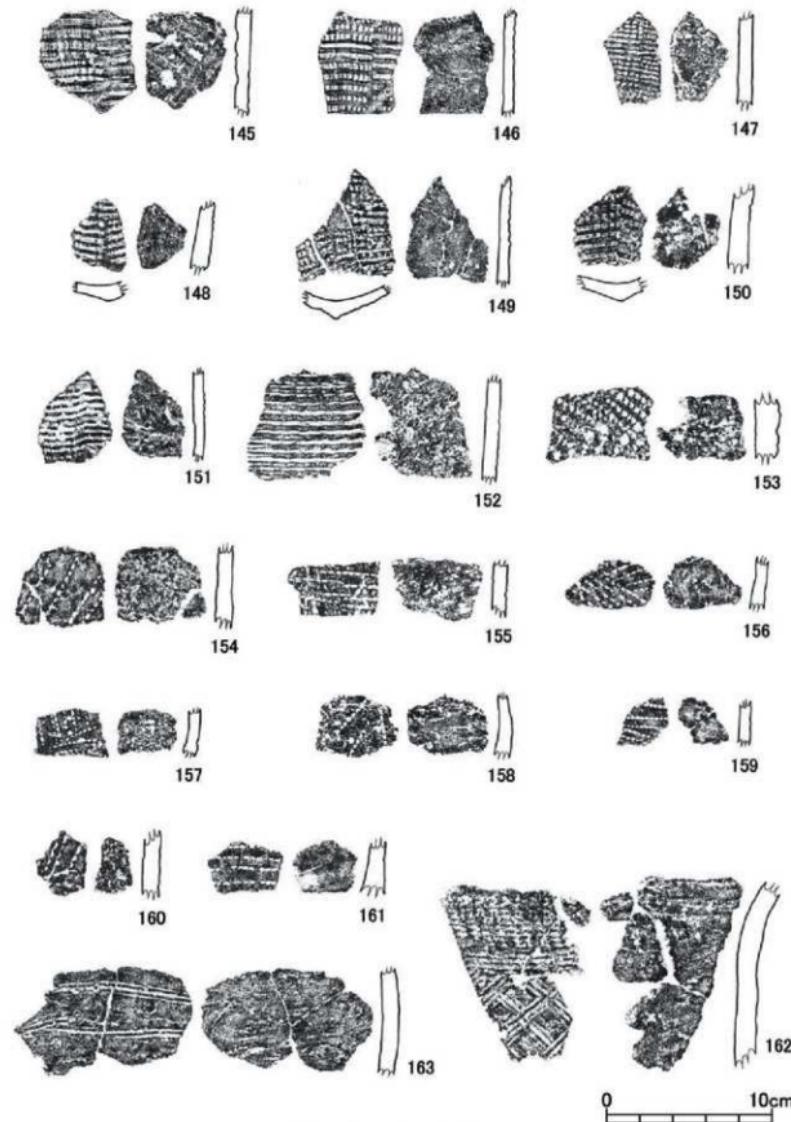


0 10cm

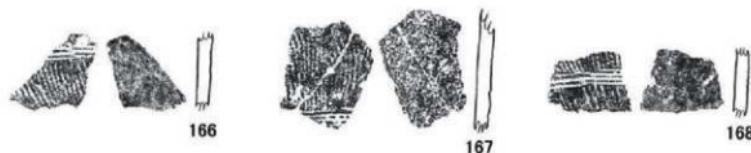
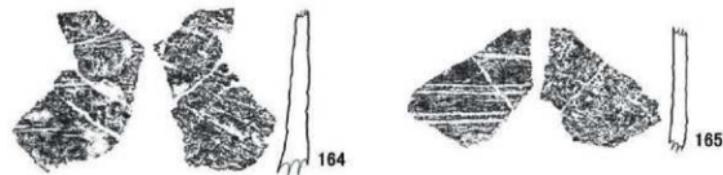
第25図 出土土器(8)



第26図 出土土器(9)

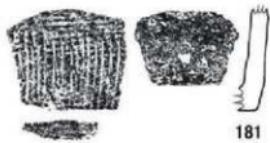


第27図 出土土器(10)



0 10cm

第28図 出土土器(11)



181



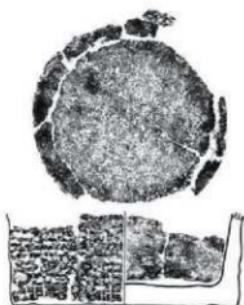
182



183



184



185



186



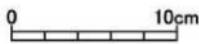
187



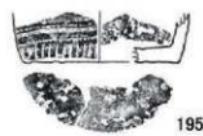
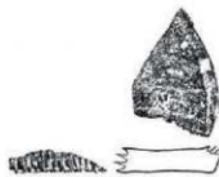
188



189

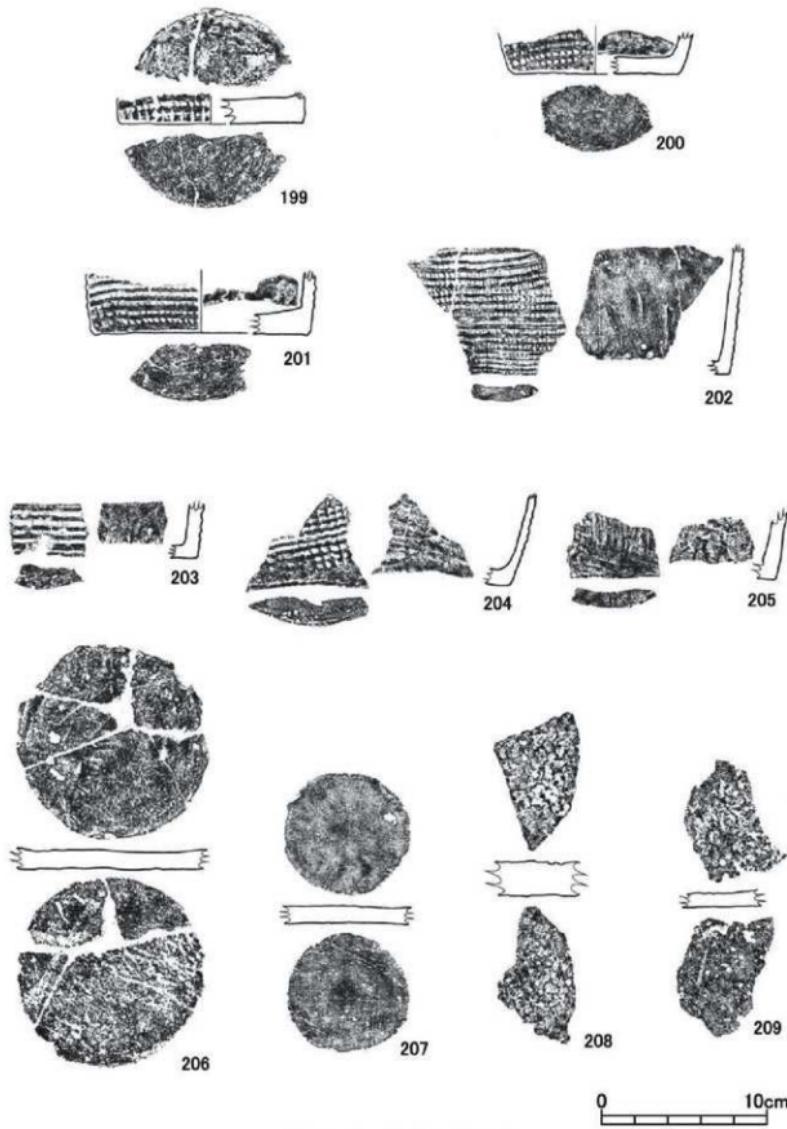


第29図 出土土器(12)

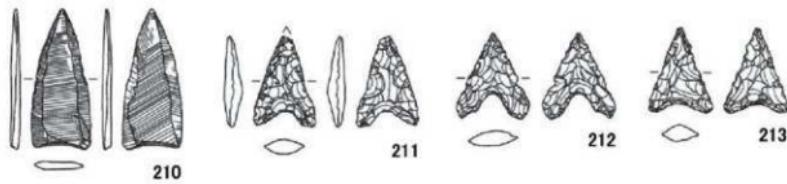


0 10cm

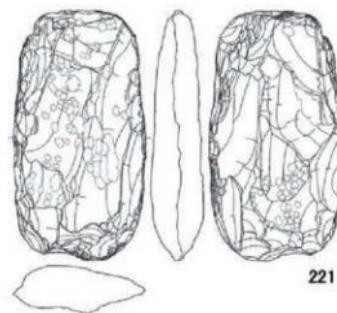
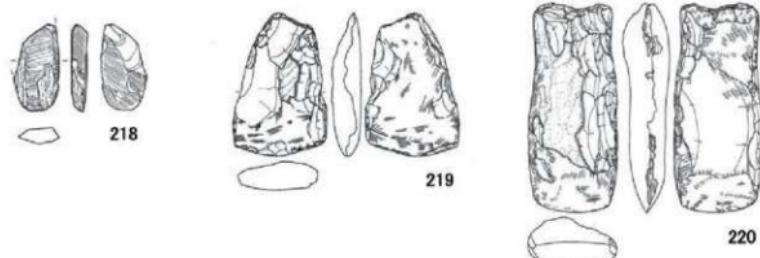
第30図 出土土器(13)



第31図 出土土器(14)

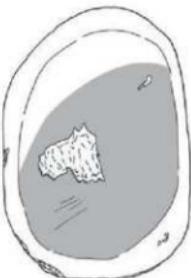
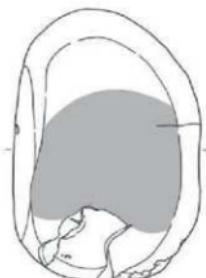


0 5cm

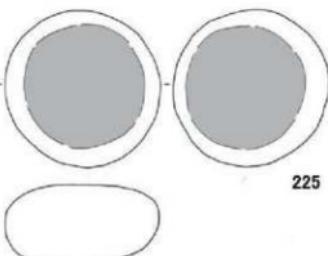


0 10cm

第32図 出土石器(1)



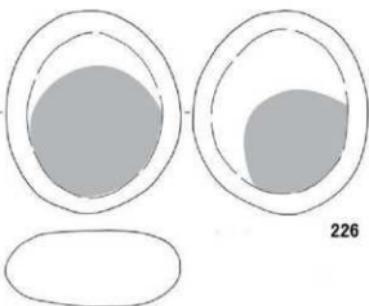
223



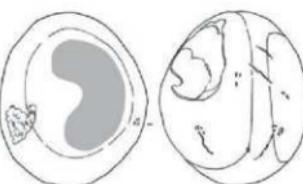
225



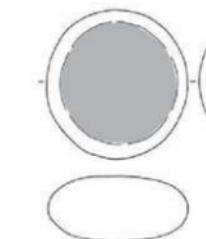
224



226



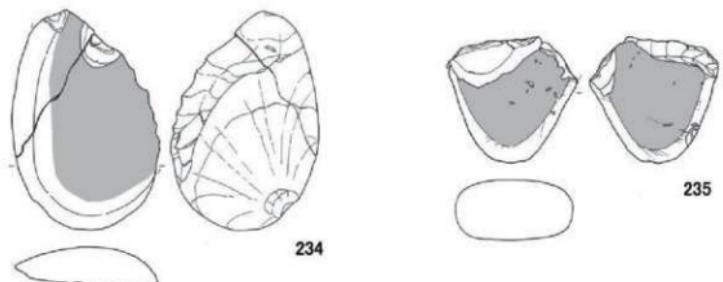
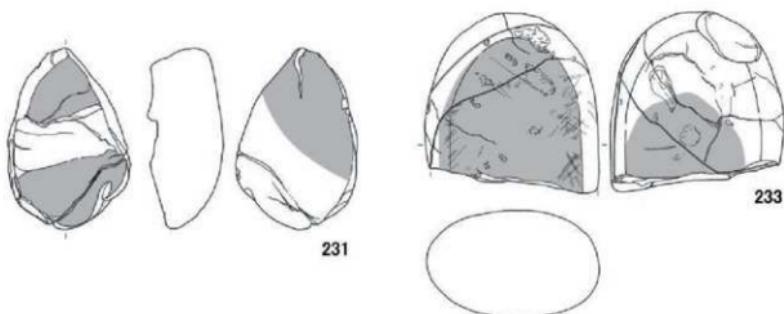
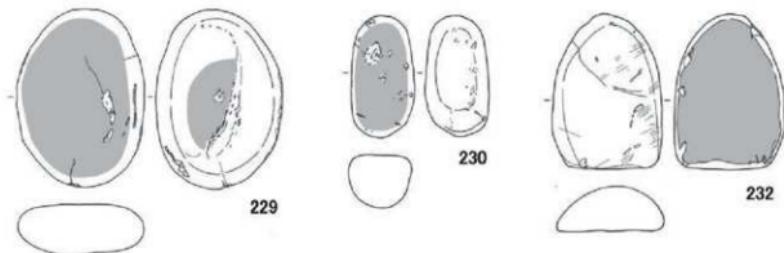
227



228

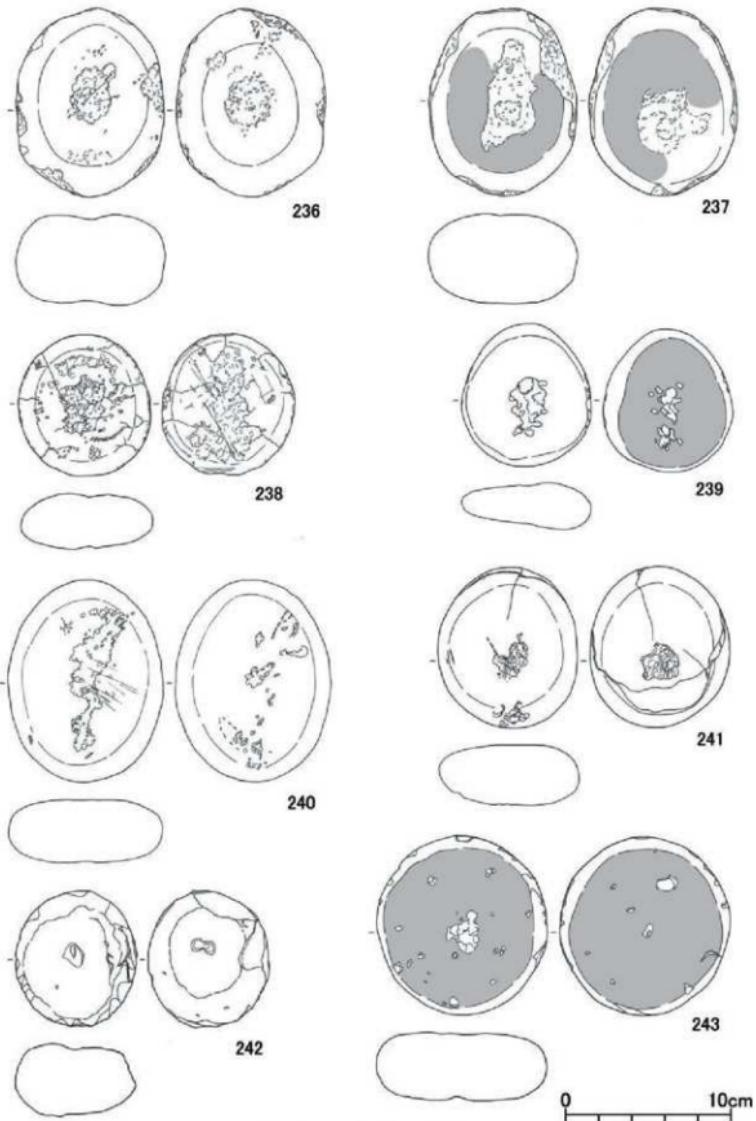


第33図 出土石器(2)

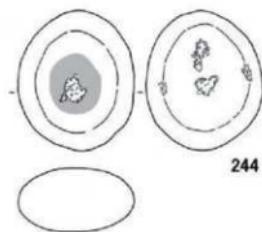


0 10cm

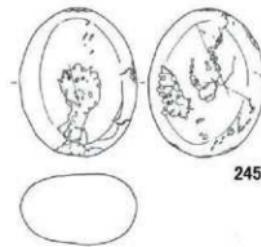
第34図 出土石器(3)



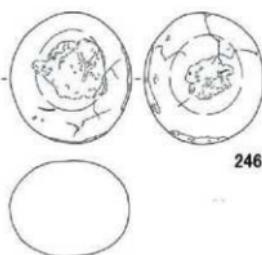
第35図 出土石器(4)



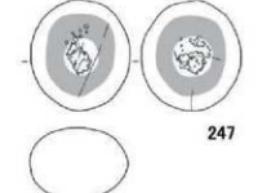
244



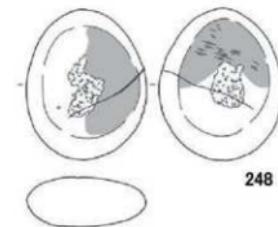
245



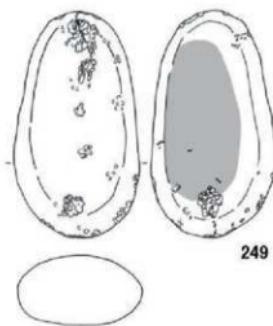
246



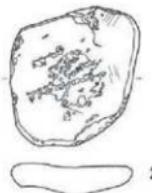
247



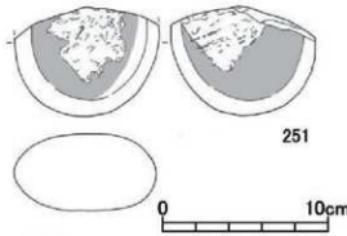
248



249



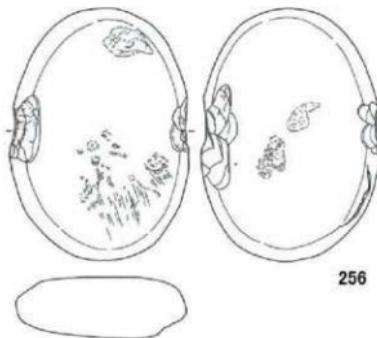
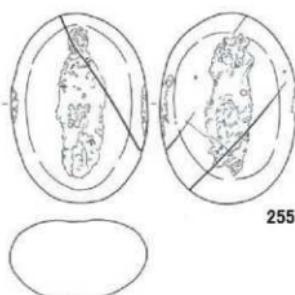
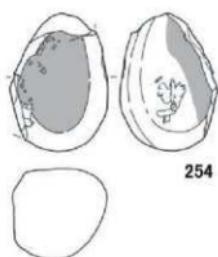
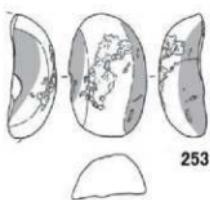
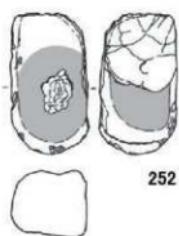
250



251

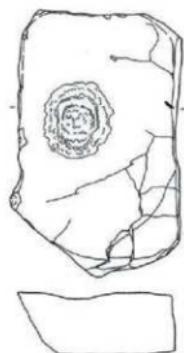
0 10cm

第36図 出土石器(5)

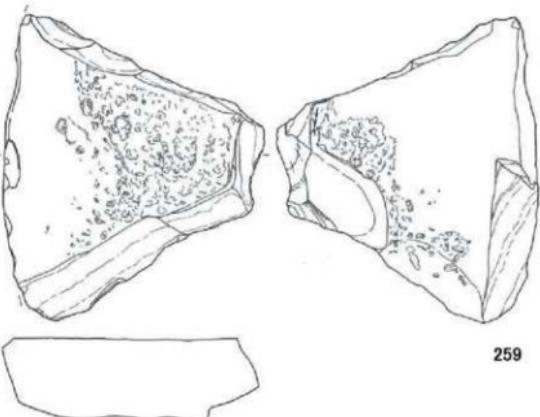


0 10cm

第37図 出土石器(6)



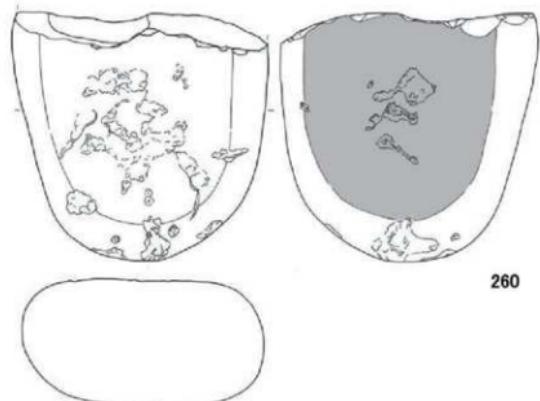
257



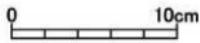
259



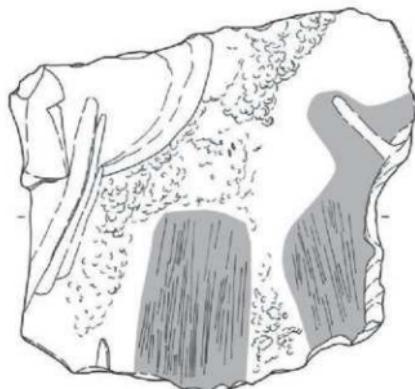
258



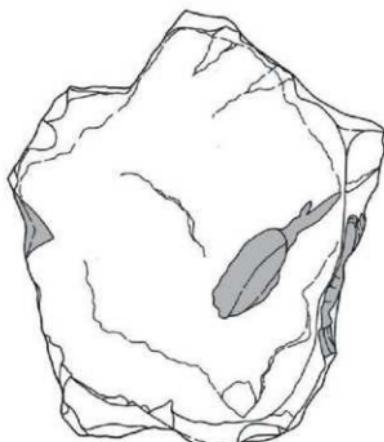
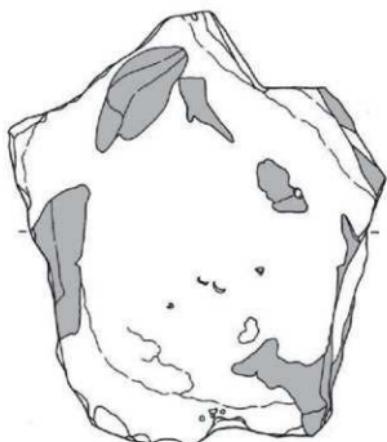
260



第38図 出土石器(7)



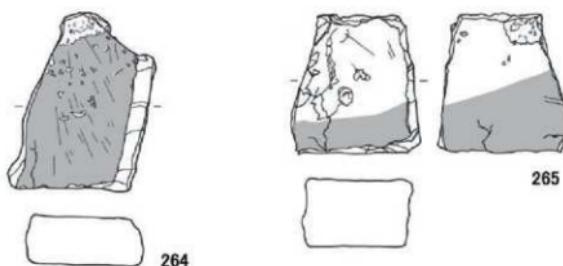
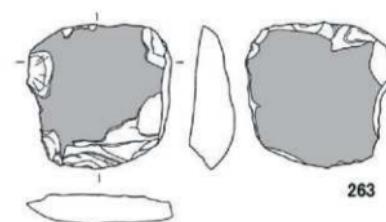
261



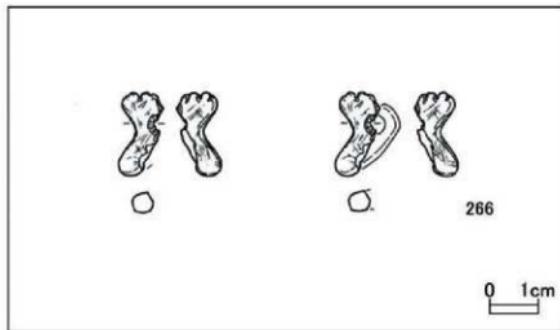
262

0 10cm

第39図 出土石器(8)



0 10cm



第40図 出土石器(9)

第1表 土器観察表(1)

検査番号	遺物番号	取上番号	出土層	出土区	部位	色調外面	色調内面
18	1	785	IV	12	胴部	赤褐	赤褐
	2	671-1	IV	14	口縁部	明赤褐	橙
	3	536,539,541,一括149	IV	15	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	4	715-1,一括3	IV	13	口縁部	明赤褐	橙
	5	721743	IV	13	口縁部	橙	橙
	6	760763	IV	13	口縁部	橙	橙
	7	704-1,704-2	IV	13	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	8	500	IV	15	口縁部	にぶい赤褐	にぶい橙
	9	486	IV	15	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	10	731733	IV	13	口縁部	橙	橙
	11	714	IV	13	口縁部	橙	橙
	12	25	IV	16	口縁部	淡橙	浅黄橙
	13	609	IV	14	口縁部	赤褐	にぶい赤褐
19	14	607	IV	14	口縁部	赤褐	明赤褐
	15	534	IV	15	口縁部	明赤褐	明赤褐
	16	761-1,761-2	IV	13	口縁部	灰褐	にぶい赤褐
	17	617	IV	14	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	18	513	IV	15	口縁部	暗赤褐	暗赤褐
	19	549	IV	15	口縁部	赤褐	赤褐
	20	162	IV	9	口縁部	橙	橙
	21	479,一括77	IV	15	口縁部	明赤褐	明赤褐
	22	484	IV	15	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	23	677-1,677-2,677-3	IV	14	口縁部	明赤褐	にぶい赤褐
	24	507	IV	15	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	25	756	IV	13	口縁部	明赤褐	にぶい赤褐
	26	648	IV	14	口縁部	明赤褐	暗赤褐
	27	533	IV	15	口縁部	明赤褐	にぶい赤褐
20	28	207	IV	10	口縁部	にぶい赤褐	明赤褐
	29	163	IV	9	口縁部	にぶい橙	橙
	30	750	IV	13	口縁部	灰褐	褐灰
	31	一括57	IV	13	口縁部	明赤褐	明赤褐
	32	583-1,583-2	IV	15	口縁部	赤褐	赤褐
	33	817	IV	11	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	34	602	IV	14	口縁部	にぶい赤褐	赤褐
	35	829,830-1,830-2	IV	11	口縁部	にぶい橙	橙
	36	2,3,一括1,一括2,一括3,一括4,一括5	IV	12	口縁部	赤褐	赤褐
	37	401,404,407	IV	2	口縁部	明赤褐	明赤褐
	38	283-1,283-2,283-3,285	IV	6	口縁部	にぶい赤褐	明赤褐
	39	828-1,828-2,845	IV	11	口縁部	にぶい橙	橙
	40	526	IV	15	口縁部	赤褐	にぶい赤褐
21	41	248	IV	7	口縁部	暗赤褐	にぶい橙
	42	251	IV	7	口縁部	赤褐	赤褐
	43	765,775,777	IV	13	口縁部	橙	橙
	44	524,一括168	IV	15	口縁部	明赤褐	明赤褐
	45	75-40,75-51	IV	9	口縁部	橙	にぶい赤褐
	46	825集中	IV	11	口縁部	にぶい赤褐	にぶい橙
	47	820集中	IV	11	口縁部	にぶい橙	橙
	48	291,一括9	IV	6	口縁部	明赤褐	赤褐
	49	一括8	IV	6	口縁部	明赤褐	明赤褐

第2表 土器観察表(2)

挿図番号	遺物番号	取上番号	出土層	出土区	部位	色調外面	色調内面
21	50	518-1～53, 518-55～61, 518-63～72, 518-74～91	IV	15	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	51	651, 一括122	IV	14	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	52	664	IV	14	口縁部	明赤褐	橙
	53	78	IV	9	口縁部	赤褐	明赤褐
	54	57	IV	8	口縁部	橙	赤褐
	55	249	IV	7	口縁部	にぶい赤褐	橙
	56	61	IV	8	口縁部	明赤褐	にぶい赤褐
	57	718	IV	13	口縁部	明赤褐	にぶい橙
	58	696, 697, 一括74	IV	13	口縁部	にぶい赤褐	にぶい橙
	59	713	IV	13	口縁部	橙	橙
	60	497-1, 497-2	IV	15	口縁部	赤褐	赤褐
	61	467	IV	16	口縁部	橙	橙
22	62	779	IV	13	口縁部	橙	明赤褐
	63	780	IV	13	口縁部	にぶい橙	橙
	64	573	IV	15	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	65	612	IV	14	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	66	182	IV	9	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	67	377	IV	1	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	68	一括70, 一括122	IV	13	口縁部	にぶい赤褐	赤褐
	69	274	IV	6	口縁部	にぶい橙	にぶい橙
	70	101	IV	9	口縁部	にぶい橙	浅黄橙
	71	840-1, 840-2	IV	11	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	72	2-12-2	IV	1	口縁部	にぶい赤褐	にぶい橙
	73	308	IV	7	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	74	813	IV	12	口縁部	橙	橙
	75	一括12	IV	15	胴部	明赤褐	暗赤褐
	76	808	IV	12	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	77	51	IV	8	胴部	橙	橙
23	78	768-2, 768-3, 768-4	IV	13	胴部	橙	橙
	79	698-1, 698-2	IV	13	胴部	橙	赤褐
	80	641, 642-1, 642-2, 一括128	IV	14	胴部	赤褐	暗赤褐
	81	824集中	IV	11	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	82	564	IV	15	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	83	485-1, 485-2, 485-3, 485-4	IV	15	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐
	84	557-1, 557-2, 558-1, 558-2	IV	15	胴部	赤褐	赤褐
	85	803	IV	12	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	86	473-1, 473-2	IV	16	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	87	739, 740, 一括104	IV	13	胴部	にぶい赤褐	にぶい橙
	88	67	IV	9	胴部	にぶい赤褐	にぶい橙
	89	487	IV	15	胴部	明赤褐	にぶい赤褐
24	90	512, 514	IV	15	胴部	赤褐	明赤褐
	91	75-7, 75-8, 75-11, 75-12, 75-47, 一括23	IV	9	胴部	橙	にぶい赤褐
	92	778-1, 778-2, 778-3	IV	13	胴部	明赤褐	にぶい赤褐
	93	482, 一括5	IV	15	胴部	明赤褐	明赤褐
	94	540-1, 540-2	IV	15	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	95	489	IV	15	胴部	橙	にぶい赤褐
	96	643	IV	14	胴部	明赤褐	赤褐
	97	815	IV	12	胴部	赤褐	赤褐
	98	36-1, 36-2	IV	16	胴部	にぶい橙	にぶい橙

第3表 土器観察表(3)

挿図番号	遺物番号	取上番号	出土層	出土区	部位	色調外面	色調内面
24	99	216	IV	10	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	100	75	IV	9	胴部	明赤褐	暗赤褐
	101	75	IV	9	胴部	橙	にぶい赤褐
	102	603	IV	14	胴部	明赤褐	にぶい赤褐
	103	211-1,211-2	IV	10	胴部	明赤褐	にぶい赤褐
	104	75	IV	9	胴部	橙	にぶい赤褐
	105	52-2	IV	8	胴部	橙	橙
	106	581	IV	15	胴部	暗赤褐	明赤褐
	107	75	IV	9	胴部	橙	にぶい赤褐
	108	450	IV	3	胴部	明赤褐	赤褐
25	109	585	IV	15	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐
	110	24	IV	16	胴部	橙	橙
	111	10,14	IV	17	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	112	752	IV	13	胴部	橙	橙
	113	530-1,530-2	IV	15	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	114	26	IV	16	胴部	にぶい橙	橙
	115	666-1,666-2,666-3	IV	14	胴部	明赤褐	赤褐
	116	8	IV	17	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	117	11,12	IV	17	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	118	610611	IV	14	胴部	赤褐	明赤褐
	119	6	IV	18	胴部	にぶい赤褐	にぶい橙
	120	110,一括12	IV	9	胴部	浅黄橙	にぶい橙
26	121	545	IV	15	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	122	809	IV	12	胴部	明赤褐	明赤褐
	123	642-1,542-2	IV	15	胴部	赤褐	にぶい赤褐
	124	729	IV	13	胴部	橙	明赤褐
	125	675	IV	14	胴部	明赤褐	赤褐
	126	437	IV	2	胴部	にぶい赤褐	明赤褐
	127	708	IV	13	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	128	805-2	IV	12	胴部	明赤褐	赤褐
	129	195	IV	9	胴部	橙	明赤褐
	130	75	IV	9	胴部	橙	にぶい赤褐
	131	75	IV	9	胴部	橙	にぶい赤褐
	132	259	IV	7	胴部	にぶい赤褐	にぶい橙
	133	751-1,751-2	IV	13	胴部	暗赤褐	灰褐
	134	272	IV	7	胴部	にぶい赤褐	暗赤褐
27	135	75-20,75-55	IV	9	胴部	橙	にぶい赤褐
	136	284	IV	6	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	137	303-1,303-2	IV	7	胴部	赤褐	赤褐
	138	75-6,75-16	IV	9	胴部	明赤褐	にぶい赤褐
	139	58	IV	8	胴部	明赤褐	明赤褐
	140	70	IV	9	胴部	明赤褐	明赤褐
	141	304	IV	7	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	142	一括14	IV	6	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	143	300	IV	7	胴部	赤褐	赤褐
	144	250	IV	7	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐
	145	849	IV	13	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	146	701	IV	13	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	147	392	IV	2	胴部	赤褐	赤褐
	148	一括143	IV	15	胴部	にぶい赤褐	明赤褐

第4表 土器観察表(4)

掲図番号	遺物番号	取上番号	出土層	出土区	部位	色調外面	色調内面
27	149	774-1,774-2,774-3	IV	13	胴部	橙	明赤褐
	150	529-1,529-2	IV	15	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	151	638	IV	14	胴部	明赤褐	明赤褐
	152	302	IV	7	胴部	にぶい赤褐	にぶい橙
	153	295	IV	6	胴部	明赤褐	明赤褐
	154	371-1,371-2	IV	1	胴部	明赤褐	にぶい赤褐
	155	811	IV	12	胴部	赤褐	にぶい赤褐
	156	447	IV	3	胴部	にぶい赤褐	暗赤褐
	157	30	IV	16	胴部	橙	橙
	158	381	IV	1	胴部	にぶい赤褐	暗赤褐
	159	376-1,376-2	IV	1	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	160	一括2	IV	5	胴部	橙	にぶい赤褐
	161	342	IV	0	胴部	明赤褐	赤褐
	162	839-1,839-2,839-3,839-4,839-5	IV	11	胴部	にぶい赤褐	にぶい橙
	163	187-1,187-2,192	IV	9	胴部	にぶい赤褐	暗赤褐
	164	196-1,196-2,203	IV	10	胴部	にぶい赤褐	暗赤褐
	165	792,794	IV	12	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	166	329	IV	0	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
28	167	330-1,330-2	IV	0	胴部	にぶい赤褐	にぶい橙
	168	316	IV	0	胴部	にぶい赤褐	にぶい橙
	169	215	IV	10	胴部	明赤褐	明赤褐
	170	198	IV	10	胴部	明赤褐	暗赤褐
	171	190	IV	9	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	172	191	IV	9	胴部	明赤褐	にぶい赤褐
	173	180	IV	9	胴部	にぶい赤褐	暗赤褐
	174	一括18	IV	9	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐
	175	一括20	IV	9	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐
	176	127	IV	9	胴部	橙	明赤褐
	177	297	IV	7	胴部	明赤褐	にぶい赤褐
	178	314	IV	7	胴部	赤褐	赤褐
	179	569	IV	15	胴部	明赤褐	にぶい赤褐
	180	421-1,421-2	IV	2	胴部	にぶい橙	にぶい橙
	181	832	IV	11	底部	にぶい橙	橙
	182	599	IV	14	底部	明赤褐	にぶい赤褐
	183	623	IV	14	底部	にぶい橙	明赤褐
	184	286	IV	6	底部	にぶい橙	にぶい赤褐
29	185	75-1,5,19,32,42,44,45,50,52,54,56,57, 58,64,66	IV	9	底部	橙	橙
	186	625-1,625-2,626,627,684	IV	14	底部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	187	一括48,一括49,一括50	IV	14	底部	赤褐	赤褐
	188	548	IV	15	底部	明赤褐	にぶい赤褐
	189	474	IV	16	底部	明赤褐	橙
	190	491-1,491-2,492	IV	15	底部	赤褐	赤褐
30	191	703	IV	13	底部	橙	橙
	192	665,673,674	IV	14	底部	明赤褐	明赤褐
	193	669	IV	14	底部	明赤褐	明赤褐
	194	465	IV	5	底部	にぶい赤褐	明赤褐
	195	748,一括84	IV	13	底部	にぶい橙	にぶい橙
	196	31	IV	16	底部	にぶい橙	にぶい赤褐
	197	770-1,770-2	IV	13	底部	橙	橙

第5表 土器観察表(5)

挿図番号	遺物番号	取上番号	出土層	出土区	部位	色調外面	色調内面
30	198	723,738,741,744,747,一括72	IV	13	底部	橙	にぶい赤褐
	199	621-1,621-2	IV	14	底部	赤褐	明赤褐
	200	60	IV	8	底部	橙	橙
	201	635	IV	14	底部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	202	716,一括86	IV	13	底部	橙	橙
	203	594	IV	14	底部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
31	204	680,一括110,一括126	IV	14	底部	赤褐	赤褐
	205	312	IV	7	底部	明赤褐	明赤褐
	206	787-1,787-2,787-3,787-4,787-5	IV	12	底部	にぶい赤褐	にぶい赤褐
	207	472	IV	16	底部	にぶい黄橙	にぶい褐
	208	711	IV	13	底部	にぶい橙	にぶい橙
	209	430	IV	2	底部	にぶい橙	にぶい橙

第6表 石器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	取上番号	出土層	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	石材
32	210	石鏃	9	89	IV	3.5	1.5	0.2	1.5	粘板岩
	211	石鏃	9	71	IV	2.25	1.6	0.4	1.0	頁岩
	212	石鏃	17	18	IV	2.2	1.9	0.4	1.0	頁岩
	213	石鏃	9	148	IV	2.2	1.6	0.4	1.0	頁岩
	214	石鏃	9	121	IV	1.5	1.7	0.4	1.0	チャート
	215	石鏃	9	103	IV	1.8	1.4	0.4	0.86	頁岩
	216	石鏃	8	47	IV	2.2	1.4	0.4	0.83	頁岩
	217	石鏃	9	193	IV	1.5	1.3	0.3	0.55	頁岩
	218	剥片石器	2	418	IV	5.2	2.7	1	20	頁岩
	219	石斧	1	369	IV	8.7	5.6	1.7	110	ホルンフェルス
33	220	石斧	12	858	IV	12.5	5.4	2.8	250	ホルンフェルス
	221	石斧	1	375	IV	15.1	8	3.2	490	千枚岩
	222	石斧	6	246	IV	10.1	6	2.8	262	ホルンフェルス
	223	磨石	9	123-1・2	IV	16.5	11.3	6	1655	砂岩
	224	磨石	13	719	IV	13.8	10.6	6.6	1342	アブライト
34	225	磨石	9	79	IV	9.4	9.4	4.8	600	砂岩
	226	磨石	9	122	IV	12.2	10.5	4.9	868	砂岩
	227	磨石	集石1号(1区)	3	IV	10.5	8.9	7.2	875	砂岩
	228	磨石	11	827	IV	9	8.5	3.9	425	砂岩
	229	磨石	3	442	IV	11	7.5	3	371	砂岩
35	230	磨石	2	426	IV	7.4	3.8	3.2	125	砂岩
	231	磨石	9	161	IV	11	7.4	4.8	438	砂岩
	232	磨石	13	776	IV	9.4	6.5	2.8	239	砂岩
	233	磨石	集石2号(13区)	2	IV	10.2	10.4	6.6	966	砂岩
	234	磨石	5	225-1・2	IV	13	8.7	3.2	445	砂岩
	235	磨石	10	219	IV	7.6	7.1	3.6	214	砂岩
36	236	磨石敲石	13	693	IV	11.5	9	5.5	864	砂岩
	237	磨石敲石	16	466	IV	9	11.3	5.4	782	砂岩
	238	磨石敲石	1	374	IV	8.5	8	3.4	296	砂岩
	239	磨石敲石	14	604	IV	8.6	7.8	2.9	276	砂岩
	240	磨石敲石	2	435	IV	12.2	9.4	3.8	660	砂岩
	241	磨石敲石	9	140	IV	9.7	8.5	3.8	411	砂岩
	242	磨石敲石	1	370	IV	8.2	7.3	4.4	325	砂岩
	243	磨石敲石	0	357	IV	10.7	10.3	4	700	砂岩

第7表 石器観察表(2)

捲番号	遺物番号	器種	出土区	取上番号	出土層	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	石材
36	244	磨石敲石	3	443	IV	8.5	7	3.8	322	砂岩
	245	磨石敲石	8	64	IV	8.9	7.1	4.3	370	砂岩
	246	磨石敲石	2	434	IV	7.9	7.2	5.7	418	砂岩
	247	磨石敲石	11	833	IV	6.7	6	4.3	237	砂岩
	248	磨石敲石	集石1号(1区)	4	IV	9.2	7.3	3	288	砂岩
	249	磨石敲石	集石1号(1区)	1	IV	13.7	7.5	4.2	565	砂岩
	250	磨石敲石	11	826	IV	8.4	7.4	2.1	168	砂岩
	251	磨石敲石	12	843	IV	6.6	8.7	4.7	365	砂岩
37	252	磨石敲石	0	335	IV	8.5	4.5	4	176	砂岩
	253	磨石敲石	9	94	IV	7.4	4.5	2.8	114	砂岩
	254	磨石敲石	9	68	IV	8.3	5.8	5.4	366	砂岩
	255	磨石敲石	6	276	IV	11.5	8.2	4.8	638	砂岩
	256	磨石敲石	13	707	IV	15.2	10.8	3.7	955	砂岩
38	257	台石石皿	集石2号(13区)	4-1~4	IV	15.8	10.2	4.2	1005	砂岩
	258	台石石皿	2	428	IV	14.9	9.8	5	1180	砂岩
	259	台石石皿	15	509	IV	18.5	15.8	5.2	1605	砂岩
	260	台石石皿	9	85	IV	14.9	15.4	7.9	2675	砂岩
39	261	台石石皿	集石3号(12区)	1	IV	30	33.8	4	7200	砂岩
	262	台石石皿	16	39	IV	35.2	30.5	7.1	8900	砂岩
40	263	砥石	4	420	IV	6.1	4	1.9	86	砂岩
	264	砥石	0	348	IV	7.3	4.9	2	119	砂岩
	265	砥石	9	135	IV	5.7	5.4	2.8	133	砂岩
	266	異形石器	8	45	IV	1.7	0.95	0.4	0.5	滑石

# **写真図版**





写真図版1 発掘調査状況(上段8,9区・下段12区)



写真図版2 遺物出土状況(上段0, 1区・下段9区)



1号集石



(炭化物付着状況)

2号集石



3号集石

### 写真図版3 集石造構



(左0区・右0区)



(左10区・右13区)



(左15区・右15区)

#### 写真図版4 土器出土状況



(左6区・右9区)

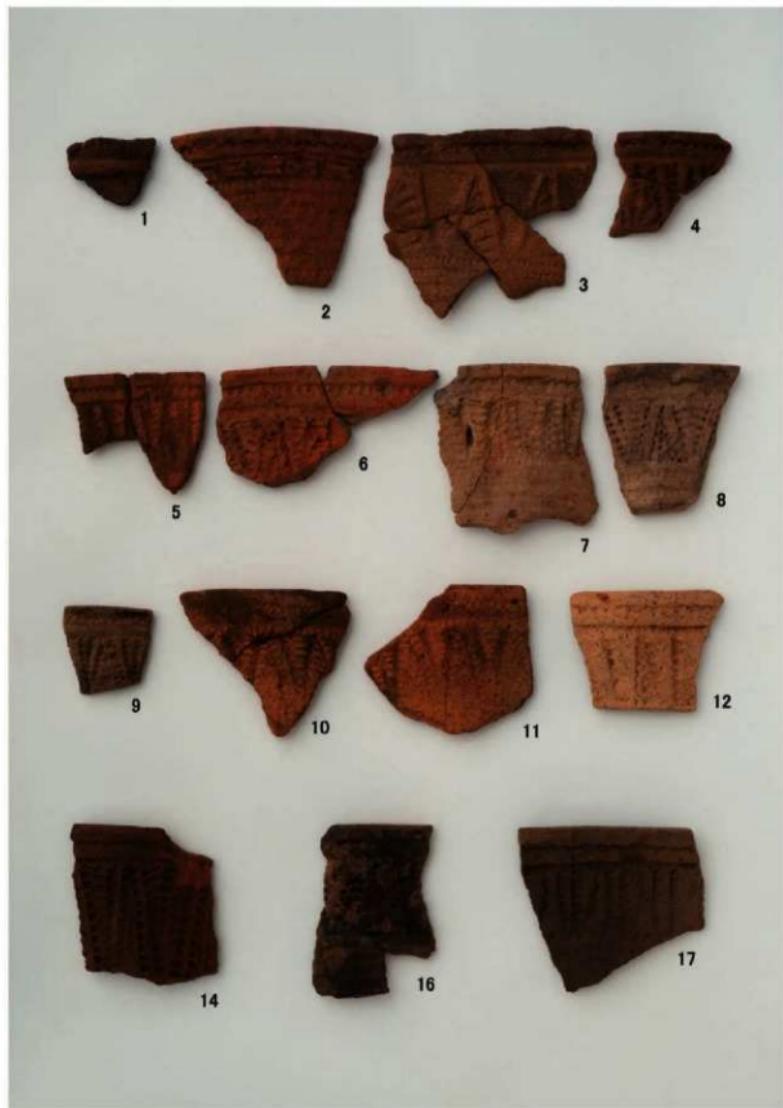


(左17区・右0区)

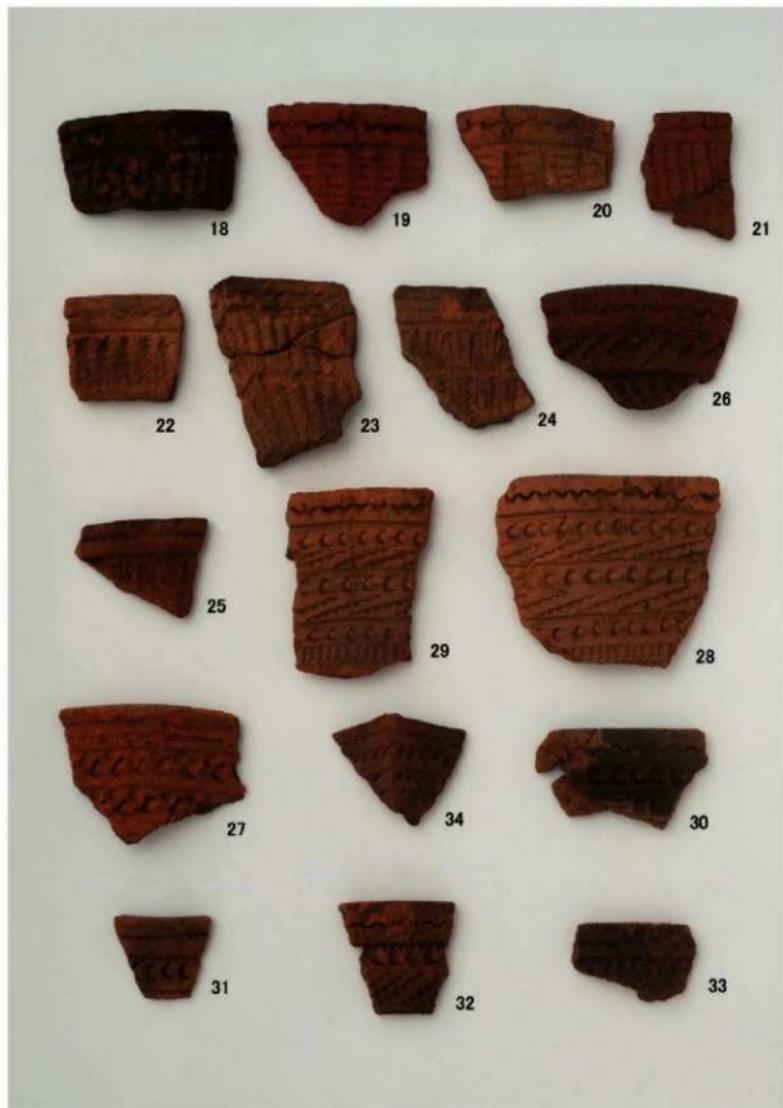


(8区石製装飾品出土状況)

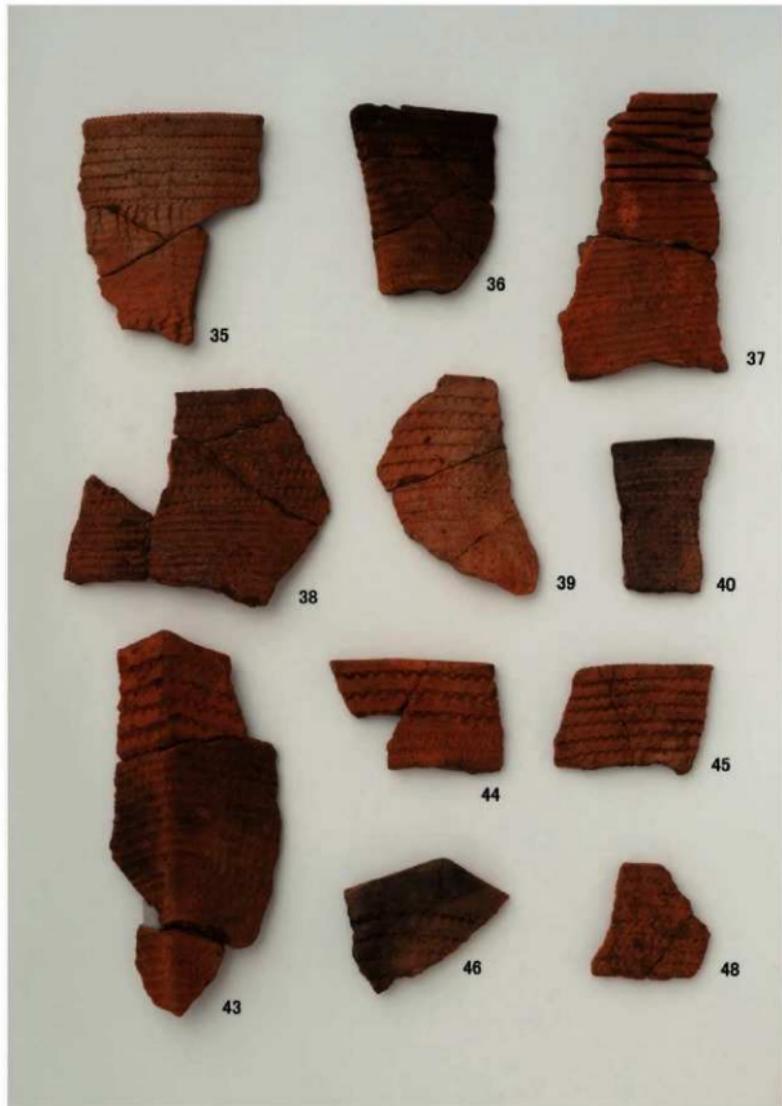
#### 写真図版5 石器出土状況



写真図版6 出土土器



写真図版7 出土土器



写真図版8 出土土器

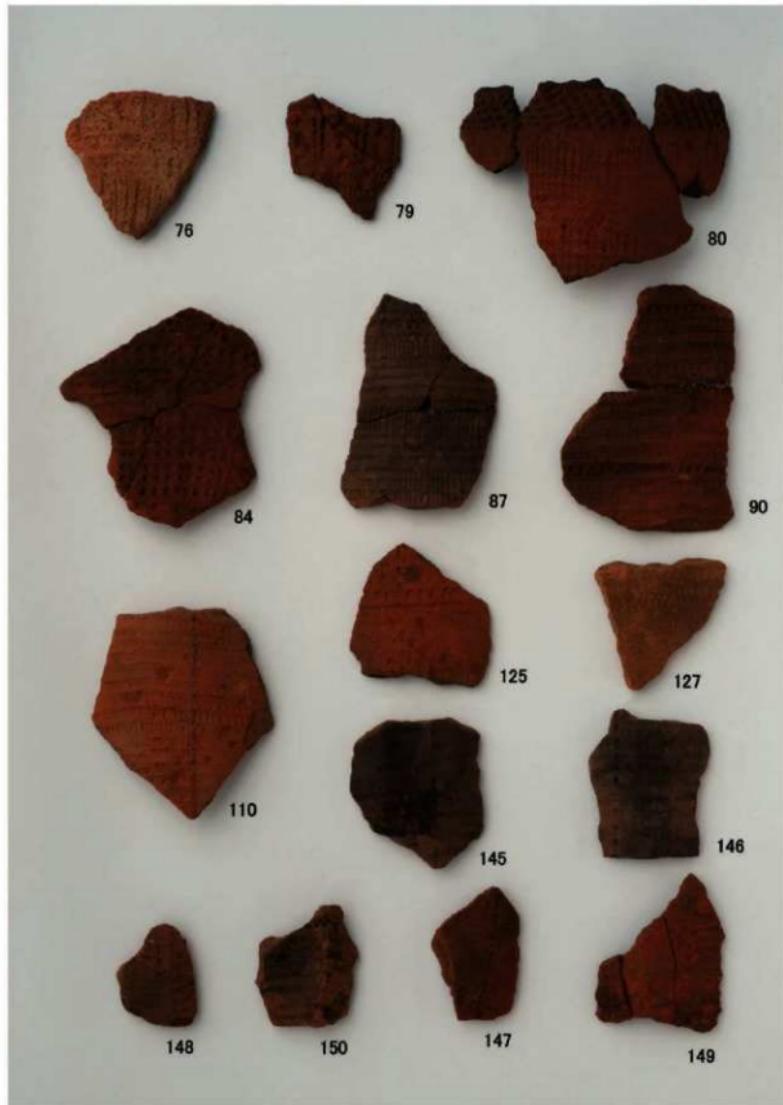


50

写真図版9 出土土器



写真図版10 出土土器



写真図版11 出土土器



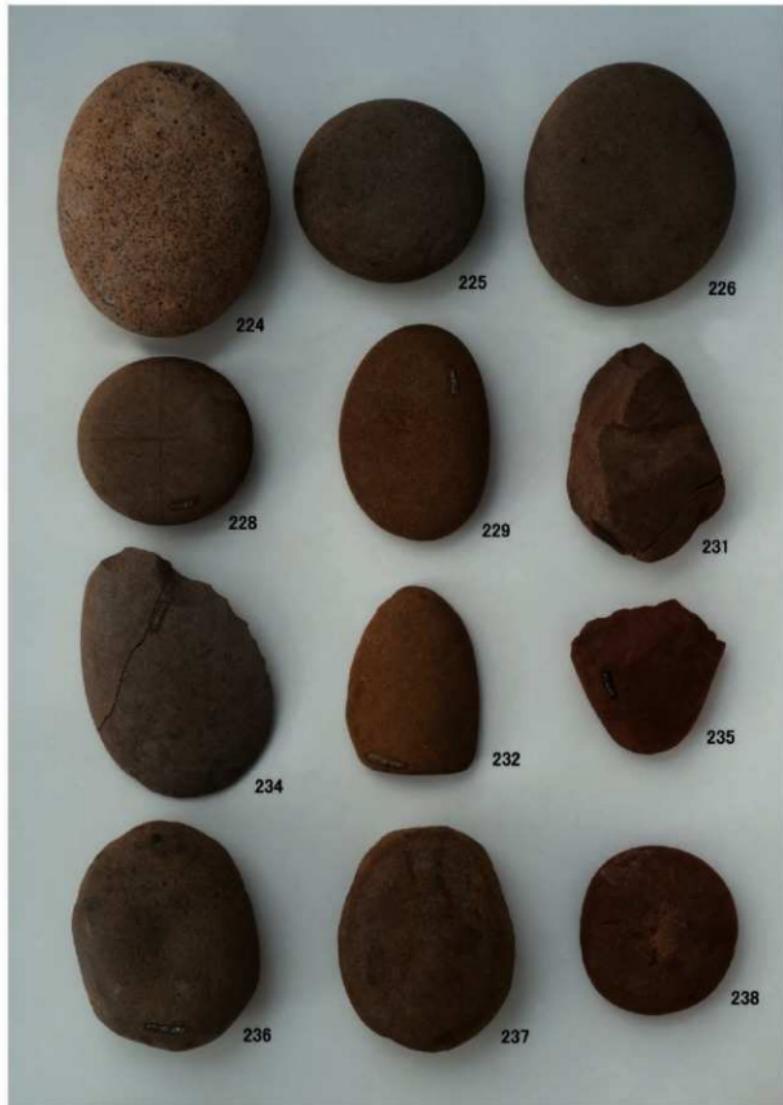
写真図版12 出土土器



写真図版13 出土土器



写真図版14 出土石器



写真図版15 出土石器



写真図版16 出土石器



写真図版17 出土石器



写真図版18 出土石器

## 第V章 科学分析

長迫遺跡・二石遺跡の発掘調査で採取した試料の科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。以下について、各報告書を掲載する。

●西之表市 長迫遺跡出土試料の植物珪酸体分析 パリノ・サーヴェイ株式会社

●西之表市 二石遺跡出土炭化材の年代と樹種 パリノ・サーヴェイ株式会社

## 西之表市 長迫遺跡出土試料の植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

長迫遺跡では、焼土が検出された。今回の分析調査では、焼土が形成された際の燃料材(特にイネ科草本類)の検証および周辺の古植生に関する資料を得るために、植物珪酸体(プラント・オパール)分析を実施する。

### 1. 試料

試料は、ⅣB 区で検出された焼土(対照試料) 試料 2 点である。

### 2. 分析方法

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壤中に取り込まれた後は、ほとんどが土壤化や搅乱などの影響によって分離し単体となる。しかし、植物が燃えた後の灰には、組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い(例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993)。そのため、珪化組織片の産状により当時の燃料材などに利用された植物が明らかになると考えられる。今回の土壤試料を観察したところ、いずれも植物の灰と思われるものは認められなかった。そこで、以下の方法により、珪化組織片の濃集と分離を試みた。

湿重 5g 前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、これらを含む珪化組織片を近藤(2010)の分類に基いて同定し、計数する。

結果は、検出された種類(分類群)とその個数の一覧表で示す。また、各分類群の出現率を基にした植物珪酸体群集を図化した。その際、出現率は短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

### 3. 結果

結果を表 1、図 1 に示す。

2 点の焼土試料からは、珪化組織片が全く認められない。両試料からは、イネ科を起源とする単体の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が認められ、機動細胞珪酸体の検出個数が多い。また、いずれの植物珪酸体も保存状態が悪い。

検出される分類群は両試料で同様であり、タケア科やスキ属などである。なお 2 つの試料を比較して、試料 2 の方がスキ属の短細胞珪酸体の検出個数が多く、機動細胞珪酸体も割合が高い。また、イネ科起源と共に樹木起源も多く検出され、クスノキ科やイスノキ属の葉部に形成される植物珪酸体である。

#### 4. 考察

4B区で確認された焼土では、2点の試料から珪化組織片が全く認められなかった。この結果から、焼土の燃料材(特にイネ科草本類)の種類を特定することは難しい。また、今回検出された植物珪酸体は、基本的に周辺植生に由来すると考えられる。

なお、試料2では試料1よりもスキ属の産出率が高い点が指摘される。スキ属は、集落周辺などの開けて乾いた場所に草地を作る種類が多い。また、葉部や桿(茎)の植物体は火が着きやすく、薪炭材の着火材として利用されることもある。これらの点を考慮すれば、スキ属の産状は、スキ属が着火材として利用されたことを反映するかもしない。

なお、2点の試料からイネ科起源と共に、樹木起源の植物珪酸体が多く検出された。現植生を考慮すれば、本遺構の周辺には当時クスノキ科やイスノキ属などの樹木が生育していたことが示唆される。

表1. 植物珪酸体分析結果

種類	4B区焼土	
	試料1	試料2
<b>イネ科葉部短細胞珪酸体</b>		
タケア科	30	16
スキ属	2	11
不明	27	28
<b>イネ科葉身機動細胞珪酸体</b>		
タケア科	81	82
スキ属	1	15
不明	59	52
合計	200	204
<b>イネ科葉部短細胞珪酸体</b>		
イネ科葉身機動細胞珪酸体	59	55
合計	141	149
<b>樹木等由来珪酸体</b>		
クスノキ科	**	**
イスノキ属	**	**

\*\*:多い

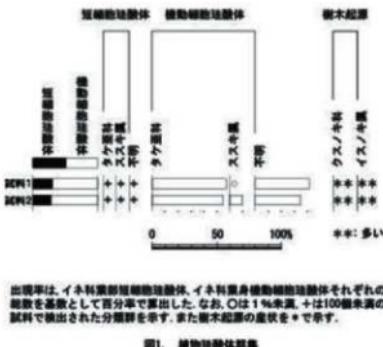
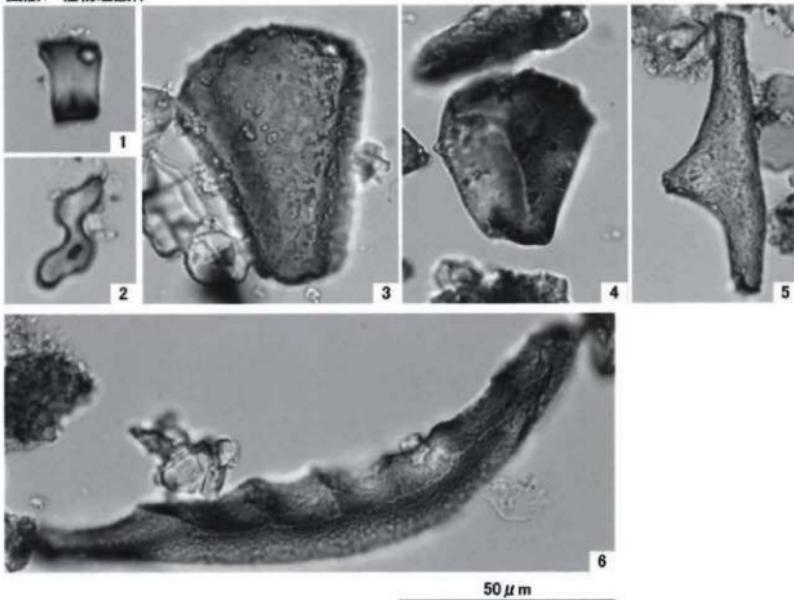


図1. 植物珪酸体群集

#### 引用文献

- 近藤謙三, 2010, プラント・オパール図譜, 北海道大学出版会, 387p.  
 パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993, 自然科学分析からみた人々の生活(1), 慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」, 慶應義塾, 347-370.

図版1 植物珪酸体



1. タケ亜科短細胞珪酸体(4B区北側壁面付近:ファイヤーピット覆土)
2. ススキ属短細胞珪酸体(4B区北側壁面付近:ファイヤーピット覆土)
3. タケ亜科機動細胞珪酸体(4B区北側壁面付近:ファイヤーピット焼土)
4. ススキ属機動細胞珪酸体(4B区北側壁面付近:ファイヤーピット焼土)
5. 樹木起源(イスノキ属)(4B区北側壁面付近:ファイヤーピット覆土)
6. 樹木起源(クスノキ科)(4B区北側壁面付近:ファイヤーピット覆土)

## 西之表市 二石遺跡出土炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

鹿児島県西之表市二石遺跡の縄文時代早期（塞ノ神式期）と考えられる集石遺構より出土した炭化材について、年代確認のための放射性炭素年代測定と、木材利用を検討するための樹種同定を実施した。

以下、結果について報告する。

### 1. 試料

試料は、13 区の集石 2 号から出土した炭化材 1 点である。試料とした炭化材は、0.5~1 cm 角の破片が 10 片ほど確認できる。実体顕微鏡による観察で、全て同一種と判断できた。年代測定には最大の破片 1 片（樹皮無し、5 年分）を用い、樹種同定には 2 番目に大きい破片を用いる。

### 2. 分析方法

#### (1) 放射性炭素年代測定

メス・ピンセットなどにより、根や土壌など後代の付着物を物理的に除去する。塩酸 (HCl) により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に最大 1 mol/L である。試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1 mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした  $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置 (NEC 社製) を用いて、 $^{14}\text{C}$  の計数、 $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$  濃度 ( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局 (NIST) から提供される標準試料 (HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1 等) の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$  は試料炭素の  $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを千分位差 (‰) で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

暦年較正に用いるソフトウェアは、0xCAL4.3 (Bronk, 2009) を用いる。較正曲線は Intcal13 (Reimer et al., 2013) を用いる。

暦年較正とは、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、及び半減期の違い ( $^{14}\text{C}$  の半減期  $5730 \pm 40$  年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもととなる直線は曆時代がわかっている遺物や年輪（年輪は細胞壁のみなので、形成当時の  $^{14}\text{C}$  年代を反映している）等

を用いて作られており、最新のものは2013年に発表された Intcal13 (Reimer et al., 2013) である。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるが (Stuiver & Polach 1977)、本報告では将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う比較、再計算ができるように、丸めない値(1年単位)も併記する。

## (2) 樹種同定

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の剖断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)や Richter 他(2006)を参考にする。

## 3. 結果

### (1) 放射性炭素年代測定

年代測定および暦年較正結果を表1、図1に示す。炭化材の補正年代(同位体効果の補正を実施した年代測定結果)は、 $8,740 \pm 25$  yrBP である。また、暦年較正結果(calBP)は、 $1\sigma$  が 9766–9629 cal BP(68.2%)、 $2\sigma$  が 9887–9846 calBP(5.5%)、9631–9585 calBP(89.0%)、9572–9564 calBP(0.9%)を示す。

## (2) 樹種同定

炭化材は、針葉樹のマキ属に同定された(表1)。解剖学的特徴等を記す。

・マキ属 (*Podocarpus*) マキ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は緩やか。樹脂細胞は早材部および晚材部に認められる。放射組織は柔細胞のみ構成される。分野壁孔は破損しており、窓状ではないことは確認できるが、形態の詳細は不明である。放射組織は単列、1–10細胞高。

表1. 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試料名	性状 (種類)	分析 方法 (%)	補正年代 yrBP	暦年較正年代			Code No.	
				誤差 cal BC	cal BP	確率		
集石2号	炭化材 (マキ属)	AAA	$-26.4 \pm 0.8$ $(8,740 \pm 27)$	8,740±25 $(8,740 \pm 27)$	cal BK 7817 – cal BC 7680 cal BK 7938 – cal BC 7897 cal BK 7882 – cal BC 7638 cal BK 7623 – cal BC 7615	9766 – 9629 calBP 9887 – 9846 calBP 9831 – 9585 calBP 9572 – 9564 calBP	0.682 0.055 0.890 0.009	pal-10580 PLD-34208

1)暦年の計算には、Oxcal4.3を使用。

2)yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4)AAAは、酸、アルカリ、酸処理、AAHは、アルカリの濃度を薄いた処理を示す。

5)暦年の計算には、補正年代に $\pm$ で示した、1の位を丸めた前の値を使用している。

6)年代測定結果の表記は、1の位を丸めたのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいうように、丸めていない値も付記している。

7)統計的に真の値が入る確率は $\sigma$  は 68.2%、 $2\sigma$  は 95.4%である

#### 4. 考察

集石 2 号の炭化材は、出土状況等から集石で使用された燃料材と考えられる。炭化材は、5~10mm 角の板状の破片が 10 片ほど確認できるが、実体顕微鏡での観察では全て同一種であった。

炭化材の年代測定結果は、補正年代が  $8,740 \pm 25$  yr BP、曆年較正結果 ( $2\sigma$ ) は 9887–9846 cal BP (5.5%)、9831–9585 cal BP (89.0%)、9572–9564 cal BP (0.9%) を示す。この値は、既存の結果から縄文時代早期の年代範囲に入っている、推定年代とも矛盾しない。なお、炭化材は樹皮の無い破片のため本来の炭化物の径や、年輪の詳細な位置関係が不明である。そのため、年輪の持つ古木効果により、実際の使用年代よりも古い年代を示している可能性もある。

また炭化材は全て同一種と考えられ、その樹種は針葉樹のマキ属に同定された。日本のマキ属には、イヌマキとナギの 2 種がある。いずれも暖温帯常緑広葉樹林中に生育する常緑高木である。

マキ属は生長が遅く、木材は針葉樹として重硬・緻密で強度や耐水性が高い。現在の分布を考慮すれば、マキ属は島内に生育していたと考えられ、周辺で入手が可能な木材を燃料材として利用したことが推定される。なお、本試料は破片化が激しく接合関係等も検討できない状況であるため、本来同一の個体が破片化したのか、同一樹種の複数個体が含まれているのか判断できない。

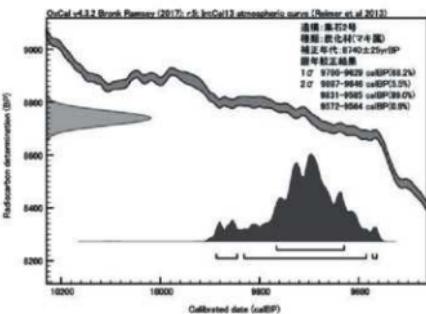
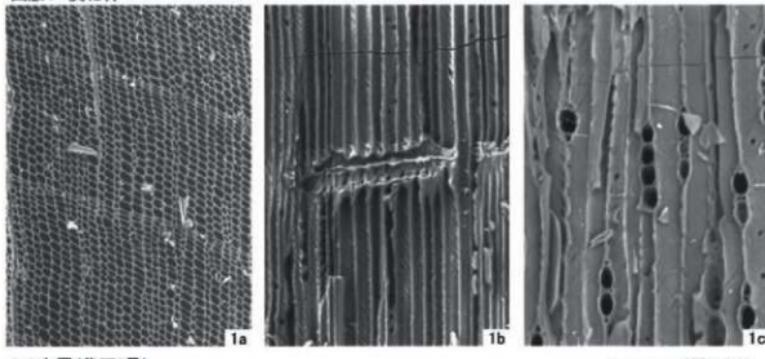


図 1. 曆年較正結果

#### 引用文献

- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織 地球社, 176p.
- Bronk R C, 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337–360. Reimer PJ, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk Ramsey C, Buck CE, Cheng H, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Haflidason H, Hajdas I, Hatté C, Heaton TJ, Hoffmann DL, Hogg AG, Hughen KA, Kaiser KF, Kromer B, Manning SW, Niu M, Reimer RW, Richards DA, Scott EM, Southon JR, Staff RA, Turney CSM, van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869–1887. Stuiver M & Polach A H, 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of  $^{14}\text{C}$  Data. Radiocarbon, 19, 355–363.

図版1 炭化材



1.マキ属(集石2号)  
a:木口,b:径目,c:板目

100  $\mu$  m a  
100  $\mu$  m b,c

## 第VI章 長迫遺跡・二石遺跡調査のまとめ

### 第1節 調査結果

調査を実施した長迫遺跡・二石遺跡は、発掘調査面積はそれほど広くなかったのにもかかわらず、縄文時代早期前葉を中心とした遺跡として多くの成果を得ることができた。本市では近年、縄文時代草創期・早期前葉の遺跡の発掘調査が相次ぎ、良好な資料の報告例が相次いでいる。特に平成17年から20年にかけて行った本市の三本松遺跡から施文スタイルがバリエーションに富む吉田式土器が多量に出土し、種子島における吉田式土器の変遷が明らかとなってきたが、今回の長迫遺跡・二石遺跡でも同様のバリエーションに富んだ吉田式土器が数多く出土し、資料の補強をすることとなった。また、特にこれまで類例の少ない、異形石器類が長迫遺跡から2点・二石遺跡から1点出土した事は、種子島及び南九州・西日本の縄文時代早期文化の研究に貴重な情報を与えてくれたといえる。

### 第2節 遺構

二石遺跡で集石が3基検出された。

1区、12区、13区の第IV層面から、それぞれ1基ずつである。構成される礫はほとんどが砂岩及び頁岩で構成されている。礫の中には、石器（磨石敲石類）などが含まれるものもあつた。

1区の1号集石は、検出状態から礫がばらけている感があり、集石の機能を終え意図的に解体されたものか、なんらかの理由で解体を余儀なくされたものである可能性も考えられる。

12区の3号・13区の2号集石は礫が非常に密集した状態での検出であった。13区の2号集石では、礫に炭化物が付着しており、炭化物の年代測定で8,740という数字がでており、この年代から、2号集石は遺跡の中心である吉田式土器が主体の時期ではなく、出土している塞ノ神式土器が主体のころに形成された可能性が高い。1号・3号集石については、集石周辺から吉田式土器が出土していることから、吉田式土器が主体の頃に形成されたものと思われる。

よって、2号集石のみ本遺跡の主体である吉田式土器の時期より若干時間差があり、集石が形成された時期は1号・3号集石よりは、いくらか新しいと考えられる。なお、長迫遺跡では遺構は確認されなかつた。

### 第3節 遺物

#### (1) 土器

長迫遺跡・二石遺跡から出土した土器は、縄文時代草創期・縄文時代早期に位置づけられるものである。以下、遺跡ごとに土器を概観する。

長迫遺跡出土土器は505点、二石遺跡出土土器は209点を掲載した。縄文時代草創期の隆帶文

土器が長迫遺跡・二石遺跡からそれぞれ1点の合計2点、他は両遺跡とも出土した土器は縄文時代早期に位置付けられるものである。なかでも、縄文時代早期前葉の吉田式土器がその主体占め、下剥峯式・塞ノ神式・押型文土器がわずかに含まれる。吉田式土器については、いくつかのバリエーションが見られるが、基本的に胴部に貝殻腹縁部を用いた押し引き文が施されるという共通項を持つ。また口縁部下にクサビ形の貼り付け文や、このクサビ形の貼り付け文が退化するが、あえてクサビを意識しているもの、さらにそのクサビのなごりと考えられる文様が展開されている。この口縁部下のクサビ形貼り付け文やなごりと思われる施文は貝殻腹縁部を縦位にして施文を行っているが、その後横位の施文へと変化がみられる。中には斜位の施文が見受けられるものもある。また、口縁部下位に貝殻腹縁部による横位の刺突文を1～3段めぐらし、その下位に大きな特徴である半截竹管状工具による「C」あるいは逆「C」字形の刺突文を2～5段程度ぐらす。胴部は貝殻腹縁による横位の押し引き文や貝殻条痕文を施すものもある。「C」状の施文は基本的にクサビ形貼付文の流れを系譜するものであると考えられる。また一部「C」状が崩れ、「爪形」状に施文が施されているものもある。大きな特徴として、「C」状の施文は、「C」状のみのものと、「C」状+斜位の貝殻腹縁刺突文が施されているものがある。内面には丁寧なナデ整形が見られる。さらに、口縁部下位に横位の貝殻刺突文を数条施すものは、本市「日守遺跡」出土土器のように、まとまって出土する例があることから、少なくとも前述した土器とは段階の相違があるものも含まれていると考えられる。これらの変化が施文パターンのバリエーションの変化のひとつであるのか、そして実際の時間的な変化にどう対応できるかは今回の調査では出土層から時間差を確認できなかったため、解明することができなかった。

## (2) 石 器

石器は長迫遺跡54点、二石遺跡57点を掲載した。出土層から、全て縄文時代早期に位置づけられるものである。石礫・石礫破損品・剥片石器・磨石敲石類・台石石皿類・砥石・異形石器・石製装飾品などである。両遺跡の石器の主体となるものが、磨石敲石類である。石材は全て砂岩である。磨石敲石類の多さから、遺跡を形成した人々が、植物性食料に相当依存していたと考えられる。また、特異な石器が長迫遺跡から2点(「J字型磨製異形石器・石偶」・二石遺跡から石製装飾品が1点出土している。3点とも類例が極めて少ないものである。

## 第4節 まとめ

長迫遺跡・二石遺跡からは縄文時代早期前葉の吉田式土器が多量に出土した。この吉田式土器については、本市の三本松遺跡で大量に出土し、その施文パターンのバリエーションの多さが報告されているが、長迫・二石遺跡においても、施文方法や器形(円筒形・角筒形)などにおいて、バリエーションに富んだ、吉田式土器が出土し、今後の研究においてその資料を補強する形となった。石器類では磨石敲石類の量が特に目立つ。島内では本市、立山地区内にある奥ノ仁田遺跡からも、同様に大量の石器類の出土報告例がある。奥ノ仁田遺跡は、

長迫・二石遺跡よりも古い縄文時代草創期の遺跡であるが、当時は国内でもいち早く温暖化が進み、豊かな照葉樹林が島内に繁茂し、その植物資源を食料としたため、植物食料を加工する磨石敲石類、台石・石皿類が他地域よりいち早く大量に使用されたものと考えられている。本遺跡から出土した、磨石敲石類、台石石皿類についても同様に植物性食料を加工するために、製作されたものであり、その出土量の多さから、植物性食料にかなりの割合で依存していた生活を送っていたことが推測される。いずれにしても、これまでの種子島の縄文時代のはじまりから早期にかけての発掘調査結果からは、磨石敲石類の出土量が全体のかなりの割合を占めることから、照葉樹林の恩恵を受け、利用していたことを改めて認識させるものである。

今回の両遺跡の調査で、特筆されるのは、これまで類例の少ない希有な石器類が3点出土した事である。いずれも吉田式土器に伴っての出土であり、縄文時代早期前半のものである。

1. J字型を呈する磨製の石器は、穿孔痕跡と擦切り痕跡が見られるが、その用途は不明であり、国内でも類例は見られない。

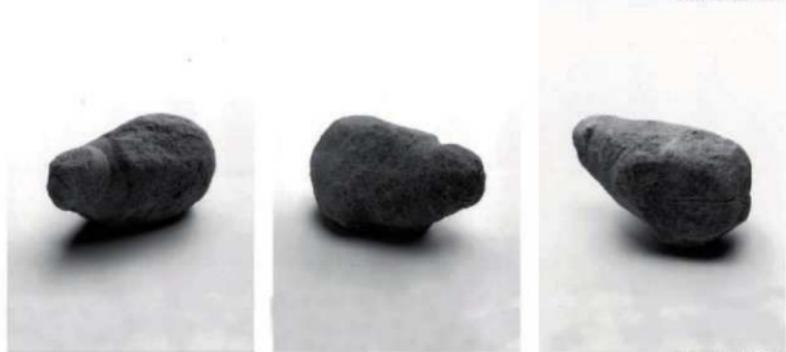
2. 石偶としたものは、全体に敲打で調整が行われており、底面は敲打により面取りが行なわれ、「座る・置く」ということを意識しているのではと思われる。そのため、「像」を意識し製作されたものではと思われる。この2点は実用品等ではなく、祭祀的な用途をもつものと思われる。2点とも類例が増加することによって、今後の再検証が必要と考える。

3. 二石遺跡から出土した石製装飾品については滑石製で、種子島には産しない石材である。頭部に3筋の切込みがあり、穿孔されている欠損品である。縄文時代の石製装飾品の出土例は、古くても縄文時代早期後半で縄文時代後期～晩期に盛行する。現時点で国内最古級の石製装飾品と見られ、縄文時代の装飾品を考えるうえで、極めて貴重な資料となった。

両遺跡が位置する台地の周辺には、三本松遺跡・日守遺跡・鍔ノ刃遺跡など吉田式土器が主体の遺跡が確認されており、これら遺跡の立地・関係性については、今後の課題である。



長迫遺跡 558



長迫遺跡 559



二石遺跡 266

写真図版19 出土石器

西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(28)

長迫遺跡・二石遺跡

発行日 令和2年3月

編集・発行 西之表市教育委員会

〒891-3193

鹿児島県西之表市西之表7612番地

TEL 0997-22-1111

印 刷 株式会社 種子島新生社印刷

〒891-3101

西之表市西之表16736-1

TEL 0997-22-0476